
東方雪天城 ~ The Curious Castle Of Snowscape.

冥界寺吹雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方雪天城 ～ The Curious Castle Of
Snowscape .

【Nコード】

N6885I

【作者名】

冥界寺吹雪

【あらすじ】

一つの異変を題材にしたお話です。以前考えた新しい異変の設定集を元に書かれたある意味自己満足の小説ですが、よろしければ立ち止まって読んでいって下さいませ。

第一話 東方雪天城（前書き）

序幕、物語の始まりにあたる部分です。

第一話 東方雪天城

博麗神社、境内。木々も草花もすっかり白銀に覆われ、物寂しさすら感じる季節。

紅白色に身を包む巫女、博麗霊夢は縁側でお茶を啜りながら息を一つづつとっていた。

彼女の仕事は専ら妖怪退治。人間に害を与えるような異変の解決もまた仕事。

報酬は賽銭制。仕事に見合った額の賽銭が人間から支給される仕組みである。しかし、仕事の内容には到底満たない額であることから先日賃上げ要求に人間の村に抗議した。取り扱ってくれなかった。

それでも彼女は僅かな信仰を頼りに妖怪を退治し、異変を解決し続けた。生活の為である、やむを得ない。

「霊夢！大変だ、異変だぜ！」

耳を押さえたくなる程声を大にして一人の少女が叫んだ。鳥居の下で堂々と胸を張る白と黒の衣装、霧雨魔理沙である。

「よっしゃ異変ね、待ちわびていたわ！」

「・・・やけにテンション高いな。いくら金がないからって悪いものの食い過ぎはよくないぜ」

「悪いものでもあるなら食べるわよ。ないからこうして異変が起こるのを待ちわびていたんじゃないの。いっそ私が異変起こして解決

しようかと思ったくらいよ」

賽銭箱の蓋を取り外し覗き込む霊夢の表情は死人より死んでいた。いつものことなので魔理沙はそれを見て見ぬフリをしつつ

「あー、で異変なんだが、何でも川の下流の方にでっかい城が建ったんだと。何でもダイミヨウとやらが住むような立派なものらしくてな、もしかしたら金銀財宝が眠っているかもしれないぜ」

「はあ？寝言は賽銭入れてから言いなさいよ。昨日草拾いに行った時はそんなものどこにもなかったわよ？第一お城が建ったくらいじゃ異変にも何にもならないわよ」

「そうなんだ、そこなんだよ今回の異変の肝は」

待ってましたとばかりに魔理沙が調子づく。

「その城、何でも一晩で建ったらいいんだ。今の所妙な動きは見せてないらしいが、あれはきつと何かやらかすぜ」

「どうして分かるのよ」

「長年の勘だ」

魔法の森を抜け、更に進めば魔理沙の言う川の下流に到達する。何もない寂れた土地で、野草も荒れ放題。それこそ霊夢のような野草狩りに来る以外で訪れる者はまずいない地域である。今の時期は地面も雪に覆われて白一色の世界、ますます来訪者はいない。

それが何だ、城が建っただ？そんなことをして誰の得になるというのだ。全く事実無根の疑わしい話である。

「・・・ふうん、まあいいわ。そこまで言うのなら様子を見てきてあげる。そのかわり何もなかったら魔理沙、分かっているわよね？」

神社だが、仏のような笑顔だった。魔理沙も真冬も真っ青になって凍り付きそうな程の戦慄を走らせながら必死に笑顔を作った。

霊夢にも心辺りが無い訳ではなかった。無論彼女の場合もその心辺りというのは単なる勘にすぎないのだが、幾度となく巻き起こる異変をそれによって解決したという話は語るまでもない周知の事実である。普段なら異変の原因も場所も分からないものであるが、今回は別、魔理沙の言う通りであれば、霊夢にも馴染みのある場所で起こっているという。

「横取りするんじゃないわよ魔理沙。私が解決してお賽銭貰うんだから」

「霊夢様の仰せのままに、だぜ」

冬着の支度も程々に、早速霊夢は川の下流を目指して歩みを進めた。

「号外号外、号外だよー！川の下流に突如として現れたのは何と城！所有権ば誰か、住人は？建てた目的は？一切が謎の超ビッグニュースだよ！詳細を確認したければ幻想郷最速の情報媒体、文々。新聞で決まりだよー！」

人間の里、射命丸文はその広場に陣取り群がる群衆に新聞を配っていた。テレビもラジオもない世界、新聞は情報を得る為の最適な手段だ。加えてこの文々。新聞は無料配布されているというのだから、人間が飛びつくのも無理はない。その分記事の信憑性も万全というわけではないのだが。

この文々。新聞は文が発行している不定期新聞で、常に彼女の気まぐれで記事を書く。大きな異変さえ起こればその全容を詳細に書き上げるのだが、それ以外の内容はもはや完全に趣味の領域である。それでもやはり異変の時に発行される『号外』は人間は勿論のこと一部の妖怪からも支持を得ていて、一度に発行する百部が小一時間で無くなる程である。

「あら、異変？こんな真冬に物騒ねえ。何があったのか教えて下さらない？その鴉天狗さん」

誰もいないことを確認してから一息つこうとした文は背後の聲に跳び上がりそうになる。

「あやや、八雲さんでしたか……。脅かすなんて、意地が悪いですねぇ」

八雲紫。彼女も文々。新聞を愛読している妖怪の一人だ。ただし彼女の場合は情報目的というよりは単に読物として楽しんでいる部分がある。どうしても知りたい情報があるならば、彼女は自らの有する能力を使えば事足りるからである。

しかし、今回はその限りではないようだ。

「珍しいじゃないですか、八雲さんが異変の内容に興味があるなんて……。もしかして大きな異変なんですかい？」

文が問うと、紫はけろりとした顔で新聞を受け取った。

「川の下流に突如巨大な城が現れた。建築の意図も目的も、誰の所有物かも一切分かっていない謎の建造物で、当方では新手の異変と見て調査を進めていく方針だ……。ふうん、なるほどねえ」

新聞紙を綺麗に折たたみ、文へ差し出した。

「あれ、いらなんでしょうか？」

「ええ。詳細が載ったらまた頂きにくるわ。だから調査、頑張りなさい」

「ああ、ええ、ありがとございやす」

紫の態度は普段と明らかに違っていた。まるで文の異変調査を心から応援しているような、そんな口調。首を傾げるも大妖怪に向かつて失礼なことは言えまいと、文は作り笑顔で礼をした。

「相変わらず社交辞令のうまい妖怪なこと。ま、期待しているわ」

そんな言葉を残しつつ、次の瞬間には文の視界から彼女は消えていた。

「……気になるなら自分の足で行けばいいのに」

太陽が昇り始めてまもなく、一部残った新聞をポシエットにしまいこみ、記事の再発行の為妖怪の山へと向かうのであった。

第二話 雪衣娘の白い翼（前書き）

ステージ1にあたる部分＋です。

第二話 雪衣娘の白い翼

白銀の道。北より吹き込む刃のように冷たい風は人間を凍えさせるのには十分である。連日の大雪で降り積もった雪は砂浜の砂のように空に舞い上がる。こと、巫女服姿で露出度高めの霊夢に關してはそのような幻想的な光景がただただ忌ま忌ましくて仕方ないというのが本音だ。

川の下流へは、一つ大きな山を越えなければならない。その山を指す霊夢は神社の境内を離れ、異変解決へ行くにはおなじみの道を歩む。季節によって、時間によって様々な色彩を描くキャンパスのようなこの道は、積もり積もった雪が冬の太陽の光を浴びて一面寶石のように輝いていた。

「で、何でついてくるのよ魔理沙」

紅白姿のすぐ後ろに張り付く白黒に、おはらい棒を突き付ける霊夢。慌てて両手を挙げて降参ポーズをとる魔理沙は

「何でつて、異変解決といえは霊夢に次いで私じゃないか。今回はきつちり霊夢をサポートして、がつつり解決してやるぜ」

「とか何とか言つて、どさくさに紛れて城のもの盗んでいくつもりなんですよに」

「ま、ままさかー。そそそんな訳ないんだぜ」

「声、震えてるわよ」

おはらい棒をそのまま額に押し込み魔理沙が抱え落ちしたところで、事は動き出した。

「こんな雪道の中どこへ行くっていうんだい？」

魔理沙も、霊夢も聞き覚えのない声に思わず顔を向けると、恐らくは先の声の主であろう一人の妖怪の姿が目に見え込んできた。

白い翼を器用にたたみ、雪にまみれた枯木の枝にとまるその姿、それはまさしく。

「ミステリアの親戚……じゃないわよね？あんまりこの辺りうるついでると悪い妖怪に焼鳥にされちゃうわよ」

「や、焼鳥！？……って、私はそこらの妖怪にやられる程やわじやないわ。それより自分の心配をしたらどうかしら？」

「そうだな、それより自分の心配をしたらどうだ」

妖怪は休めていた翼を広げ、霊夢達の前へと降り立つ。美しい翼の白は後方まで延々と広がる白銀の雪を連想させる色。” 相手が霊夢でなければ”、その姿だけで相手は魅了されてしまったことである。

「私はメルリア・パロット。真冬に鳴く白銀の天使とは私のことよ！」

その翼を最大限に広げ、霊夢を威嚇。……恐らくは威嚇のつもりなのであるが、当の霊夢は棒立ち無反応。たまらず魔理沙が

「……だってよ。知ってたか霊夢？」

「さあ、さっぱり」

一人へヴン状態のメルリアとやらはその真っ白な翼を羽ばたかせ、積もった雪と共に冷たい風を霊夢達に浴びせる。ある意味かなり恐ろしい攻撃に、霊夢はあの真っ白な翼を紅に染めたらどんなに楽しいかと考えつつ、特大の針を二、三本懐から取り出す。こんなものが一本でも刺さった日にはあの細身の妖怪の明日は二度と訪れないだろう、世間の厳しさを知るにしてもこれは余りに残酷すぎると考えた魔理沙は即座に小型の星型弾を二、三発発射。標的の額に見事クリーンヒットし、やがて沈黙した。

「これならいつだかの氷の妖精の方がよっぽど恐ろしいわね。中途半端な妖怪だわ」

「とりあえずその針しまつてやれよ。なんか怯えてるぜあいつ」

實力差が分かれば下手に手を出してくる妖怪はまずいない。特に若い妖怪は格上の相手に対して、自分が負けたら殺されてしまうのではないかという恐怖に駆られ怯える者も少なくないのだ。まさに目の前の光景がそれといえる。

「妖怪なりたての癖によくもまあああもでかい口叩けるわよね。．．
ねえあなた、何もしないからこっちにおいで」

「わわわ、私はただ、偉大なる人間様に涼んで貰おうと思っただけで．．．」

「へえ。こんな真冬に涼んでもらう、ねえ」

懐から取り出した包丁を見てすっかり縮こまり震えるメルリアに、魔理沙はため息一つ交えながらこれより始まる残酷な公開拷問から目を逸らすのだった。

地底、旧都。もはや妖怪すら住み着かなくなってしまったこの地に鬼はいた。恐ろしい程広い土地を、たつた三人の鬼が我が物顔で領地としているのだが、それを問いただそうとする者はいない。ここは忘れ去られた土地。誰もこの場所に興味など持たないのである。

「へえ、人間がここに。なんだ、あたしも会って見たかったねえ」
芯の通った声が、地底ではよく反響する。

「そうなんだよ。何とか酒は零さず戦ったんだけど、いよいよ打ち負かすことが出来なかったのさ」

恐らく酒の入っているであろう樽から杓ですくい、そのまま口へ豪快に運ぶ。

旧都とはいえまだ栄えていた頃のなごりか雅な建造物もところどころに残っており、鬼である彼女達はそれらをつまみに宴会を開くことも少なくはない。

「へえ、勇儀が打ち負かすことの出来なかった人間ねえ。こいつあ面白そうだ」

「どつする気だい？」

「なあに、ちよいと地上の萃香に怨霊がこれ以上増えていないか、確認をとってこようと思ってるね」

ししし、と歯を見せて笑うその姿に、勇儀と呼ばれた鬼も同じようにして笑みを零す。

「なるほど、我ら地底の鬼として職務をまっとうしようってー訳だ！そりゃ地霊殿の主も文句は言えまい！」

「人間、持ち帰って」

「おうよ、あんさんの口に合う粹のいい奴を手土産にしてやるさ」

三人の鬼はやがて二人と一人に分かれ、一人は宴会場となっていた旧都から忽然と姿を消した。雪の降る、冷たい朝だった。

第二話 雪衣娘の白い翼（後書き）

一面道中 冬立ちの道 } The First Day Of
Winter

一面ボス 白銀の雪衣娘 } Snow Bird

メルリア・パロット

種族：妖怪オウム鸚鵡

二つ名：白翼の鸚鵡

能力：風を操る程度の能力

スペルカード

風符「白銀の風」

嵐符「寒風ボラ」

鸚鵡「雪衣娘のオウム返し」

第三話 山道の怪

山登りはいつの時代も疲れるものである。

こと幻想郷の山々には未知の妖怪が徘徊していることも珍しくなく、普通の人間が訪れてはまず襲われてしまうので余程のことがない限りは近づくことはない。

とはいえ、あくまでそれは『普通』の人間の話であり、例えば麓の巫女であったり森の魔法使いであったりはお構いなしにずかずかと侵入してくる。そんな彼女等を見かけて襲い掛かる妖怪が後を立たず、後日目も当てられない状態で発見されるといった被害が今もなお絶えない。もはやどちらが襲う側なのか分からないレベルである。

「うーん、冬の山は殺人的な寒さねえ。魔理沙、なんかマジックアイテムで温まるモンないの？」

「あつたらとつくに出してるぜ」

かじかむ手に必死に息を吹き掛け回復を試みるも焼石に水。手袋の一つでも持つてくればよかつたわ、と後悔するも先立たず。彼女の苛々は最高潮まで達していた。

「あーもう！この苛々、何にぶつければいいのよ！妖怪の一匹や二匹出てこないかしら？」

「まあまあ。そう都合よく出てきてくれるはずが」

「でやー!」

聞き慣れない掛け声だった。霊夢が声に振り向こうにも時既に遅し、謎の人物に背中から突き上げられ、風に揺れる雪のようにその体は宙を舞った。

静かに落ちる体。雪に埋もれる霊夢。呆然と動かない魔理沙。そして事の元凶は静かに口を開いた。

「ふふふ、無用心な人間。山の妖怪の存在も知らずのこのこ歩み入るだなんて」

銀色に煌めく長髪に鋭く発達した爪を立て、山道に凜然と立つその姿は見紛うはずもなかった。

「蝦夷えみし 狼ろう、それが私の名よ」

僅かな風がその長髪を靡かせ、ふわりと宙で踊る。

「何も知らず山道を訪れる愚かな人間、今なら見逃してあげるからこの場から去りなさい。さもなければあなたもこの人間のように・・・」

「

見た。自らが倒したはずの人間が倒れていよう場所を。しかしてそこに人の姿はなかった。

魔理沙を見た。相変わらず固まった表情をしていた。まるでこれから地獄でも見るかのような恐怖に満ち溢れた顔を。

風が止んだ。それがいけなかったのか否か、強烈な悪寒が彼女の背筋を襲った。その刹那

「ねえ、あなた」

一切の感情がこもっていない、冷淡な声色。悪寒は背筋から全身に転移し、体は凍結したかのように機能しない。振り向こうにも首が動かない。言葉を発しようにも口が開かない。心臓はなおも動き続けてはいるが、事実上彼女は今現在死んでいるといっても差し支えない。

スタ スタ

一步、また一步と『それ』は近づいてくる。逃げようにも足は神経

が通っていないのではと思える程に脳の命令を受け取るうとしてくれない。

スタ・・・

足音が止む。それが何を意味するのか、彼女はがしりと腕を掴まれた時点で漸く理解することができた。同時に、首が自動で後ろを向く。

その光景は、百年近く生きてきた彼女にとって最も恐ろしいものだった。

「覚悟は出来てるんでしょうね？」

「ひ、ひ・・・あ・・・」

「なあ、霊夢」

「ん、なあに？」

満面の笑みで魔理沙に返答する霊夢。その反応に思わず一歩後ずさる魔理沙。

「その、なんだ。とりあえず着替えたらどうだ。巫女服って確か二色だったよな」

「少し黙った方がいいわよ。それとも、さっきの狼みたいになりたい？」

にっとな唇をつり上げる霊夢に固く口を閉ざす魔理沙。一言でも喋ってみろ、服どころかあの艶やかな黒髪も真っ赤に染まるに違いない。

・・・と、彼女達の目的は異変解決であって、野良妖怪の虐待や追いはぎなんかでは決してない。漸く山の中腹に差し掛かったといつたところで、目的地はまだまだ遠い。二人は凍える体を震わせながら、柔らかで不安定な雪を一步一步踏み締めるのであった。

「さて、どこかにおいしい記事は転がってませんかね〜と・・・
おや？」

下流へ続く山の上空、新聞の記事を探し飛び回る射命丸文は一つの人影を発見した。

「あれは……。ふうむ、こんな山で何をしているんでしょうか」
分からなかったらすぐ取材、突撃インタビュー！が彼女の性分だが、しかしこのときだけは地上へ降りようとはしなかった。それどころか、折角記事になりそうなネタを見つけたというのに唸りをあげて腕を組んでいる。

インタビューをしようか、それとも諦めて城を目指そうか。彼女は暫く唸り続けた揚句

「あのスキマ妖怪にも釘刺されてますし、さっさと城の取材にいきますかね」

等という始末。

その後も暫くは上空から様子を伺っていたが、特にこれといった動きを見せないことを確認すると結局取材を断念し、カメラ片手に進むべき方角へ頭を向けるのだった。空からはいいよ、白く冷たい花びらの舞い始めていた。

第三話 山道の怪（後書き）

二面道中

獣の足跡

）

The Proof Of Be a

s t

二面ボス

旅の背中にご用心

蝦夷えみし 狼ろう

種族：送り狼

二つ名：冷酷な山の狩人

能力：自然に姿を隠す程度の能力

スペルカード

襲符「グロームアサルト」

突風「藁木サイクロン」

寓話「虚言者を狩る爪」

第四話 焔に照らされた道（前書き）

魔理沙が徐々にに空気になっている？いや、まさかまさか！。

第四話 焔に照らされた道

もうすぐ山を抜けようかというところまで進んだ異変解決のエキスパート達であったが、薄々と奇妙な変化を感じ取っていた。

まず、先刻まで真っ白に染まっていた大地から緑の野草が顔を出し、落ち葉が腐食しはじめた地面が剥き出しになっていること。

そしてこちらの方が問題なのだが、体感でわかるほど明らかに気温が上昇していること。前者の変化は恐らく後者に依存していると思われるが、当の二人はそんなことはお構いなしでテンションを高めていた。

「やっぱり日頃の行いがよかつたんでしょうね。見なさい魔理沙、半袖でもへっちらよ！」

真っ赤な巫女服を脱ぎ捨て薄手のものに着替える霊夢。この冬場によくそんなもの持ってきたな、と魔理沙が問うと

「私の勘は的中するものなのよ」

とのことである。妖怪退治なんてやらずに予言者になってもなった方が信仰集まるんじゃないか？なんてとても口には出せず、流石だなと一言短く返す魔理沙に霊夢は更に機嫌を良くした。

「今の私なら例え妖怪がでてこようと一瞬で消し飛ばせる自信があるわ」

「物騒な発言は控えようぜ。・・・あたあの狼のこと思い出した」

彼女が何を見たのかは二人だけの秘密である。

「待ちくたびれたぞ、人間！」

飛んで火に入るなんとやら、霊夢からしてみればその声はまさにそれであった。だが、その姿を確認した途端に唇を噛み締め、小さくだが舌打ちまでする。

「こうして空気を温めておけばのこのこやって来ると思ったが、はっは！まさかこんなにもうまくいくとは」

「あんた・・・鬼ね」

呟く程度の音量で霊夢は問う。それに対して対面の妖怪は大きく頷いた。

「いかにも！あたしは鬼の四天王の一人、焔ほむら 炎綺えんき。おまえさんが麓の巫女、博麗霊夢だな」

「あら、私を知っているの？じゃあ何、わざわざ私に退治されにこんなところまで？」

言葉とは裏腹にあくまで霊夢は慎重だった。何故なら彼女は鬼を二

度相手にしたことがあつたからだ。

一人は伊吹萃香。幻想郷の人間や妖怪がひそかに神社に集まるよう仕向け、連日のように宴会を開かせた騒動の主犯である。この時は紫の力を借りて発見にこぎつけ、全力で戦い何とか勝利することができた。

もう一人は星熊勇儀。地霊殿に赴く際に出会った妖怪だが、片手の酒を零さずに戦うという常識はずれのルールを自分に課し、それでも霊夢と互角かそれ以上に渡り合った相手である。

つまり、霊夢の中で鬼＝強敵という等式が自然と成り立っていると行って差し支えない。勿論同じ経験をした魔理沙にも言える為彼女も顔をしかめてはいるが、どこことなく安堵の表情にも見えたり見えなかつたりする。よほど先刻と同じ惨劇を見たくないらしい。

「たは！流石は勇儀と互角にやりあつた人間だ、言うことが違うねえ。なんならどうだい、もし私に勝つことが出来たらいいものをやるう」

「いいもの？なんだぜ？」

物と聞けば即座に目を輝かせるのが魔理沙である。

「そいつは勝つてからの楽しみだ。何ならその黒いのも一緒に相手してやってもいいぞ？」

「とんでもない、魔理沙、あんた手出すんじゃないわよ。・・・地底でさんざん目の前をうるちよろしてくれた勇儀のお返しだわ。一対一、正々堂々勝負よ」

「正々堂々か・・・なかなかいい言葉を使いやがる。人間側から言われたんじゃあ断る道理はない、この焰炎綺、全力でお相手いたそうぞー！」

新聞記者の射命丸文は、例の城を眼前に首を45度にして見上げていた。昼間にも関わらず辺りは鬱蒼とし、降りしきる雪が体温を容赦なく奪う。長くは留まれそうもない、早いとこと城に入るか撤収するかの一択を迫られていた。

「これが渦中の城ですか・・・流石に大きいですね」

「本当ねえ。流石に私もびっくりしちゃっわ」

・・・。

しばしの沈黙の後、出来ればこのまま城の観察をしていたいところではあるが恐る恐る後ろに首を捻ると、案の定そこには彼女が立つ

ていた。

「八雲さん・・・また突然ですねえ、こんなところまでどうしたんですか？」

「あら、誰かさんに言われた通り、気になったから自分の足できたのよ?」

思わず苦笑いする文。下手な発言はこの妖怪の前では控えた方がいいだろう。

「ま、足は使ってないけれど」

傘に降り積もった雪をくると一回転させて払う紫も、文がしていたのと同じようにして城を見上げる。戦国時代を思わせるその風貌はしかしてまだ新しく、その時代にタイムスリップしたかのような錯覚さえ覚える程。こんな城が一晩にしてここに建たねばならなかった理由は?そして、誰がこのような大胆な行動を?文にとって全てが謎の異変であったが、その方が調べ甲斐があるってものである。

・・・まあ目の前に約一名、怪しい人物がいますけど。

「で、調べるの?中に入るの?」

「まずは情報収集からですね。付近の人や妖怪に聞き込みをしようと思っています」

手早く手帖とペンを取り出す文。目の前には視線を合わせようとこ

ちらを直視してくる紫の姿。まるで構ってもらいたい子供のような顔だ。

「・・・そんなに見つめられても八雲さんには取材しません。なんか、反則な気がしますので」

「えー？文たんのけちんぼー」

そんな悩みの種に頭を抱えつつ、段々と激しさを増す雪の中で文は取材を開始した。天候は悪化の一途を辿りそうである。

第四話 焔に照らされた道（後書き）

連載の終了した小説、少女さとより焔炎綺の登場です。性格や人柄（鬼柄？）は変わりませんが、少女さとりのストーリーとは一切関連がありませんのでそちらを読んでいない方もご安心ください。寧ろ新しいキャラクターとして受け止めていただければ（笑）

曲や人物紹介は次回以降、区切りのいいところで行う予定です。

第五話 大罪を焼く炎

川の下流へと続く山道は、普段では有り得ないくらいの殺伐とした空気が漂っていた。元凶は目の前の巫女と仁王立ちで構える鬼。互いに相手の出方を見ようとしているのか、特に攻撃をすることもなく見合い状態が続いていた。

しかし、その均衡が崩れ去るのは一瞬であった。

「動かないってんなら先手を取らせてもらうぞ。・・・豪火よ！」

突き上げた拳を中心に渦を巻くようにして宿る炎は、数メートル離れた霊夢の服を焦がしてしまおうかという勢이었다。爆風にも似た突風に目を庇い、思わず一步後ずさる霊夢。

予想以上だった。相手の初撃を結界で受け流しその隙について反撃する予定だったが、あの炎を受け流しつつ即反撃に出るのは難しいだろう。その辺の妖怪の持つ妖力とはケタが違う。

「炎を操る程度の能力か・・・用心するんだぜ霊夢、いくら寒いからってあれを利用して暖房代わりだなんて馬鹿な考えは止めるんだな」

「誰がやるのよそんなこと。にしても、厄介な力ね・・・うおつと」

炎綺が拳を突き出せば、滴る炎がまっすぐ渦を描くようにして迫ってくる。警戒していたにも関わらず間一髪での回避だった霊夢は、舌打ちを一つ。

それは回避がギリギリであったことに対しても勿論そうなのだが、もう一つ重大な理由があった。あんな馬鹿げた力で炎をぶん回され

でもしたら、たちまち山じゅうに火が回ってしまふ恐れがあるのだ。そんなことをされた日には山菜が主食の霊夢にとって明日の食事を調達することさえままならなくなる。それは是が非でも避けなければならぬ。

「おうら！まさかこんなとろ火で参ったなんてことはないよなあ？」

挑発してくる炎綺にも、霊夢は至って冷静。次々と撃ち出される炎を全て回避し、そして

「お楽しみはこれからよ・・・博麗弾幕結界！」

お札を、数え切れない量を空目掛けてばらまいた。一見テキストに撒いただけのそれらは、しかして落ちてくることはない。

やがて一枚一枚全てが淡い赤の光を放つ。地面へ支え棒のように真っすぐ伸びるそれはやがて他のお札へ目掛けて伸び、気付けばこの一帯は光の編み目で覆われていた。辛うじて炎綺は回避するも、刻々と向きや位地が変化する赤い光線を避け続けるのは至難の業といえる。

「気をつけなさい。それに触れたらあの世行きよ？」

展開された時点で不利になるスペルカードであるがしかし、炎綺は黙ってその展開を許した。何かある、霊夢はひそかに胸の内に不安を覚えていた。

そして、それは思わぬ形で現実となった。

「炎符、火炎光背！」

スペルカード宣言だ！しかし、どんなスペルであれ発動までに多少は時間が必要なはずである。それまでの間に弾幕結界に引っ掛かり、集中砲火を受けるはずだ。

その霊夢の予想は的中し、スペルカード発動の準備が整う前に光線は彼女を捉えた。同時、展開されていた無数の札が炎綺目掛けて一斉に飛来する。木の裏側からでも急カーブしてから一直線に向かっていくところを見ると霊夢お得意の追尾性も申し分なく、逃げようにも全方位からの弾幕では逃げ道もない。炎綺からしてみればまさしく絶体絶命だった。

・・・いや、絶体絶命のはずだった。

「甘い甘い！こんな生温い攻撃じゃ準備運動にもならないぞ！」

彼女の背後に円を描くようにして沸き立つ獄熱の炎、炎綺自身も焼けてしまいそうな距離で燃え上がったそれは、地上に墜ちた太陽を連想させる光景だった。ある程度の攻撃には耐性を持つ霊夢の札だが、強力な炎の前には為す術もなく焼き払われてしまう。それどころか巨大な炎は無数に火の粉を生み出し、その矛先を霊夢に向けて突撃してくる。

「弾幕結界をいとも簡単に・・・面白いじゃないの。拡散結界！」
対する霊夢はそれらを新たな結界で防ぎきる。

「っ。なんて威力」

「へえ、人間にこの攻撃を止められるとは、流石だな。久々に鬼の血がうずいてきやがった！」

次なる攻撃を仕掛けるのか、炎綺は両腕を天に掲げ、その眼を閉じた。

「悪い芽は元から断つてね。ちんたらスペルカード唱えてる暇があんなら前方注意よ！」

スペルカードが発動する前に弾幕で潰す。発動の遅いスペル相手には非常に有効な手段だが、勿論炎綺は弾幕に割り込まれるタイミンでそのようなスペルをぶっ放す程浅はかではない。

拳に、炎が纏う。最初のそれとは比べ物にならない、竜巻のような炎が両方の拳を覆い隠した。

一度拳を突き出せば、霊夢の繰り出した弾幕は一掃される。再び拳を突き出せば、壁のような炎が霊夢に覆いかぶさる。滝に押し流される魚のように、焼き尽くす灼熱の炎に飲み込まれた。

かのように見えた。

「ちっ」

小さく舌打ちをする。咄嗟に後方、森林の方へ回避した霊夢はギリギリのところを間一髪で避けていた。

「……いや、避ける動作はなかった。後退しつつ、完全に受け身を取る体制だった。すぐ後ろの木に寄り掛かる。」

「……粹な手加減じゃないの。舐めてもらわなくなっただってこれくらい、結界で防ぎきれたわ。……それとも」

なおも火炎で攻撃を続けるも、不意さえつかねければ霊夢に分があった。不用意な弾幕は回避、展開の遅い強力な攻撃には結界、隙あらば瞬時に札を展開し攻撃。弾幕戦において、まさにマニュアル通りの戦闘スタイルでこなしていく霊夢。

だが、いくら霊夢有利とはいえ相手は妖怪、鬼。その桁外れな体力と火力を前に戦況自体はイーブンを保っていた。

「強敵と聞いていたものの、想像以上だ。お前の強さは認めよう」

「ならさっさとくれるもの渡して通してもらえないかしら。あんまりここで体力使いたくないんだけど」

「ああ、そうだな。だがその前に」

突如地鳴りがした。地震にも近い、山全体を揺るがすような地鳴り。周囲に気をとられ、次に炎綺を見た時には既に尋常ではない量の炎を両拳に纏わせていた。先のスペルカードの時とは桁違い、そのまま空をも焼き尽くさんと炎は天空までのぼっている。そんなところらの妖怪とは明らかにレベルが違う、霊夢さえ身震いするほどその光景は威圧的で妖力に満ちていた。

「先に進みたいのなら、この一撃に堪えてからにするんだな！」

足元で爆発を起こした直後、あらぬ方向へすっ飛んでいく炎綺。

「いちっ！」

掛け声と共に再び爆発、方向を変える。

「につ！」

三度爆発。方向を修正したその先には霊夢の背中を捉えていた。

「なっ、後ろ!?!」

「喰らいな! 四天王奥義、三步貫穿!!!」

業火に包まれた拳を突き出し、超速で飛来する炎綺を捉えた時にはすでに霊夢の回避は間に合わない位置まで接近されていた。流石に慌てる霊夢、にやりと口元をつりあげる炎綺。互いの距離は更に縮まり、縮まり、そして。

「・・・やっぱり」

博麗霊夢は一本の木を背に余裕の表情で立ち尽くしていた。

「やっぱり、だ？」

炎綺は傍に転がっていた石ころを蹴り飛ばす。転がってゆくのをしばし目で追うが、霊夢がそうはさせてくれなかった。

「あんだ、木を巻き込まないように戦ってるでしょう？」

「・・・」

答えはないが、お構いなしに霊夢は続ける。

「二つ目のスペルするときからもしかしたらと思って。あの時のあんなら炎の壁で私を飲み込むことくらい簡単なことだった。でもそれをしなかった。・・・私が後退して、木を背にしていたからね」

転がる石はやがて一本の巨木に辺り、乾いた音をたてて止まる。

「そのあとの弾幕も、私が森の方へ逃げると密度を落としていたじゃない？」

「なるほど、だから最後の攻撃も私がわざと外してやったと」

そうね、と頷く霊夢。

「つまりあなたは、鬼のくせに自然を愛する妖怪だったのよ！」

「ぶ」

「ぶ？」

拳を取り巻いていた熱気が一瞬にして消える。

「ぶははははは！お、お前、どうやったたらそういつ思考になるんだ！？うはははは、は、ひー！腹が！」

「・・・もしかして馬鹿にしてる？」

「ひひ、ひ、いや、まさか。お前の豊かな想像力に感心してるんだよ！くくく」

「馬鹿にしてるのね」

懐に忍ばせた針を投げるも呆気なく炎で落とされる。

「それより約束よ？最後のスペルカードに堪えたんだから、さっさと渡すもの渡してここを通しなさい」

「くく、ああ、そうだったな。ほらこれだ」

軽いノリでスカートの脇から取り出したそれを受け取った霊夢は、

思わず固まってしまふ。

手の平に乗せられたそれを眺め、一つため息。

「なに、これ？」

「見てわからないか？羽だよ、羽」

黒い毛が幾重にも重なって形成されたそれは、たしかに鳥の羽であった。裏返したり、匂いを嗅いだり、光にかざしたりしてみるのが、そいつはどこまでも羽だった。

「見りゃ分かるわよ。あんだだけっぺっぺっぺ炎とばしておきながら見返りはこれ？笑えない冗談ね」

「まあまあそんな真っ赤な包丁はしまいなさいな。実はそいつ、ここにくる途中で空から降ってきたんだよ」

「はあ？だからなんだっていうのよ」

「私はその羽は嫌いだがね。よく観察してみると、意外なことが分かるかもしれないよ」

今一度黒い羽とにらめっこをしてみるが、やはり羽はただの羽である。食料にもならないし、どこからどうみてもゴミ以下の価値しか見いだせない霊夢は炎綺に文句の一つでも言っただろうと思ったが時既に遅し。遙か上空まで飛び上がった炎綺はこちらを向いて律義に手を振って別れを惜しんでいたのだった。

「うっん、どう思う魔理沙？・・・って」

周囲を見渡すも、そこに見慣れた黒い人影はなかった。

「あいつ・・・次会った時はただじゃおかないわ」

地底、旧地獄街道。酒をあおっていた二人の元へ、一人の妖怪がうししと笑いを漏らしながら帰ってきた。

「おうおう遅かったじゃないか炎綺。どうだったよ例の人間は」

杯を人差し指に乗せてくるくる回しながら二人のうちの一人が答える。

「いやーあんな面白い人間は初めてだよ！この私のことを鬼のくせに自然を愛する妖怪だーだってさ！だーっはっはっは！思い返しただけでもは、腹が痛い！」

「・・・要するに、結局打ち負かせなかった訳か」

「ぐ。よくわかったな」

腹を抱えて笑っていた彼女にも杯が渡される。酒がなみなみとつがれたそれを一気にあおると、今度は取り乱すこともなく口を開く。

「全く、場所が悪かったんだ。あんな山中で豪勢に炎使っちゃー後が怖いもんな」

「自然、大事に・・・」

控え目の声に身震いする。

「私も杯を持ちながら力くらべしたんだ、同じようなもんだろう。それに、わざわざそんな場所を選んだのだろう?」

「・・・まあ、な」

今日、旧地獄街道の明かりが消えることはなかった。

第五話 大罪を焼く炎（後書き）

三面道中 古今妖怪物語

三面ボス 照らせ焰よ我が道を
 Burning Road

焰ほむぢ 炎綺えんき

種族：鬼

二つ名：燃え盛る地獄の業火
能力：炎を操る程度の能力

スペルカード

炎符「火焰光背」（道中）
炎符「秘技・業火拳」
炎災「地獄に降る炎の雨」
四天王奥義「三步貫穿」

設定資料まとめ1（前書き）

今まで後書きに書いてきた設定のまとめ + です。って、こんなのに興味ある方いないだろうなあ・・・。

設定資料まとめ1

一面道中 冬立ちの道 } The First Day Of
Winter

一面ボス 白銀の雪衣娘 } Snow Bird

メルリア・パロット

種族：妖怪オウム鸚鵡

二つ名：白翼の鸚鵡

能力：風を操る程度の能力

スペルカード

風符「白銀の風」

風符「寒風ボラ」

鸚鵡「雪衣娘のオウム返し」

・・・

真つ白なオウムのことを雪衣娘といいますが、つまり、彼女も真つ白な訳です。霊夢に襲われるまでは。

風を操る程度の能力とありますが、実際のところ風を起こす程度です。文のように自由自在に風を発生させることはできません。一面

ボスですし。

スペルについて。

ボラは、吹き始めると気温の下がる風のこと。元はバルカン半島で吹く強い東北風の名前だったらしいです。嵐は「おろし」と読みます。

二面道中

獣の足跡

〈

The P r o o t
O f B e a s t

二面ボス

旅の背中にご用心

蝦夷 えみし
狼 ろう

種族：送り狼

二つ名：冷酷な山の狩人

能力：自然に姿を隠す程度の能力

スペルカード

襲符「グロームアサルト」

突風「藁木サイクロン」

寓話「虚言者を狩る爪」

・・・

送り狼は、山中なんかで人間の後を追って来て襲うという狼のことです。彼女は長い年月を経て妖怪化した送り狼という設定。苗字の蝦夷は言わずもがな、エゾオオカミからきています。

スペルについて。

グロームアサルトは直訳すると「暗がり襲撃」。なんかマヌケな名前ですね。

藁木サイクロンは有名な童話、三匹のこぶたから。虚言者を狩る爪は同じく童話のオオカミ少年から。

三面道中 古今妖怪物語

三面ボス 照らせ焰よ我が道を
く Burning Road

焰 ほむら 炎綺 えんき

種族：鬼

二つ名：燃え盛る地獄の業火

能力：炎を操る程度の能力

スペルカード

炎符「火焰光背」(道中)

炎符「秘技・業火拳」

炎災「地獄に降る炎の雨」

四天王奥義「三步貫穿」

・・・

鬼です。萃香や勇儀と同じく、四天王の一人。性格は勇儀以上に大胆で、強い者を見つけては積極的に勝負を仕掛ける、周りの人からすれば迷惑この上ないですね。

。炎を操る原理？そんなこと追求されても困ります。

スペルについて。

火焰光背こうはいの光背こうはいは、仏像なんかの背後につける光や明かりを表す飾りのこと。まあ、写真とかで見て頂いた方が早いですよね・・・。

三步貫穿かんせんの貫穿かんせんは、貫き穿つこと。まんまですいません。

第六話 雪に紛れた亡霊（前書き）

早苗さんが好きだから出してあげたい。しかし出番が見当たらない
この絶望感・・・

第六話 雪に紛れた亡霊

降りしきる、というよりはたたき付けてくる雪に身を縮めつつ、霊夢はついに山を抜けることに成功した。木々が視界から消えた途端、豪雪のせいでうつすらとはあるが確かに天までそびえる建造物が視認できる。あんなところに城を立てるなんて正気の沙汰じゃないわね、と白い息を手に吐きかけ擦り合わせるが、たいした効果は得られないようだ。先の炎綺との戦いで忘れかけていた寒気を今になつて全身に感じる羽目になり、露出した足や腋をかばうようにして歩を進める。

握りしめるは黒い羽。先刻炎綺から譲り受けたものだが、半分はその意味を理解したようで、何度か見回しては再び手中にしまう。

「この羽……。でも何故あの鬼はこれを私に……？」

「独り言が多いと髪の毛なくなっちゃうよ〜」

聞き覚えのない声。新手の妖怪か？と即座に振り向くもそこにあるのは延々と続く山と木々。視界が悪いのは確かだが、それにしても人影らしきものは見当たらない。

「へへへ〜。こっちだよこっち〜」

今度もすぐさま声のした方を振り向くも、やはりそこに人や妖怪の

姿はない。おちよくられているのか、だとしたら腹の虫が活発な霊夢の苛立ちは最高潮である。

「隠れてないで出てきなさい。これじゃ退治したくても出来ないじゃないの」

「退治？・・・あー、もしかして君、麓の神社の巫女さん？」

途端、変わらぬ豪雪の中に小さな炎が明かりをともした。青白い炎、それは霊夢に近づくとつれて徐々に数を増し、くるくると回りながらその光量も増大してゆく。普通の人間から見れば恐ろしい現象だが、数多の妖怪と対峙してきた霊夢は澄ました表情でそれを眺めるにとどまる。

強烈な光。それには一瞬目を庇うが、次に瞼を開いた時には先程までも炎はなく、代わりに一人の少女が両腕を前に突き出し、手首を下向きに曲げているという格好でいた。頭には三角の白い布切れ、体には真っ白な布のようなものを巻き付けている。そのため両腕や腹がおもいつきり露出している。このクソ寒い中で気でも狂ったのか？

「なあんだ。だったら早く言ってよねー。危うく襲っちゃうところだったよ」

肌は降り積もる雪と見分けがつかない程白く、足は裸足。今一度少女をなめ回すように見回した霊夢は漸く、

「・・・あなた、幽霊ね？」

「ピンポン、正解です。人間を驚かすことが生業だけど、巫女さんが相手なら話は別だよね」

「へえ、ちよつとは賢い幽霊みたいだけど・・・こんなところで何

やってるのかしら?」

両手を揺らして子供みたいにぶらりぶらりさせながら、

「私は青火 霏々(あおびひひ)。最近ここに引越して来た幽霊だよ」

「ふうん、どうりで見かけない顔な訳ね。それで、幽霊が私に何の用かしら?返答によっちゃ閻魔のところを送り飛ばしてもいいんだけれど……」

お決まりの針を構える霊夢だったが、霏々は怯えるどころか物珍しそうな顔でその針を見つめていた。

霊夢自信、彼女に敵意がないことはなんとなく雰囲気伝わってきた。そもそも初めから襲わない宣言をしているし、どちらかという構ってもらいたい子供のような印象を受ける。

「君、雪天城に入りたいんでしょ?」

「雪天城……?」

頭に疑問符を浮かべるも、自分の目的を思い出してみて理解した。恐らく『雪天城』とは今から行こうとしている城のことであろう。

「別にあんたに頼まなくても勝手に入るわよ」

「それがそうもいかないんだなーこれが。誰が張ったか知らないけれど、あの城には強力な結界が施してあるみたいでね、いくら巫女さんでもあれを突破するのはきついんじゃないかな?」

「結界って……私を誰だと思っているの?結界のことならおてのもの、小さなものから大きなものまでちょっと触っただけですーぐ解けちゃうんだから」

鼻を高くする霊夢。確かに彼女の結界に関する技術はピカイチで、幻想郷の中でも一、二を争う名結界師である。

罪々は相変わらず両手でお化けのポーズをしたまま、ちゅちと舌を打つ。無性に殴り掛かりたくなる霊夢だが、ここはぐつと我慢。

「なんなら試してみる？」

ということやってきたのは雪天城、城門前。近づこうとしたその瞬間既に霊夢の動きがぴたりととまる。扉まではまだ距離がある。一度上空を見上げ、再び扉を凝視。きしりと歯を噛み締める音が罪々まで伝わってくる。

「・・・なるほど」

長く沈黙を保った後、漸く放った霊夢の一言目はそれだった。

「何か分かったー？」

「八方結界ね。それも飛びきり強力なやつ」

それだけ口にするともたすぐ黙りこみ、左手に握るおはらい棒を右手に持ち替える。

・・・これは、ただの結界ではない。その構成は幻想郷に存在する

あらゆる結界よりも強固で、正直靈夢にも打ち破れるかどうか不明なレベル。こんなことが出来るのは、幻想郷には一人しかいない。

「これは、紫の仕業・・・いえ」

ぽつりと呟き、なにかを言いかけたところで言葉は止まる。暫くおはらい棒を扉へ向け、瞼を閉じる。

この感じ、この鼓動、紫のものなんかじゃない。

構成が酷似しているため判別に時間はかかったが、一度確信してしまえばそれが覆えることはない。・・・間違いない。これは誰か、別の者が仕掛けた結界だ。

「どうどう？巫女さんならこんな結界ちよちよいつと解けちゃう？」

「うるさい」

「あいたっ」

擦り寄ってくる罪々に軽くげんこつ。

・・・しかし、思わぬ障壁に頭を悩ませる。こんな強力な結界が張られているということは、中にはとんでもないものが眠っているか、あるいは家主が相当他人に会いたくないのかのどちらかだろう。もし前者だとすれば、興味半分不安半分といったところである。

「うー、叩かなくてもいいじゃん。・・・せつかく侵入の手引きをしてあげるって言ってるのに」

ふと我に帰る。そういえばこの霏々という幽霊、この城へ侵入する方法を知っているという。

とはいえ霊夢の見た限りでは結界は城全体を袋で包み込むように張られおり、強行突破での侵入は不可能に近いと思われる。

「・・・悪かったわ。それで、どうやってこの中に侵入するの？」

「えへへ、それはね〜・・・」

先刻、雪天城前。

「城門まで来たはいいものの、強力な結界ですね・・・」

情報収集もほどほどに漸く城の入口まで赴いた射命丸文であったが、壁のように立ち塞がる結界に呆然と立ち尽くしていた。文は結界に關しては素人同然の為突破という発想には至らず、周囲を見渡しては外觀を手帖に書きおさめるだけの立ち往生が続いた。

「お困りのようね〜」

空気を震わす嫌な音。共に現れたおなじみの妖怪の姿に文は聞こえないようにため息一つつきながら

「八雲さんの方は、何か情報集まりましたか？」

ふるふると首を振る紫。というか、情報収集なんて最初からしてないんだろうなあ彼女は。

「でも、そんなことはこのお城に入ってしまったえば分かることじゃないの」

入れないことを分かってて言ってるな、わざとらしい。

「それが入れないからこうして立ち往生してるんですよね。恐ろしくかなり強力な結界だと思いますが・・・」

じつと文は紫を睨み付ける。天狗がかける疑いの眼差し、それを跳ね退けるように紫は傘をくるりと一周させると

「ま、無理もないかもしれないわね。これだけ強力な結界じゃ、私が張ったと思われても」

その発言に、文は寒さとか関係なしに凍り付いた。

いくら素人とはいえ結界の強弱くらいは分かる。故にこの強力な結界を見たときは瞬時に紫の存在が脳裏を過ぎり今の今までその仮説を信じて疑わなかったのだが、彼女の思わぬ発言は文を混乱させるに十分であった。

・・・ということは、この城の中にこれだけの結界を張り巡らすことのできる強力な存在がいる、ということになる。異変は大きければ大きいほどいい記事になる、文は胸を躍らせつつ紫と顔を合わせた。

「まあでも、まだ結界解除に対する耐性が甘いみたいね。流石に正面は嚴重に張られているけれど、あっちの扉の方なんか比較的薄いみたい」

「・・・もしかして、結界を解いてくれるんですか？」

「あつたりまえよ、私と文ちゃんの仲じゃないの」

キョトン顔の文。ここまでくると逆に怪しい。・・・とはいえここまできてこの大スクープを諦めようものなら新聞記者の魂が廃るといふもの。妙な使命感に駆られた文はぎゅっとペンを握りし絞めて、

「流石八雲さん、ありがたいお話ですねえ。ここは一つお願いできますか？」

「勿論よ。さあ、早速行くとしましょうか」

不信感もあるが好奇心によってもみ消された文は、城について独占取材ができるだけあって更に心を躍らせるのであった。

第六話 雪に紛れた亡霊（後書き）

霏々さんや曲の紹介は次回以降の後書きで。たまたま設定集を家に忘れて書けない訳じゃないですよ、いや本当に。

第七話 極寒の城（前書き）

冷静に見返すとこの小説ってオリジナルキャラクターばかりですね。
これって需要あるのでしょうか・・・？

第七話 極寒の城

雪天城内部。延々と続く回廊とその脇に均等に並べられた蠟燭が特徴的で、かなり薄暗い。それに加えて小さな段差に至る所で歩行を阻害され、決して進みやすい環境とはいえない。

「うう、室内ならあつたかいと思ったのに外と大差ないじゃない。ここの住人はよくこんな場所に住み着いていられるわ」

風がない分外と比べればいくらか体感温度は高いが、それも微々たる差。相変わらず震える体を両手で擦って摩擦熱に頼ろうと試みる。

「そんなに寒いー？私は調度いいと思うけどな」

「幽霊とは違うのよ幽霊とは」

霊夢の後ろから守護霊のようにぴったりくっついてくる青火霏々はくるくる回りながら城内を物珍しそうに見物していた。暢気なものだと肩をすくめつつ、とりあえず最上階を目指してひたすら階段を探すことにする。無論それは霊夢の勘で、強い奴は最上階にいるに違いないという単純な発想だが、ご存知の通り彼女の異変に対する勘は百発百中である。他に信頼に足る情報もない。

「にしてもあんた、便利な奴ねえ。地下通路の内側に侵入して鍵を開けるだなんて、流石幽霊だわ」

「えへへ、褒められちゃったー。あれくらい私に掛ければおてのものだよ」

地上は強固な結界によって封鎖されていたが、雪に埋もれた地下へ続く道は霏々がいなければ見つけることは不可能に近かっただろう。

勿論鍵はかけてあったものの、霏々は幽霊。壁の一枚や二枚平気で通り抜けてしまう彼女はあっさりと内側から鍵を開けることが出来たというわけである。

「……で、何でついてくんの？」

「ふえ？」

「いやいや、そんなポカーンな顔しなくてもいいじゃないの。あんな、この城になんか用事でもあるの？」

「うっん、ないよ？」

ポカーン顔が霊夢にまで伝染する。そりゃここまで導いてくれたことは素直に感謝するが、ついてこいと言った覚えはない。

「はぁ……。物好きな幽霊ね」

「そう？えへへー」

真冬だというに、どこかの春の妖精以上に頭が春じゃないかしら……。もはや呆れムードの霊夢を尻目に霏々は指をさしながら

「あそこ！ほら、階段があるよ！そんなのろのろ歩いてないで早く」

「分かったから引つ張らないですよ、手冷たいんだから……」

いいように振り回される霊夢であった。

「・・・それで、わざわざ怨霊の調査をしにあなたが地上へ赴いたと」

地底。旧地獄街道より更に深いエリアは空気も淀み、光は殆どない。囁きに近い少女の問いが終わると、宇宙空間に放り出されたかのような無音状態になる。威圧、ともとれるこの態度に焔炎綺は頭を掻きながら重い口を開いた。

「現在地上の怨霊による被害ゼロ。異変は完全に終息したと思われる、以上」

「どこへ行くのですか？」

背中を反転させてそろりと後退する炎綺は肩を震わせながら多分恐ろしい形相であろう人物に顔をむけた。

「いや、どこにもー？。ただ、ちよいと後ろにただならぬ敵の気配を感じたものだからさ・・・」

「鬼であるあなたが、下手な嘘を吐くのですね」

むっと表情を強張らせる炎綺。鬼である彼女には鬼としてのプライ

ドがある。今の発言はそのプライドを汚すものであり、あまり気持ちの良いものではない。しかしここで言い返そうものなら今度は鬼の威厳に関わる。ここは反論の言葉を喉の手前でぐっと堪え、別の言葉を押し出す。

「・・・ある人間の力を試したくてな」

「ある人間？・・・なるほど、地上の巫女ですか。彼女は確か以前もここに顔を出していましたね。確かになかなかの強敵です、あなたが打ち負けなかつたのも無理はないでしょう」

何も言わずとも次々と連ねてくる刺のある言葉にますます表情が固まる炎綺。

唯一の明かりである蠟燭が風もないのに消え、辺りが闇となる。まさに宇宙空間、といったところであろうか。頼りにすべき光はもう何一つ残されていない、純粹な黒が視界を支配した。ぐるりと首を一回転して見回すも視認可能なものは一切ない。そんな中、一つの声だけが炎綺の五感に刺激を与えた。

「新たな異変、天狗の跋扈、そしてなによりあの巫女が行動しているのですか・・・。ふふふ、興味が湧いてきましたね」

独り言のようにぼそぼそ呟く姿も確認できず、仕方なく続きを待つことにする。

「いいでしょう。あなたのその情報と引き換えに、無許可で地上へ侵入した罪は不問とします。ただし、二度とこのような厄介ごとを起こさないようくれぐれも気をつけて下さい。さもなければ、次はありません」

「・・・へっ。言われなくてもそんなこと、もうたくさん御免だね。さっさと帰らせてもらっ」

暗闇に再び光が灯る。ぼんやりと浮かぶ少女の顔、炎綺は鳥肌を立ててその場を後にすることにした。なるべく、この場にはいたくない。それは地底のあらゆる妖怪に共通して言えることだ。

ただ一人の空間。他に誰がいるわけでもないのにうつすら笑みを浮かべる少女は、微かに喉を鳴らし、そして蝋燭の火を吹き消した。

第七話 極寒の城（後書き）

四面道中 吹雪ヶ丘 } The Blizzard Spot

四面ボス フローズンファントム

青火 霏々（あおび ひひ）

種族：幽霊

二つ名：雪原に迷える亡霊

能力：恐怖に陥れる程度の能力

スペルカード

恐符「虚仮威し焰硝火」

恐怖「突撃・幽霊列車」

恐怖「怪奇・ポルターガイスト現象」

「幻想郷七不思議」

第八話 妖々跋扈（前書き）

いよいよ序幕編もこのお話で終わりです。

・・・え、今までの序幕だったんですか？

第八話 妖々跋扈

外見からは想像もつかなかったのだが、この雪天城、かなり複雑な造りをしている。上りの階段をのぼったすぐ先に下りの階段があったり、迷路のように右に左に入り組んだ回廊があったり、結界で封じられた道があったり。とにかく進みづらいことこの上なく、この城の住人はこんな場所でもともに生活できるのか首を傾げるところである。

また、進行するにおいても一つ重大な問題があった。それは、のぼればのぼる程明らかに気温が下がっていくこと。侵入口の気温と比べても山の麓と頂上くらいの差があり、更に温度が下がるうものなら例え霊夢でも一人の人間。行動に支障が出る可能性だつてある。

「あがががが・・・な、何なのよこの寒さは。いつだかの地底とは真逆ね・・・へつくしゅ！」

「大丈夫？この服貸してあげてもいいよ？」

「貸すつてあんたそれ一枚しか着てないじゃないの。それに、そんな布纏ったところで大して変わらないでしょうに」

そもそも幽霊の服って人間も着れるものなのだろうか・・・。無駄な疑問を浮かべつつ、次の階段を見つけて上り始める。

外を眺めると美しい雪景色が広がっていた。山々にかかるホワイトソースのような雪、真っ白な大地を二つに断ちて流れる川。自然が織り成す思わず息を飲むような光景に霏々は身を乗り出していた。

「すごい、すごい！見てよこれ！こんな高いところまでのぼってきたんだ」

「はいはいよかったわね。よかったから襖全開にするのはやめて頂

戴。うっ、指の感覚が無くなってきたわ・・・」

「こんな高くまで来たんだもん、最上階もきつともうすぐかな？」

「ええ、そうだといいんだけど・・・」

興奮する霏々を尻目にいつものため息を一つ吐く霊夢。上り始めてから一時間弱、そろそろ住人の一人や二人でてきてくれてもおかしくない状況である。・・・それともこの城、主しか住んでいないとか？ここまでのぼってきて妖怪や妖精に一匹も出会わないところからするとその可能性も無くはない。そんな考えは、階段を上りきったところで覆ることになる。

広がる畳張りの大広間。今までの入り組んだ回廊とは打って変わって吹き抜けた空間が姿を現した。今までが今までだっただけにあまりに不自然な光景ではあるが、終わりの見えない人生を縮図したような迷宮に比べれば大分マシである。ほっと一息つこうと霏々に視線を流すが、彼女の瞳は蜜を求めて飛び回る蝶のように揺れていた。霊夢はそれを追って見る。

そこには、翡翠にそのまま翼を与えたような美しい青色の鳥が空に同色の線を描いていた。音はなく、音声の切れた映像を見ているようだ。

ふと、翡翠は吸い込まれるようにして床へ降り立つ。・・・いや、その直前、雪を被った枝のように白いそれに物音一つ立てることなくぴたりととまった。

「・・・珍しいわね。幸せを呼ぶ、青い鳥」

小鳥を右手から肩に移すと、首だけを小刻みに動かす青い鳥よりも小さな動きで頭を下げるのは、小さな少女だった。

「ありがとう」

ガラス越しに聞いているような声、少女は短くそう言った。

「で、あんたは何？ここの主……って感じじゃないわね」

「ねえねえ、ひよつとしてあの子、座敷わらしじゃないかな？」

座敷わらし。住み着いた家に幸福をもたらすという、人間に感謝される妖怪にしては珍しい存在である。

「座敷わらしに青い鳥、随分とハッピーな部屋じゃないの。これであったかければ文句もなかったのにね」

「……お客？」

相変わらず力のない声に聞き取るだけでも精一杯の霊夢は、小さな翡翠をそのままはめこんだような瞳をぼんやりと眺めながら返事を返す。

「そう、お客。だから少しは繕って頂戴」

「よつこそ」

流石の霊夢もたった四文字の返しに何を返せばいいのかわからなくなり頭を抱える。

「君、お名前はなんていうのかな？」

見かねたかどうかはさておき、返答をしない霊夢に代わって罪々が問いを投げかけたところ

「家神 いえがみ 富亜 ふあ」

とだけ答えると、甘えびのようにほのかに赤みがかった唇をひたりと閉じ、僅かに頬を綻ばせてみせた。

にしてもやりづらい相手だなあ、出来ることなら面倒な話もなしに通して欲しいものである。霊夢はそんな思いを胸の内に秘め、小鳥の頭を人差し指で撫でる富亜をため息一つ交えつつ眺める。本当、何を考えているのやら。

「ねえねえ、このお城ってどんな人が住んでるのか知ってる？」

こんな奴相手でも堂々と質問できる罪々にもはや尊敬の念すら覚える。

「知ってる」

「ホント！？どんな人どんな人？」

「綺麗な人」

「へー、そうなんだ。私も会ってみたいなあ」

「・・・いいけど、条件がある」

ぴくりと霊夢は眉を動かした。座敷わらしが提示してくる条件、少なからず興味はあった。どこだかの鬼みたいに力比べを好き好んで求めてくるタイプではなさそうだし、そこだかの幽霊みたいに一緒についてくることを条件にするようなアグレッシブな妖怪には見え

ない。つまりは知識的な、もしくはおつかいの条件だろうと霊夢は踏む。
対して罪々はそんなことどうでもいいらしく、静止画のように動かなくなった小鳥を触ろうと手を延ばして富巫に制止される。

「邪魔者を追い出して」

瞼ほどもないくらいに開いた口は、葉の擦れるような声で条件を放った。この技術、腹話術かなんかに活かせるんじゃないだろうか。こんなところで座敷わらしなんかやってないでそっちの妖怪をやればいいのに。霊夢は爪先を揺らしながら腕組みをしつつ、そんなわいもないことを考えていた。

「邪魔者？」

たまらず罪々が聞き返す。

「招かれざる者、つまり、イレギュラー」

「それじゃわかんないよお……。ねえ霊夢、分かる？」

名前を呼ばれて漸く反応を示す霊夢は、手に握りしめていたそれをゆったりと開く。

「うに？それは？」

「ここに来る途中に鬼から貰った羽よ。おおよそ誰のものかは見当ついてただけど、どうしてこんなものをわざわざくれたのが分からなかったのよね。・・・ただ、あなたの条件とやらで何となく

理解できたわ」

富亜と視線を合わせる。まるで何も考えていないような色の抜けた瞳をしきりにまばたきしながら向けてくる。

「つまりあなたは、この城に私たち以外の何者かが暗躍していると
言いたいんでしょう？・・・いいわ、私たちがその邪魔者とやらを
追い払ってあげる」

まあ、この羽以外にも思い当たる節がないこともないのだけれど。

「・・・よろしく」

川の下流へ続く山中。

「あ、う・・・痛い・・・」

純白・・・とは言い難い程赤く染まった翼を小刻みに震わせる少女、

メルリアは漸く目を覚ました。何があつたのかすらよく思い出せず、あちこちに走る痛み悲鳴をあげつつ体を起こそうとして失敗する。自分の回りの雪だけ、イチゴジュースか何かを零したみたいなお色になっているが、何故こんな事態になっているかまでは彼女には理解できない。所詮彼女は鳥である。

「おや、こんなところで大丈夫ですか？」

ふと声をした方を見ると、そこに立っていたのは自分よりも一回り小さい少女の姿だった。彼女はメルリアを見下ろすよう、いかにも心配そうな顔で見ってくる。

「……流血の割には怪我は大したことなさそうですね。よかった」

「あ、あの。あなたは？」

少女の差し延べてくる手を受け取り身を任せると、ゆっくりと体を立たせてくれる。負傷した体をいたわるよう、ゆっくりと。

「……どうやら、何も覚えていないようですね。あまりの恐怖に脳が受け付けなかったのか、それとも」

ふふふ、と少女が息を漏らす姿に文字通りの鳥肌を立てるメルリア。理由もなにもわからないが、断崖絶壁に立たされる恐怖に追突されたような感覚が心臓を貫く。早くこの場から立ち去りたい、しかし痛みが足を蝕み動くことが出来ない。

見えない、恐怖

「大体分かりました。まあ、災難だったと思って諦めることですね」
「災難って何が・・・あ、ちよつと、待ってくださいよー！」

少女はゆったりとした足どりで深い深い山の奥を目指して、やがて消えた。

赤かった雪も新雪にまみれ、既に視認することは出来ない。

「・・・なんなのよ、もう」

不意に零れた愚痴は、なおも激しさを増す雪風に飲まれてしまった。

第八話 妖々跋扈（後書き）

五面道中 風雲雪天城 〉 The Midwinter
C
a
s
t
l
e

五面ボス 童歌 〉 The Old Children's
S
o
n
g

家神 いえがみ 富巫 ふあ

種族：座敷童子

二つ名：幸福をもたらす童子

能力：家主に幸福を与える程度の能力

スペルカード

奪幸「薄幸の弾幕」

与幸「幸せを運ぶ青い鳥」

幸福「幸魂の宿る矢」

「笑門来福」

第九話 吹雪ヶ丘冬の陣 〱幕開け〱 (前書き)

連載開始から一ヶ月が立ちました。皆様の応援が心に染みて目から汗が・・・。

第九話 吹雪ヶ丘冬の陣 ー幕開けー

城とはまことに雅やかなものである。主の権力を比例させた装飾の数々や、建築に携わった職人達の魂は見るものを魅了する。

とはいえそれも大部分は外観の話であり、特にこの雪天城に関して言えば内装はどうも好きになれそうもない。上れど下れど迷路の連続、流石にこの摩訶不思議な造りには参ってしまう。

「ファイトファイト！頂上はもうすぐよ文たん！」

「・・・あの、その文たんってのどうにかありませんかね？」

「いいじゃないの〜可愛い呼び方で」

「じゃあ私も、あなたのことゆかりんって呼びますよ？」

「ああんいいわあ！呼んで呼んで」

この人は全くもう・・・。

紫の扱いについては殆ど諦め状態だ。完全に馬鹿にされてるとしか思えない。

・・・さて、外を見ると広がる雪景色、かなり高いところまでのぼってきたようだ。この調子なら最上階ももうすぐであろう、次に見えた階段も順調に駆け上がる。

「待ちなさい」

一瞬誰の声だか分からなかった。しかし、すぐにそれは素の八雲紫の声であることを思いだし、慌てて足を止める。ここまでの声とは打って変わった、空気さえも避けるような威厳のある声色。いよいよボスさんのおでましか？

「・・・結界ね。それ以上進むと、どこに飛ばされるかわからないわよ」

「なんと」

危ないところだった。まさか私が結界の存在に気付かないとは、なかなか緻密に構成された結界のようだ。

「普通結界は、侵入を禁止している意思を伝える為、相手に”見えるように”張る。しかしその結界はこの通り、誰にも悟られないよう極力気配を消して仕掛けてあるわ。・・・聡明なあなたなら、この意味が分かるでしょう？」

「私たちをこの城から追い出すことが目的、ですね」

ご名答、けるりと笑みを零した紫はそう言う私を退けて前に出る。

「出て来なさい、霊夢」

「!?!」

霊夢。ご存知異変解決の大御所で有名な巫女の名だ。

「・・・まさか、紫も絡んでいるとはね」

聞き慣れた声と同時に、階段の上から現れたのは紅白姿の巫女、霊夢と、見知らぬ少女だった。紫はにやにやと気味の悪い顔でその二人を見つめていた。なにかを、探っているような眼差しで。

「まるで私は最初から絡んでいるのが分かっていたような言い方です、ね、霊夢さん」

「ええ、どっかの鬼がこれを渡してくれたおかげでね」

そういつて差し出してきたのは黒い羽・・・私の羽だった。山の上空で見かけた鬼、彼女が私の存在を明かすようなマネをしていたというのか・・・ツイてない。いや、もしかしたら単に私に対する嫌がらせなのかも。

「流石に紫相手じゃ、私の張った結界なんてお見通しって訳ね」

「そういうこと。流石に外の結界はあなたのものではないみたいだったけど」

睨み合う二人。緊迫した空気の中、スカートの裾を引っ張られて思わず声が出る。

「きゃ!?!」

「わーい、驚いた驚いたー!」

先程まで霊夢の隣にいた少女だ。いつの間にも移動したんだ・・・?

「こら罪々、勝手なことしないの」

「はい」

返事をするや否や、すぐ脇にいた少女の姿が前触れなしに忽然と消える。

・・・かと思いきや霊夢の隣に現れる。

「あやや?何なんですかその子は?・・・まさか、霊夢さんの隠し子とか!これはスクープになりそうですね」

「馬鹿なこと言わないの妖怪天狗。あんたたちのせいだとんだ苦労を負ってるのよ?」

「あら、私たちは何もしてないわよねー文たん」

このスキマ妖怪は……。

「あんたらの存在そのものが邪魔なのよ！つべこべ言ってる結果の隙間に引きずり落とすわよ？」

「あらー、それは楽しみなものねえ」

霊夢の放った一言で紫の目の色が変わる。……あの目、間違いない。妖怪が戦いを挑まれた時にする鋭い瞳。狩りにに飢える、獣の眼差し。

……これは面白いものが見れそうだ。

「罪々、あの妖怪天狗の相手は任せたわ。できる？」

……え？

「戦うの〜？うーん、あんまり得意じゃないけど、霊夢が言っただつたらいいよー」

……え、え？

「いや、あの、私は別に戦おうなんて一言も」

「私に二人を相手させるなんて、そおんな薄情なことを文たんがする訳ないわよねえ？」

「あ、ええと……はい、まあ」

せつかくの取材チャンスだったのに、戦いながらでは半分も取材で

きないじゃないですか・・・。

「とゆーわけで、よろしくね天狗さん！」

こんなよく分からない子と戦うのは気が引けるが・・・霊夢さんの方は紫が相手をしてくれるようだし、軽く足止めしていればいいかな。

「・・・ええ。手加減してあげるから本気でかかってきなさい！」

さてはて、どうやら上の階の方が騒がしいみたいだ。差し詰め霊夢達が妖怪相手に暴れ回っているところだろうが、羽目はずして城ごと崩壊させないかいささか心配だな。・・・ああ、勿論崩壊したら私まで潰れるからな。

霊夢達の後を追って一時間弱。途中部屋という部屋をくまなく探索していたら随分と離されてしまったようだ、まあいいか。探索は

ロールプレイングゲームの基本だしな。結局めばしいものはまだ見つかっていないが。そもそもこの城の主には最初から興味もないし、何をしたところで霊夢に邪魔扱いされるだけだ。だったら私は、私のやり方ってやつでこの城を攻略してやるぜ。異論はないな、うむ。

「ありますよ」

「……ん？あれ、私ったら考えていたことを無意識に口に出す癖とかあったのか？おお、こいつは要注意だな、直した方がいい。」

「ふふふ、相変わらず地上の人間というものは面白いですね」「誰だ！」

振り向くと謎は全て解けた。流石私は名探偵、捜査無しに事件を解決するとはな、ふっふーん。

「人の家に忍び込む技能だけでは名探偵にはなれませんよ、霧雨魔理沙さん」

「私は幻想郷の名便利屋だ。探偵なんて職には興味ないぜ、古明地さとり」

「おや、私の名前を覚えてくれていたんですね、ふふふ」「お互い様だぜ」

「……しっかし、厄介な奴に会っちゃまったもんだなあ。大体こいつ、

地底で怨霊やらなんやらの管理をしてるんじゃないのかよ。

「地上で、地下にいるはずの鬼が厄介事を起こしたらいいですね」

「あ？・・・あー、そういえばそんなこともあったな」

「巫女に任せて逃げてきた。しかし城には結界があつて入れず、運よく他人がこじ開けてくれた扉からこつそり侵入した。あなた一人では何も解決出来ていない、力のない人間」

「へん、それがどうしたってんだ。お前だって同じ手口で入ってきたんだらう？」

「結界を操る力。それが八雲と巫女にしかないと思っているのなら、あなたの見ている世界は狭すぎる。・・・地底に暮らす私よりも」

・・・気持ち悪い奴だ。妖怪は黙って退治されればいいものを。

「いいからそこをどけ。お前の戯言を聞くのはうんざりだ」

「戯言？ふふふ、これは失礼しました。まさかそのように捉えられるとは。・・・それと、ここをどくつもりはありませんよ？」

あ？こいつは何のつもりだ。わざわざ地上まできて何を企んでやる・・・？

「企むだなんてとんでもありません。地底の鬼が迷惑をかけたよう
で、博麗の巫女に詫びを入れにきたのです」

「また心を読みやがったか・・・。詫びだ？だったらそこをどきや
がれ。私の邪魔をする必要はないだろう」

「・・・分かりませんか？あなたは戦いに必要とされていない。今、
上で繰り広げられている戦いはあなたの想像を遥かに超えるもの。
その邪魔をする資格はあなたにはない」

「邪魔なんかしないぜ。戦いに興味はない」

「嘘。あなたは博麗の巫女に嫉妬している。異変解決の傍ら、あな

たはそれを見ていることしか出来ない。努力しても報われない。報われる場面に出会うことが出来ない。だから」

「だから私が今回の異変の根源を倒すと、そう言いたいんだろう？」

「……いえ。あなたは博麗の巫女を倒そうとしている」

こいつはでたらめばかり並べやがって。これだから地底でも嫌われものなんだ。

「……事実を伝えることは、いつの時代も難しいものですね」

「ちよっとお喋りが過ぎるぜ。どかないってんなら、強行突破するまでだ！」

「……いいでしょう。不安に駆られたその行為がどれだけ愚かなことか、思い知るがいい」

第九話 吹雪ヶ丘冬の陣 〱幕開け〱（後書き）

早苗さんは出番ないですねこりゃ・・・。

冥界寺吹雪先生の次回作にご期待下さい！

完

第十話 吹雪ヶ丘冬の陣 〱妖霊戦〱 (前書き)

いよいよ吹雪ヶ丘冬の陣本編開始です。

第十話 吹雪ヶ丘冬の陣 〱妖霊戦〱

雪天城、上層部。

霊夢の前に不敵な笑みを携え、屋内にも関わらず傘を回す紫。瞳を妖しく光らせるその様はまるで夜の山に輝く猫の目のようである。

「で、霊夢。本当に私と戦うつもりなの？」

「当たり前よ。あんたを倒さないと先に進めないの」

「ふうん」

困惑したような、考える仕草を見せる紫だが、霊夢はひとまず冷静を保つ。

紫とまともに戦っても勝つのは難しい。出来れば罪々の協力がほしいところだが、あいにく文との戦いで手が離せない。ならばどうするか。

罪々の戦いの様子を見て、勝てそうであれば罪々の協力を待つ戦法が得策か。・・・ただ、罪々があの妖怪天狗を打ち負かすビジョンが想像出来ないんだよなあ。あんなおちゃらけた子供が妖怪の山の天狗に勝てるのであろうか。ううむ、不安である。

「邪魔してないのにのけ者にするなんて霊夢はひどいわねえ。・・・それとも」

紫の顔付きが変わった。

「誰かに仕向けられたとか」

唐突に見抜かれて面を食らう霊夢だが、冷静だけは保つ。

「だとしてもあんたには関係のないことじゃない。いいからさっさと私に倒されればいいのよ」

「相変わらず荒っぽいわねえ。久々に戦うんだから、もう少し楽しくやってみよう?」

戦いは、物音なく始まりを迎えた。

時と場所は同じくして雪天城上層部。対峙するや否や霏々は文の姿を見失ってしまった。幻想郷最速と豪語するだけの實力はある。霏々の回りを攪乱するようにひよひよひ飛び回り、あっという間に視界の外へ隠れてしまったのだ。

「えー、あれー?どこいったのー?」

呼ばれて返事をするほど天狗は愚かではない。そこらの鳥を軽く凌駕する速度で罪々の背後を飛行、去り際に突風を巻き起こして体制を崩させようとする。

しかし罪々も思い通りにはさせまいと慌てて壁にすがりつき、なんとかやりすごす。

ならばと文は続けざまに突風。姿を捉えられず一方的に攻撃を繰り返され、罪々は文字通り手も足も出すことが出来ない状態が続いていた。

「うー……どこー？姿を見せてよー！」

「……お望みとあらば」

刹那、罪々の身体がふわりと宙を舞った。くるりとその細身は半回転し、徐々に重力に引かれ上昇力を失う。咄嗟のことで何がただかわからない罪々は、続けて襲う下腹部の鈍い痛みと、一瞬見えた音速の影で何が起きているのか理解した。

文に、高速の打撃で打ち上げられていたのだ。完全に上昇力を失い下降を始めようと思いきや再び鈍痛が走ると共にまた上昇。視界がぐるぐる回り殆ど文の姿を捉えることはできず、例え捉えたとしても逃げられる訳ではない。

「あう！？」

三度目の直撃。そして間髪入れずに四度目、五度目。攻撃の感覚はだんだん短くなり、その度に高度を増してゆく。このままではまずい、トドメの攻撃に入られる前に脱出しなければやられる。

「さあ、いきますよ。歯食いしばっていただきますいねー！」

十数発を決めたところで罪々の身体は天井近くまで上昇、ここまで追い込めば身動きは取れないはずだ。そう踏んだ文は団扇を後方に向けてひと扇ぎ、加速をつける。再び、三度扇ぎ、更に最高速度を上げ、そして。

「幻想風靡！」

まさに幻想郷最速。目で追えるスピードではない、風をも悠々と追い越し、狙う標的はただ一つ。自らが打ち上げた罪々の腹部にほかならない・・・そのはずだった。

「!？」

しかし視界に捉えたのは罪々の姿ではなく、まるで代わりに置かれたように漂うのは無数の青白い炎だったのだ。あんなものに今の速度で突っ込んだらまずい！もう炎は目の前まで迫っていたが、強引に身体を傾けて軌道をそらす。間一髪炎とすれ違ったその瞬間、

「恐符、虚仮威し焰哨火」

「うけおど・・・」

冷静に考えれば、あの短時間であれほどの炎を展開出来るはずがなかった。超速で飛行を続ける中振り返ると、はたはたと身体に巻き付けた白い布をなびかせ、笑みを浮かべながら落ちていく罪々の姿。そのままバランスを崩した文は立て直すこと叶わず、目前まで迫っ

ていた壁へ激突した……。

「いったー……。あんな速いの反則だよお」

幾度にもわたる打撃を受けた腹部を労りながら、罪々は落下のシヨツクで仰向けになつた身体を起こす。きよろきよろ周囲を見回すと床に倒れ伏す自らの対戦相手、文の姿があつた。もしかして勝つたのか……。？そんな思いは一言で崩れ去ることとなる。

「……う、いつつ」

「あれね？まだ倒してなかつたのかー。がっかり」

「油断しました。あんな単純な作戦にまんまと引つ掛かつてしまうとは……」

「えへへー。褒めて褒めてー」

罪々の常識はずれなマイペースっぷりには流石の文もたじたじ。激突した頭部の痛みも忘れ、肩をすくめてみせる。

「でも、もう同じ手には引つ掛かりませんよ？私の速度に恐怖しなさいー」

「私だって、速いとわかつてれば怖くないもーん。それよりも」

にやり、と罪々はらしくない表情を浮かべた。同時に口からでた言葉は、文の背筋を冷やしきった。

「あなたの方こそ恐怖に凍えるといいわ」

ゾクリ、思わず文は身震いした。なんだ、この感覚は。まるで自分が、あの少女に恐れを抱いているような……。いやまさか、ドジを踏んだとはいえ実力の上ではこちらが圧倒しているはずだ。なのに、この不安はなんだ。

恐怖に駆られ動きそこねた文は、先手を取られてしまった。

「な、しまった！」

また例の青白い炎をばらまいたかと思えばすぐに消失。・・・そこにいるはずの罪々と共に。これでは最初と完全に逆の立場である。隈なく見回してもそこに罪々の姿はなく、不気味で、静かな空間が揺らぐことはない。

「こつちだよ、こつち」

「！？」

咄嗟に声のした方を振り向くもそこには誰もいない。おかしい、確かにこちらから声がしたはずなのに・・・

「こつちだってばー」

今度は後方からの声。しかし文が見た時にはやはり誰もおらず、虚しく外の景色が広がっているだけだった。

・・・いや、遙か遠くだ。豪雪で殆ど視認できないが、確かに遠方で何かが光っていた。それは徐々に近づいてきているらしく、ほのかに黄色い色をした光がその光量を増している。

などと悠長に考えていたのもつかの間、雪を交えた突風に視界を遮られているうちに光は、いや、光をともした奇妙な巨大鉄塊は猛烈な勢いで文の目前まで迫っていたのだ。

「なっ、なんですかこれは！」

率直な感想が出てしまったが、気を動転させてる場合ではない。この奇妙な形、文には見覚えがあった。確か、香霖堂に取材に行った時に見せてもらった雑誌に載っていた、人間を大量に載せて運ぶ外の世界の乗り物。名前は確か・・・

「・・・電車!？」

似たような攻撃を紫にやられたことがあった気がするが、あれは確か地べたを走っていたはず。それがどうだ。目の前のデカブツは私達と同じように空中を疾走しているではないか!

更に距離が縮まり、先頭の先端部分に足をだらりと垂らして座る罪々の姿。そうか、もしかしてこれが噂に聞く・・・

「さあいつくよー!恐怖、突撃・幽霊列車ー!!」

罪々が叫ぶ。・・・だが、大丈夫だ。外には城全体に結界が張り巡らされている。いくらあのデカブツとはいえこれを突破することは、
と思った矢先、列車は消えた。背景に溶け込んでいくように透度を増し、そして忽然と。なんだなんだ、何が起こったんだ、外を見回しても何も見えないし・・・もしかして結界で飛ばされて

「がっ!？」

出てこい!くらい言ってやろうと思ったが、背中に走る鈍痛のせいで息が続かず咽ぶような声がでてしまった。それこそさっきの列車に背後から衝突されたような激痛で、一切身構えていなかった文はそのまま崩れ落ちるように倒れ込んだ・・・。

「あの天狗、なんかさっきからまぬけなことばかりしてるけど大

丈夫？窓の外なんかぼーっと眺めてたら流石に霏々だって攻撃してくるわよ」

二重、三重にも渡って展開、飛来してくる弾幕群を紙一重で避けつつも余裕を見せる霊夢。

「あんな様子じゃ、霏々が勝っちゃうわよ？」

「・・・そう、あなたには見えていないのね」

「見えていないって何が・・・わとと」

不意に撃たれるレーザー攻撃もひらりと避け、反撃とばかりに無数のお札を天高く放り投げる。それらは暫くは自由落下を続けたが、霊夢が腕を振り上げた途端に矛先を紫へ変えた。

「焰哨火に幽霊列車。どちらも幽霊が扱う技の中では高度なものね」

「ちよつとちよつと。さつきから何訳の分からないこと・・・」

「だからー、霊夢には見えていないのよ・・・恐らく、あなたには見えないようにあの子が気遣っているのね」

「馬鹿なこと言ってるんじゃないわよ。あいつがそんな繊細なこと出来る訳ないでしょう？第一それをする理由が分からないわ」

次から次へと鋭い針のように紫を狙うお札は目標に到達する前に速度を失い、落ちる。しかし霊夢は怯むことなく再びお札を展開、先の倍の量を紫にたたき付ける。

「気遣いだって言ったじゃないの。あなたの戦いの邪魔をしないようにあなたには『幻覚』を見えないようにしてるのよ。もう、霊夢ったら意外とニブチンねえ」

「はあ？ふざけた理屈こねてないであなたのところの天狗が力不足

だって認めたらどう？見苦しいわよ？」

二度目のお札の襲来をスキマ回避し、霊夢の後方からひょっこり顔を出しては嘲笑う。

「・・・ま、いいわ。せつかくの対一の勝負よ、他人の戦いなんて気にしないで二人だけの戦いを楽しみましょう？」

「・・・言われなくても。ナメてかかると泣きをみるんだから！」

静かに、戦いは激しさを増す。

第十話 吹雪ヶ丘冬の陣 ～妖霊戦～（後書き）

文と罪々の戦いが激化する中、霊夢と紫も静かに戦いを進める。

さーて、来週の東方雪天城は？

罪々です。最近里の人達は寒くなってきたーっていうけど私はまだまだへっちゃら！お外で遊ぶのもいいんだけど、麓の巫女さんと一緒にお城の冒険中なんだ。そしたら妖怪天狗さんと戦うことになっちゃってもう大変！

次回、

- ・ 魔理沙VSさとり ～ 第二のダブルスパーク！
 - ・ 紅と白と紫と ～ 防壁と回避じゃお互い打点が通りません
 - ・ 妖霊戦2nd ～ 決着、勝利の七不思議！
- の三本です。

来週もまた見てくださいね。・・・じゃん、けん、ぽん！うふふふ

実際は三本中どれか一本です。

第十一話 吹雪ヶ丘冬の陣 便利屋の妖怪退治 (前書き)

あけましておめでとついでいいます。今年も執筆がはかどるといいです
ね。

第十一話 吹雪ヶ丘冬の陣 便利屋の妖怪退治

明かりのない空間。まるで彼女の為に取り払われたのではないかなんて思える程この空間は彼女に似つかわしいものだった。

真つさらな紙にあぶりだしをしたようにうつすらと浮かび上がる二人の少女の身体は、ひたすら不気味だ。互いに言葉を持たず、その瞳でいがみ合うように見つめ合っている。しかし二人は決して、影絵のように動くことはない。

ふと、片方が頭を小さく揺らす。

「私の出方を伺っているのですね。いつまでも仕掛けることなく、私に合わせて戦略を立てる」

「・・・そいつぁお前だって同じことだろ？私一人のせいになれるのは心外だぜ」

白黒の魔法使い霧雨魔理沙は内心を口にされて不安を覚えたが、恐れることはない。心を読まれようが、心に潜む弾幕とやらを撃たれようが、彼女には関係ない。圧倒的な火力で相手の攻撃ごと挨拶せよる、ただそれだけだ。

すぐさま魔力の補充にかかる。地底の悪者、古明地さとりをその弾幕ごと消し飛ばしてやるために。

「・・・なるほど。ならば」

魔理沙は右手に左手を添えて突き出す。狙う標的は勿論彼女の道を塞ぐ者。

「一撃で決めてやる！恋符、マスタースパーク！」

力のみで相手を封殺する魔理沙の主力スペル、マスタースパーク。発動こそ難があるものの、一度ぶっ放してやれば相手がどんなにあがこうとも強烈な魔力光線を叩き込む。まさに魔理沙の性格そのものを体言したような攻撃だ。

・・・だが、その攻撃をさとりが読んでいないはずがない。

「想起」

魔理沙のそれとは比べものにならない眩くような声。その微かな唇の動きに呼応するかのように、太陽光を反射した白い砂と見紛う光の粒子達が吸い寄せられるようにその手中に集まる。そして、その手を魔理沙と同じように突き出す。

「マスタースパーク」

宙を翔ける光。白く、また青く、赤くもある幻想の光は視界を埋め尽くし、正面からのスパークと激突した。

衝突面から溢れんばかりの光が拡散。床の木材を切り裂き、壁をえぐり、それでも暴れ足りないのか外に向かって一気に放出される。

それでも二人はスパークの射出をやめようとはせず、更に相手を飲み込もうと魔力を上乗せしていく。こうなれば単純な力比べだ。こ

れなら自分に分がある、そう踏んだ魔理沙はここで一気にケリをつけようと添えていた左手を前に突き出し、そして

「こいつでおしまいだぜ！ダブルスパーク！」

二本目のスパーク攻撃、それも標的は同じくさとり。単純に二倍の火力を手に入れた魔理沙はもはや退く理由なし、体内の魔力を全てスパークに注ぎ込んでやる。

すると、今まで手応えのあった相手のスパークが支え棒を外したように急に感触を失ったのだ。遮るものはない。魔理沙のスパークはさながら横向きの滝といった様子で正面のもの全てを飲み込んだ。

粉塵が舞う。思わず咳込んでしまいそうになる。

視界はかなり乏しい。先まで見えていた巨大な回廊は手を延ばした爪先さえもうつすらとぼやけている。

少しやりすぎたか、若干後悔が過ぎるが、それは例の葉の擦れたような声に掻き消された。

「流石は地底を徘徊できるだけのことはありますね。素晴らしい威力でした」

まだ仕留められてなかったか……。苦い顔を隠し、まだ粉塵の立ち込める周囲を十分に警戒する。

「……それが仇となり、あなたが進むべき道を自ら破壊してしまいましたけどね」

「な……」

粉塵がうつすらと晴れると、魔理沙はゆらりと肩を揺らして壁に手をついた。眼前に広がるはずののぼり階段が無惨な姿で壊滅していたのだから。

「力の扱いに慣れていないにも関わらず無理に魔力を開放しようとするから周囲に気を配れない。魔法使いとして致命的な行為ですね」
「・・・だが、それを受け止め切れなかったのは事実だろ？ パワーでは私の方が上だって証明された訳だ」

はっはっは、と笑みを作って腹を抱える魔理沙。そんな姿を見たさとりはくすくすと喉を鳴らす。

「確かに、あなたの魔力には目を見張るものがあります。長年の努力の甲斐でしょう、普通の人間にも関わらず背伸びをしたがるその性分が幸いしたと言うべきですか」

「何を言っても滑稽にしか聞こえんな！ お前は私のパワーに遠く及ばない、負け惜しみもいいところだ」

「負け惜しみ？・・・何を言っているのですか。負けたのはあなたではありませんか」

「ああ？何言ってるんだ。どうみても私の力の方が勝って・・・」

言葉を濁した。

気付いてしまったのだ。確かにパワー面では魔理沙が勝っているかもしれない。だがそれは命中していない、つまり魔理沙はただ虚空に膨大な量の魔力を注ぎ込んだだけなのだ。マスタースパークに加えてダブルスパークまで放った魔理沙は途端に肩に重みを感じる。やはり、かなりの魔力と体力を消耗しているようだった。

「さて、進路は断たれ、あなたに残されるのは退路のみになりました。これでは、もはや戦闘する意義は無くなりましたね」

完全にやらられ、苛立ちを隠しきれず舌打ちをする魔理沙。そんな心境も当然さとりには筒抜けで、更に追いつちをかけるように口を開く。

「大人しく帰るがいい。ここはあなたが易々と足を踏み入れられるような場所ではありません」

その瞬間、魔理沙は笑っていた。スパークに破られた壁から回廊を吹き抜ける風が金色の髪を微かに揺らす。

・・・こんなところで諦めるくらいなら、最初から城を昇ろう等とは思わない。やると決めたからには最後までやる、それが彼女、霧雨魔理沙という人間の強さなのだ。肩にかけた箒をドシンと床に突き立て、胸も声も大きく張って、

「こいつが回答だぜ！」

不安に駆られた人間は何をしでかすか分からない。しかしさとりにはそれがわかってしまう、だからこそあえて彼女は言葉を持つとはしなかった。

魔理沙が再び両手を前に突き出す。先程と同じスパークの構えであることはさとりにもよくわかった。だが、さとりは常に魔理沙の心を聞いている。今詠唱しているのが先のマスタースパークでないことも、彼女の狙いがさとりでないことも・・・。

街灯のような光を纏う手が標的としているもの、それは……

「いくぜ、エスケープベロシティ！」

刹那、床に突き刺さった筭を両手でわしづかみにする魔理沙。同時に手から液体のように流れ出した光はそのまま筭の下部へ。全ての光が移動を終えるまでほんの一瞬、その瞬間筭は凄まじい青と白の衝撃を床へ向けて放ち魔理沙の体ごと上昇。しかし、迫りくるは天井である。このままでは激突してしまうが、魔理沙の笑みは揺らない。寧ろ更に唇をつりあげる程だ。

「いつけえええ!!！」

勢い衰えることなくそのまま激突！木片が大量に降り注ぎ、下で様子を眺めていたさとりは思わず目を庇い俯いてしまう。衝撃波はその階層全域に渡って拡散、凄まじい突風でさとりの体を揺さぶる。

「やはり、狙いはこれでしたか」

……次に見上げた時に残されていたのは天井にぼっかりと開いた穴のみ。吹き抜ける風が、今度はさとりの表情を歪めてしまった。

「……彼女を暴れさせてみるのもまた一興ということですか。とはいえ、あまり長い時間はかけられませんね」

控え目なため息を一つつき、さとりは迂回路を探すべくもと来た階段を下っていった。

第十一話 吹雪ヶ丘冬の陣 ㄱ便利屋の妖怪退治ㄱ (後書き)

ベロシテイ外した時の絶望感つたら半端ないですよ。相手が5コ
スのスペカセットしてた時なんてもう・・・

第十二話 吹雪ヶ丘冬の陣 ～風神少女～（前書き）

冬の陣もいよいよ終盤戦。激化する戦いの中、次々と浮かび上がる疑問とは？

ってまともに予告しても面白くも何ともないですねすみません。

第十二話 吹雪ヶ丘冬の陣 ～風神少女～

視界が揺らぐ。

危うく意識が反転しそうになるところを何とか堪える。背後を襲った強烈な打撃を、体を反らすことで辛うじて直撃は避けたものの、文が受けた身体的ダメージはやはり大きなものだった。先の自爆も含めるとかなりのハンデを背負うことになる。

とはいえ罪々もスペルカードによるダメージを受けているため、絶望的に不利という状況ではない。幻覚による攻撃を二度も受けていれば流石にもう引つ掛かることはない。天狗とは賢い生き物である。あんな正体も分らないような幽霊と一緒にされては困る。

文が飛び立つ。再び持ち前の速度で罪々を攪乱しようというのだろうか。

「二度も同じ手は通用しないよ！」

高速で飛行する文を足で、目で必死に追う罪々。たどたどしい足どりではあるがその視線は食らいつくように文から離れず、それを振り切ることはできない。

しかし、それでも文は焦ることはしなかった。それどころか余裕の笑みをも浮かべ、回廊の隅から隅へとピンボールの玉ように飛び回る。

「むっ……降りて来ないならこっちからいくよ！ひっさーっ、怪奇・ポルターガイスト現象！」

きた、スペルカードだ。詠唱を確認した文は直ぐさま飛行をやめ、

霏々のすぐ隣に着地する。予定外の事態だったのか、霏々は手足をばたつかせながらあたふた。その場を離れようとしたところをがちりと腕を掴んでやる。肌を刺すような冷たさが腕全体を襲うが、そこは我慢である。

暴れる霏々だが、一度捕えてしまえば離すようなことはない。空いた片方の腕に扇を天井に掲げ、そして一閃。

嵐か、はたまた台風か、とにかく凄まじい力の風が城内に吹き荒れた。文が一度扇を振るえば風向きは生き物のように唸りをあげて上向きに変わり、再び振るえば更にその強さを増す。

竜巻にも似た突風を超える風、激風が城内を貫いたその瞬間、文は床を蹴った。がっしりと掴まれた腕は離されることはない。

幸い天井はかなり高く、この位置からなら十分な威力が期待できるであろう。

「た、高いー！何するつもりなのー？」

「ちょっと痛いかもしれませんがそれはおあいこ、恨みつこ無しですよ」

天井に足をつき、宙ぶらりん状態になる。まるで天井に吸い付いているように見えるが、激風によって押し付けられているというのが答えのようだ。

地上と同じように扇を振りかざす。風向きを変える合図だ。今回文が所望する風向き、それは

「疾風の彗星落とし！」

くるりと体を反転させ罪々の背中を足で突き飛ばす。同時、今まで上向きだった風が途端に下向きに変わったのだ！重力、蹴力、加えて風力の加わった罪々の体はぐんと速度を増し、地面に向けて弾丸を放ったような形で急速落下。あまりの速さになすすべのない罪々は声一つあげる余裕もなくそのまま床にたたき付けられた。

風が止む。巻き上げられたた土埃が視界を汚し、上空から罪々を捉えることは困難のようだ。十分警戒し、半分手探り状態で壁をつたいながら床へ足をつける。

反撃の様子はない。流石に沈黙したか、次第に土埃が晴れていく中、文は接近を試みるのだが、完全に晴れたところでその表情が凍り付く。

「・・・」

そこに、罪々の姿はなかった。

そんなはずはない、あの速度で激突したのだ、こんなすぐに動けるなんてことはまず有り得ない。

ならば、自分が掴んでいた罪々が幻覚だったとでもいうのか？・・・いや、彼女を掴んだ感覚は確かに幽霊のそれだった。間違いない、あれは幻覚なんかではない。ということは、だ。

「こつちだよ、天狗のお姉さん」

ゾク。

背筋に走った感覚はそんな古典的な表現が最も適切だと思う。虫がはいずくばったような、嫌な感じ。

「私ね、恨みが膨れれば膨れるほど力がみなぎってくるんだー」

もはや文は霏々の顔をまともに見ることすら出来ない。一瞬でも視線が合おうものならたちまち蛇に睨まれた蛙のごとくぴたりと動きを止めてしまう。

それを面白がってか、霏々は首を少し傾けて清々しいほどの笑みを浮かべながら近づいてくる。それすらも、文には恐怖の対象となっていた。

「だからねー……」

感覚的な恐怖が確信に変わるのには、今まさにその時だった。

「すぐ楽にしてあげるよ、天狗のお姉さん？」

張り巡らされた弾幕による結果、飛び交う札、クナイ、陰陽玉。あらゆる弾が交差するそのフィールドで、しかして彼女達は実に冷静な眼差しでもう一方の戦いを楽しんで観戦していた。

というのも、天狗と幽霊が戦うなんて滅多にないことである。自分が文のような新聞記者であれば、間違いなく飛びついた特ダネであろう。

「あんな高いところから落ちて平気かしら霏々・・・」

「あら、なんだかんだいってあの幽霊のこと心配してるのね。霊夢ったら意外とやさしい」

「うっさい」

不機嫌を弾幕にのせて攻撃するものの考えも無しに放ったそれがあたるはずもなく、虚しく空を切る。

「幽霊はあなたたち人間に比べればかなり頑丈だから心配ないですよ。・・・それに」

境界に身をひそめながら紫が珍しく余裕を失った顔になるものだから、思わず霊夢は弾幕の手を緩める。

「あの子、ただの幽霊じゃないわ」

確かに身なりも性格も普通とは言い難いものではあるが、そんなことは今更である。紫がわざわざ口にして立証するようなことでもない。

紫は続ける。

「怨みをそのまま霊力へ還元する能力をもつ、恐怖へ陥れることに特化した亡霊。噂を聞いたことがあるわ、幽々子が冥界で手をやいた恐ろしい幽霊がいるって話」

「・・・それが罪々だっていうの？まさか、あの子が幽々子も怯える幽霊なはずないわ。私なんかちつとも怖いなんて思わなかったし」「そこなのよね」

その言葉を待つてましたと言わんばかりの応対だった。紫は殆ど表情も作らず、桃色で美しい唇をそっと開いた。

「亡霊は誰彼構わず驚かせるのが生業。他人の恐怖が直接力になっていると言っても過言ではないの。・・・でも、彼女はあなたを脅かさなかった」

「あの子はね、私が神社の巫女だと分かった途端に驚かすのをやめたのよ。私の活躍に恐れを為したんでしょね、悪い気はしないわ」

「・・・」

襲来するレーザーを避け次の攻撃に備えた霊夢だったが、視界にあるはずの弾幕はまるで姿を見せることはなかった。

「ちょ・・・何よ。いきなり試合放棄のつもり？」

「あなたが巫女だと分かってすぐに脅かすことをやめた。・・・おかしいとは思わない？」

首をひねる霊夢。紫の話が全て真実だと仮定するなら確かに、冷静になって考えると都合のいい話に聞こえなくもない。この雪原にくるまで出会った妖怪は一人として例外なく霊夢を襲ってきた。

今回ばかりではない。かつて起こった異変で出会った妖怪、幽霊、時には人間まで襲い掛かってくる。幻想郷にはどうしてこうも好戦的な奴しかいないのかなあ。そんなことをため息も交えて考えてみたが、本筋から外れていたためやめることにする。

「私は、そんな発想に至るあなたの頭のほうがどうかしてると思うわ。あの子が何か企んでいるってどういうの？」

ほんの冗談めいた口調にも関わらず、紫はつとしたような顔で口元を手で隠した。

「企んでいるだなんて一言も言っていないじゃないの。・・・でもくすくす。そんな笑いがひそかに零れた。

「彼女がこの城の住人であることは殆ど確定ね」

霊夢は啞然として次打ち出すべき言葉を見つけることができなかった。

・・・思い返してみればそれを確認づけることが浮き上がる。この城に侵入する手引きをしてくれた罪々であるが、地下に結界の張ってない入口があるだなんてそう安々と仕入れられる情報ではない。ましてや、先日出来た城である。

紫の言葉は胡散臭いが、しかし筋は通っていた。本当にこいつは私の敵をしたいんだか味方をしたいんだか・・・。

「ご忠告ありがとうございます。でも、まずは目の前の敵を倒すことにするわ！」

「本当、相変わらずねえ。なんなら、久々にアレ使っちゃおうかしら？」

吹き荒れる風がぴたりと止み、二人の動きもついにはなくなる。長い夜が、静かに幕を開けようとしていた。

第十二話 吹雪ヶ丘冬の陣 風神少女 (後書き)

いよいよ今回の異変の全貌が・・・あれ、全然見えてこないですね。
これは意外と長期連載になりそうな予感・・・。

第十三話 吹雪ヶ丘冬の陣 〱終結〱（前書き）

いよいよ決着！早苗さんの活躍にご期待下さい！（多分出ません）

第十三話 吹雪ヶ丘冬の陣 〔終結〕

罪々の表情は常に笑みで溢れ返っていた。それは何故か。

幽霊には他人の恐怖や他人への怨みを糧として生きるものがあるらしい。冥界へ行った時にもその能力を持つ者数名に取材を試みたことがあるが、いずれも恐怖を糧にして生きる幽霊ばかりで、怨みを糧にするものに出会うことはついにできなかったのを覚えている。

記事にもしたが、あまり評判は良くなかったかな。

しかし、今目の前にいるこの少女は恐らくその能力を二つとも兼ね備えている。そうでもない、先のスペルカード攻撃をまともに受けて立っていられるはずがないのだ。

つまりはこうだ。ダメージを受けてもそれは私への怨みに繋がり回復、私が彼女に恐怖しただけで回復。・・・まるで魔力が無限に沸くようになった魔法使いのようだ。そんなのをまともに相手にしたらこちらの分が悪い。

「すぐに楽にしてあげる、とは言いますけどね。あなたにそんな力がありますか？今までだって私の自爆を誘うような攻撃ばかりで、一度だって私を捉えたスペルカードはありませんよ？」

単純な挑発行為だが、こうでもしないと向こうから直接仕掛けてくることはまずないだろう。騙し合いになってしまっただけは流石に不利は否めないが、力と技で勝敗を決めるとなればその限りではない。

「・・・それじゃー取っておき！天狗のお姉さんには最後にすつごいの見せてあげるから、覚悟しておいてね！」

「ほほう、そいつは楽しみです。うまく私を打ち負かすことが出

来たら明日の記事の一面はあなたで飾ってあげましょう」

「ホントに！？むむ、だったらいつもの倍張り切っちゃおうよお！」

ほいほいのつかつてくれるところは単純なものである。とはいえどうやら罪々にも何か奥の手があるような言い回しだ。身体能力ではそうは負けないと思うが、念には念を入れて警戒すべきであろう。

先手を取るに越したことはない。罪々が動きを見せるその前に地面を蹴って飛翔を開始、気温が大分低く翼に霜が降りそうな程だ。肌も赤くやけてしまつて、後の手入れがいささか不安ではあるが、そこはぐつと我慢。

狙うは勿論罪々の両腕だ。何かアクションを起こされる前に腕を封じ、そのまま空中に持ち込めば足も封じることができる。そうなれば何も出来なくなるのは先の流星落として実証済みだ。呆気なく両腕を取られ途方に暮れる罪々の表情が今にも浮かんでくる。幽霊め、遊びに付き合うのもこれで終わりにしてくれる。

そんな幻想は、音もなくあぶくのように弾け去った。

「・・・!？」

確かに視界に捉えたはずの両腕、それも正面だ。この距離で見失うはずがない、距離、角度、速度とどれをとっても完璧なはずだった。なのに。

そこには、惑う文をあしらつように細長い布切れが風に靡いているのみだったのだ。

「幻影でも何でもない・・・まさか、本当に消えた？」

問いかけても布切れが答えてくれるはずもない。新聞屋として己の目で見たいことは信じる方であつたが、流石に今回ばかりは先の自らの視力を疑いたくもなる。・・・本当は、最初からそこにはいなかったのではないかと。そんな思考が過ぎる程、罪々は唐突に消えてしまったのだ。

落ち着け。慌てるな。何も消えたのは今回が初めてではない。先の幽霊列車の時も同じように私の前から姿を消したではないか。不意さえつかねなければ、全ての事象に疑心を持ってはいだけのこと。扇を片手に右を、左をしきりに警戒するその姿は小学生が横断歩道を渡るその様だつた。

「其の一、亡殻の神隠し」

ビク、思わず肩に電撃が走つた。その声は確かに罪々のものであつたが、しかして罪々のものではなかつた。恐怖を力に換えるというが、だとしたら今、かなりの力を与え続けていることであるう。たつた一言が麻酔のように神経に染み渡り、体中どこに力を込めても言うことを聞こうとしない。

木材の落ちるような乾いた音に再び肩が震える。音のした方を向いた時には既に巨大な木箱が目前に浮遊していて、文を嘲笑うようにゆらゆら右に左に揺れていた。

ガタ・・・

ガタ・・・

ガタ・・・

連続する音。先の木箱をはじめ、回廊を照らしていた蠟燭立て、穴の空いた襖・・・手当たり次第物に命が吹き込まれたように、けらけらと軋む音を立てながら宙を舞っていたのだ。妖精や妖怪にされるならまだしも、無生物が黙り込みを決めて宴でも始めようかというその様は文が一步後ずさるのには十分すぎる光景だ。

「其の二、浮遊する死体」

まただ。どこから話しているか分からないが、それが恐怖の対象になることにはなんら変わりない。こんな小細工、扇で一扇ぎして吹き飛ばしてしまえばいい。頭では分かっているのに体は言うことを聞かない。まるで・・・誰かに・・・

「降参、降参よ」

ふと、今まで動きもしなかった体が重しが取れたように軽くなるのがよくわかった。

そうなつて漸く回りの光景が見えてくる。中でも白旗、お子様ランチに刺さっているようなサイズの物をパタパタと振り回す紫の姿が特に目をひいた。降参、つまりはそういうことらしい。

「霏々、勝負はついたからもういいわ。戻ってきなさい」

「え？もう終わっちゃったの？すごい、はやーい！」

この娘に、私は怯えていたのだろうか。私が怯えていたのはもつと強大で、得体の知れぬものだったような気さえた。そんなことを考えていると余計に体の力が抜け、ぺたりと手を、膝をつく。

「やっぱり霊夢は強いわねえ。私なんかじゃぜんぜん敵わないわあ」

「・・・当たり前よ」

霊夢はそう短く切り上げると、霏々を連れてさっさと上へのぼって行ってしまった。それをひらひらと手を振って見送る紫。・・・なんだか、馬鹿らしくなってきた。

「はい文たんお疲れ様」

「はえ！？・・・いつのまに隣にいたんですか」

「あーら随分臆病ねえ。ちよーっと脅かしたくらいじゃびくともしなかつた文たんがどおしたのかしらん？」

・・・。

いつもなら面倒なだけの彼女だが、何故かこの時だけは妙な安心感をもたらしていた。・・・ただ単に呆れ慣れてしまっただけかもしれないが。

「なんでもありませんよ。それより何巫女相手に負けているんですか。あなたのような大妖怪ともあるうお方が・・・」

とまで言って言葉を切る。紫が凍り付いたように表情を固めていることに気付いたのも、ちょうどその時であった。

「ババーン！霧雨魔理沙、華麗に参上だ・・・ぜ？」

床を突き破って着地した魔理沙であったが、彼女の登場を迎える者は誰一人としていなかった。木箱や蠟燭立てが散乱したり、壁や襖に穴が開いていたり、台風でも通りすぎたような光景に思わず啞然とする。

「うむ、出遅れたみたいだな……。ま、かえって好都合だぜ」

にや、と白い歯を見せて笑みを作る魔理沙。このままペースを落としながらのぼっていけば、最上階についた頃には大体邪魔者は片付いているだろう。そうなれば、手間が省ける。

エプロンの白を外の雪景色に溶け込ませ、黒ばかりが目立つ魔法使いの姿を捉えるものは誰一人としていない。便利屋としては客のいない状況は寂しいところであるが、盗賊的にはなんとも好都合な環境である。

そしてそのまま、光の失せた雪天城の上部へ静かに消えていった。

第十三話 吹雪ヶ丘冬の陣 〔終結〕（後書き）

魔理沙の空気っぷりにご期待下さい！

第十四話 岐路（前書き）

サブタイトル思い付かなかった訳ではないですよ！

第十四話 岐路

なんと言っても驚いたのはあの八雲紫があっさり白旗をあげたことである。大妖怪ともなればプライドも高く、てつきり相手をたたきのめすまで退くことなどないと勝手に考えていたのだが、今回の一件からすればそれは誤認であった。『八雲の大妖怪、博麗の力にまさかの降参か!?!』の見出しでいけば話題になるやも・・・ならぬいか。

ことの紫は先ほどからだんまりを決め込んでいる。よほど負けたのが悔しいのか、その割には白旗を振っていたときには笑顔丸出しであったのだが。

「八雲さん、何を考えているんですかい？ やっぱり博麗に白旗を上げたことが・・・?」

すると、鉄格子のように重く閉ざされていた紫の口が静かに開きだす。

「あの罪々とか言う娘、どうだと思っ?」

「・・・はあ」

言ってる意味がよくわからず息をつくような相槌を打つと、紫の方も珍しく小さくため息のようなものをつく。なんだ、私何か悪いことしましたかねえ。

「やっぱり、負けたこと気にしているのでは・・・」

言いかけ、やめておく。紫が蛙を睨む蛇のような目を投げってくるものだから。

「天狗は気楽そうでいいわね。物事の本質をまるで見ようとしな
いな、何を言うんですか。真実をいち早く幻想郷にお伝えするの
が使命のこの私が、本質を蔑ろにするなどありえないことです」
「だったら、もう少し頭を働かせることね」

言いたいことはよく分からなかったが、やはり大妖怪としてプライ
ドそのものは高いようだ。幾年も生きながらえた彼女がものの数年
しか生きていない人間に負けるなど、到底あつてはならない話であ
る。

「へえ、随分なことになってるではありませんか」

突然の第三者の声。そよ風のような存在を主張しないそれは、二人
にも聞き覚えがあつた。私もその顔には少なからず驚いたのだが、
それ以上に紫は彼女の登場を複雑な面持ちで迎えていた。

「あら、珍しい顔ね。直接会うのは何年ぶりかしら、古明地さとり」
「二百九十九年。地底に妖怪を封じる契りを交わしてから今年で三
百周年。しっかり記憶してしてくれたようで、光栄ですね」

「・・・それで、その地霊殿の主がこんな空高くまで何の用かしら
？」

静かな圧力。低脳な妖怪の口喧嘩とは訳が違う、息苦しいほどの威圧感がそこにはあった。見ているこっちまで足がすくむ。

「野暮用ですよ。あなたには一切関係のないことです」

「嘘。でなければ、あなたがわざわざ地上へ来るはずがない。・・・心が読めるなら分かるでしょう？私が、あなたに、どんな疑いを、かけているか。シラを切ったら、どうなるか」

「・・・流石は地上の賢者といったところですか。見通すことの出来ない事実はない、と」

くすり。さとりは微かだが喉を鳴らし、唇をふわりと浮かせた。

「あなたは論理的すぎる。だから物事の本質をまるで見ようとしな
い」

「取って付けた様な言葉をどうも。それともあの愚かな娘のように、
あなたも第三の瞼を閉じたのかしら？」

「・・・」

一瞬顔を歪めたさとりであったが、次の瞬間にはもう表情を持たな
かった。

「物事の本質はその精神を解して漸く導かれる。その点において、
本質を真に理解する者などこの広い世界には存在し得ない」

「相変わらず戯れ言が好きなのうだけど、あなたのそういうところ、
私はどうも好かないのよねえ。回りくどいところとか特に」

「・・・そう、それは残念です。どうやらあなたに協力は仰げない
ようですね」

「残念だけど、今までの態度が協力を求めているようにはとても見

えなかつたわ。ごめんなさいねえ」

来訪する無言の時間。記者としては夢のような大物同士の対談ではあったが、空気を押し潰すような圧力のせいでペンを走らせる腕は動かせそうにもない。これが妖怪のトップ、これが幻想郷の頂点の会話……。

「あら、上へ行くの？」

のぼり階段に足をかけたさとりに紫が問うと、ゆらりと毛糸のようにくせのある髪を揺らしながらこちらを向く。表情は相変わらずない。

「……全ての事象を、そしてこの幻想郷を分断されては困るのですよ」

その瞬間、普段はぎらりと光る細い瞳を何故か控え目に見開いた。

「……何ですって？」

「ふふふ、それでは八雲さんに山の天狗さん、どうかお元気で」

それだけ言うと、ついにさとりは階段の彼方へと消えてしまった。残されたのは二人の少女の姿、そして全てを凍らせてしまうような冷たい空気のみだった。

紫達に勝利した霊夢は、普段であれば意気揚々と勝利の余韻に浸っているはずだった。・・・はずだったのだが、先の戦いが霊夢に不安と疑念を与えていたことに本人も気付いていた。

というのも、紫が降参の白旗をあげた理由である。紫本人は笑顔など浮かべながら降参した訳であるが、霊夢も紫も半分文と霏々の戦いを観戦、評価しながら戦っていた節がある。つまり、どちらもまだ本気には程遠かったということだ。

それが突然降参等と言われては、流石の霊夢も不審に思うというわけである。ただ単にあいつの気まぐれならいいのだけど・・・そうは思いつつ、しかし心中は雨の降りそうで降らない空模様のように複雑だった。

「これで、このお城の偉いに人にも会えるね！」

・・・もう一つ気にかかるのはあの時の紫の発言だ。彼女いわく、霏々は幽々子すら手をやくような危険人物であり、その上この城の住人であることがほぼ確定しているという。

そもそもこの城自体が一日で沸いて出たような謎だらけの城なので、霏々がうんぬんの前にこの城と、城の住人の秘密を解き明かさなければならぬ。昨日の夜のうちに出来た城に理由もなく何人も妖怪が住み着くとは考えがたい。

とにもかくにも、この城の主に会ってみないことには話が進まない。

「霊夢ー？どうしたの？」

そこにあつたのは、霊夢のよく知る霏々の無邪気な顔だった。

「いえ、何でもないわ。さつさとあの座敷わらしに親玉の居場所を
聞いちゃいましょ」

万が一霏々が何か企んでいたとしても、その時は退治してしまえば
いい話である。この時は、そのくらいに考えていたのだった。

室内にも関わらず豪雪が降りしきる広間。窓のようなものはない、
外との繋がりはたった一枚の襖を除けば他に一切存在しない。視界
を白に染め上げる雪が、ここが密室であることを忘れさせてしまう
ほどだ。

雪の様に白い、なんて安直な表現が最も適切であろう美しい肌が、垂れ下がる程長い着物から極僅かに露出していた。頬も同じで、決して人間のそれとは思えない。人形のように長い髪は結わうこともなく雪と絡め、その毛先は危うく積雪に埋もれそうである。端的に表現するならば、実に幻想的な光景。

美しいものには刺があると昔から言っただように、彼女にも鋭く硬い刺が存在した。一瞬たりとも気を抜けば身体ごと貫いてしまう強靱な刺。彼女にとってのそれが、この密室であった。

一度取り込んだ獲物は決して逃がすことなく捕らえ続け、ゆっくり体内で消化するように対象物を殺す。ただ一つ違うのは、それには途方もない苦痛を伴うことであろうか。

そして彼女は今日も、まだ見ぬ来訪者に思いをはせるのだった。

第十四話 岐路（後書き）

次第に明らかになる城の謎、登場する意外な人物。物語の行方は？
果たして霊夢は異変を解決することができるのか？激闘編、いよいよ
よスタート！

・・・はしないと思います。

第十五話 いんきよむすめのみるゆめ(前書き)

サブタイトルでぴーんときた方！期待はずれでごめんなさい！

第十五話 いんきよむすめのみるゆめ

針のように身を刺す猛吹雪もここばかりは吹き込んでくることもなく、心なしか暖かい。畳張りの大広間、霊夢達がそこに着いた時の彼女は前回と全く同じ位置でお見合いのように正座していた。わざわざ邪魔者を排除してきてやったんだ、もう少しくらい歓迎の拍手とかあってもいいと思うんだけどなあ、などと考える程彼女、家神富亜の対応は冷めたものだった。

元々彼女がアクティブな性格でないことは前回会話した時によくわかってはいたものの、やはりというかなんとというか、やりづらい・・・。

「邪魔な奴は片付けてきたわよ、これでいいんでしょう?」

霊夢が頭を掻きながら言うと、富亜は顔色一つ変えずにその唇を開く。

「ありがとう」

ミッションコンプリートだ、これで漸く城の主にも会うことも出来よう。これだけ規模のでかい城を統括している人物だ、少しはやりごたえのある敵に違いない。

「さ、約束よ。あんた達の主のところまで案内しなさい」

ところが富亜が返した答えは霊夢の予想とは真逆のものであった。

「まだ」

・・・まだ？

確かに彼女の言う通りに城に蔓延る邪魔者達は退治してやった。にも関わらず、更に条件を付け加えようともいうのか？何なら強行突破してやってもいいんだ、文句の一つでもぶつけてやろうと思っただが、先に口を開いたのは富亜の方だった。

「まだ、いる」

「何言ってるのよ、二人も追い払ったっていうのにまだ誰がいるって・・・」

先刻まで快活に動いていた口が突然覇気を失った。

・・・思い当たる節があつたのだ、この城に侵入してくる可能性がある者の存在を。そしてその可能性は、富亜のたった一言でほぼ確実となった。

「あいつ・・・解決を手助けするどころか邪魔してるじゃないのよ」「ふえ？あいつって？」

珍しく口を閉じておとなしくしていた罪々が火のついたように喋り出す。

「ああ、そういえばあなたは会ったことなかったわね。・・・厄介なこそ泥のことよ」

「ふええ・・・じゃあじゃあ、そのこそ泥さんも退治しなくちゃいけないの？」

「えー、まあ、そういうことになるかもしれないわね。ちょっと脅せばこのご帰ってくれるかもしれないけど」

「脅かすの？ 霏々、そういうの得意だよ！ ばあ！」

「いや、そんなほほえましい顔されても驚かないから……。ま、あいつを脅すのは私に任せなさい」

疑問符を浮かべ首を傾げる霏々。まーいざ戦うとなってもこっちは二人、万に一つも負けることはないでしょう。

「そっぴえば、あんたは戦わないの？」

見るからに戦いは苦手です顔の富亜ではあるが、それにしても人間を襲うことは妖怪の本能のようなものだ。先の邪魔者は妖怪だったからまだしも次は人間、富亜も加わって三人になればかなり楽になるのだが……。

「戦いは嫌い」

はい予想通りすぎる返答いただきました。

「……でも」

と思いきや、富亜はこの後思わぬ提案をしてくる。

「幸運なら、あげる」

座敷わらし。すっかりその事実を忘れていたが、そういえば彼女は激レア妖怪だったっけ。どうやら私に幸運をもたらしてくれるらしいが、座敷わらしって家主に福をもたらすんじゃないかしら……。

ま、幸運が手に入るの願ってもないことだ。帰ってみたら寶銭箱

がぱんぱんだとか、そんな感じの幸運がいいなあ。

「って、それが邪魔者退治と何の関係があるのよ」

「・・・後で分かる」

富亜の透けるような声はどうも信用ならない。・・・とはいえ某魔法使いに蔓延られるのも癪だ、今のうちにさっさと追い出してしま
うのが吉であろう。

「うー仕方ないわねえ。分かったわよ、どうせ乗り掛かった船だわ」

普段ならこんな面倒で実にもならない話を請けることはまずない。

異変解決に乗り出すのも生活費が目当てだし、今回の一件も同じ理由である。

「ただし、やるからにはここの主の部屋まで案内する以外にも何か
しら報酬をよこしなさいよね」

つまりはそういうことらしい。

「・・・」

その言葉に首肯する富亜の表情に、変化を見出だすことはやはり出来なかった。

黒と白。

二色の境界が線となつてどこまでも続く空間の調度中心に立ち尽くす彼女は、長く伸びた金髪を風もないのに揺らしている。

空もなければ海もない。太陽もない、空もない。ただ黒と白、たった二色で構成された不気味な場所に一人色彩を加える彼女の姿はそれ以上に奇妙だ。完成された水墨画に油絵で人を描いたらまさにこの光景になるだろう。

広がる世界。

なおも世界は改変を繰り返し、人間は活動範囲を広げ続けている。その勢いはとどまることを知らず、放っておけば地上の全てを奪い尽くし、まだ見ぬ星の外へ居場所を求めようになるのもそう遠い話ではないだろう。そしてその時、初めて人間は己の小ささ、愚かさ気付かされるだろう。

・・・故郷の者達の手によって。

「おやおやまあまあ。随分と趣味の悪い場所を作ったねえ」

ふとした声に振り向くも、そこにいた人物の顔を確認して胸を下ろす。

「・・・あの結界師にも感づかれないように細工したというのに、まさかあなたにバレちゃうなんて。どんな魔法を使ったのかしら?」
「こんな精度の低い隠蔽結界じゃ感づかれない方が不思議さ。・・・それより、随分と面白そうなことやってるじゃないかい」

にやにや目元を緩める少女はゆったりと腕を組み喉を鳴らす。

「あなたも相変わらずのようね。まだ人類侵略なんてことやってるのかしら?」

「もう私も衰退期さ、今は弟子に魔法を授けてのんびり隠居生活だよ」

「弟子? 私が幻想郷にいた頃にはいなかったわよね?」

「ああ、最近出来たんだ、人間の弟子さ。こいつがとんでもない努力家だねえ、教えてもないことを次々と自力で習得しちまう。まー私とは正反対の奴だよ、うしし」

喉を鳴らすも、その声色は本当に弟子を誇りに思うような口ぶりだった。そんな立派な弟子ならばやはり幻想郷侵略くらいは目論む人間なのだろうか。そう問いて返って来た言葉は思わぬものだった。

「いや、今は異変解決をやってるみたいだよ。人間の相手は妖怪だつて相場が決まってるのさ」

「・・・何よそれ、つまり師匠のあなたを裏切ったってこと?」

けろりと笑みを絶やさないう少女。弟子の話となると止まらないらしい。

「裏切るも何も、さつきも言っただろう。私は現役を退いたんだ、もう人類侵略なんてことには興味ない。何をしてもあいつの自由って訳さ」

「・・・変わったのね、あなたも。昔だったら目の色変えて強力な人間を根絶やしにしたというのに」

「うしし、そりゃ人類侵略は私の夢だったからな。誰でも夢を追いかける時は血眼になるもんさ」

その時初めて少女が目を俯けたのを見逃さなかった。

「ふふふ、興味が無いとは言いながらそう簡単に夢は諦められるものではないわ。あなたの心底には、まだ当時の野心がツタの根のようにごびりついている・・・そうでしょう?」

「さあ、どうか」

「ごまかしたってダメよ。・・・ねえ、私に協力しない?昔のあなたなら飛びつくような大仕事よ」

「なかなか残酷なことを言うねえ。私の弟子が敵対するようなことをしているんじゃないのかい?」

「私は妖怪よ?残酷なのは道理に適っていると思うけど。・・・ま、私とあなたの仲だわ、協力してくれるというのならあなたの弟子だけは見逃してあげなくもないわ」

長い沈黙。この空間に入り込んで来たということは、少なからず興味があるのだろう。不利な条件はない、彼女であれば間違いなく乗ってくる、それだけの自信があった。

そしてその自信は、やがて現実のものとなる。

「引退の前に、もう一度暴れてみるのもいいかもしれないねえ」

「あら、引退する必要なんてないわよ。あなたと私が手を結ぶのも、失敗なんてありえない」

白の空間に居座る少女の姿が消えたと思えば、黒の空間で二人の少女がただ静かに喉を鳴らしていた。

第十五話 いんきよむすめのみるゆめ（後書き）

お話しもいよいよ終盤かとおもいきや謎の人物颯爽と登場。どろどろとした展開にご期待下さい！

第十六話 異変の影（前書き）

ここにきて急展開を迎えるとか迎えないとか！必見です

第十六話 異変の影

幸運と聞くと誰でも胸踊るものである。

霊夢もご多分に漏れることなく、寒さにもめげず意気揚々と邪魔者探しに出発した訳だが、早速幸運効果が表れたらしい、階段を降りてすぐの広場（先に霊夢達が戦いを繰り広げた場所）に見慣れた顔を発見した。

「あ、見つけたわよ魔理沙！」

「お、見つかったぜ！」

黒と白の服、金髪に帽子。こやつが我らが憎む敵、霧雨魔理沙である。

「あんたのせいでこのボスにいつまで経っても会えないのよ、さつさと降参してここから出ていきなさい！さもないと・・・」

懐に忍ばせた針をキラリとちらつかせるその様は完全にいつもの妖怪退治テンションである。この姿を見た霊夢の知人は人間だろうが妖怪だろうがこそつて両手あげて逃げ去りたいものだが、どうしたことが、目の前の人間はそうはしなかった。

「霊夢、いいことを教えてやるぜ」

「いいこと？何だか知らないけどここは譲らないわよ」

「実はな、ここにはもうボスはいないんだ」

。。。。
何を言うかと待ち構えてはいたが、流石の霊夢もその言葉には固まった。

いやいや、それじゃ富亜が嘘をついてるってことか？いやいやいや、確かに二度もおつかいに繰り出されて怪しいとも思ったがそんな嘘をついてメリットがあるとは思えない。

だがしかしそれは魔理沙とて同じことだ。ボスがいると仮定して、それなら私に任せるか二人で協力したほうが圧倒的に効率がいい。つまり嘘をつく必要はない訳だ。

ただ、一つだけ疑問があった。

「そんなこと、どこで聞いてきたのよ」

一瞬黙った魔理沙だが、次の瞬間にはもうけろりとした顔で

「そいつは言えないな。情報の等価交換は商人の基本だぜ」

いつから商人になったのよなんてツツコミは時間の無駄なのでスルーとして、要は魔理沙側も何か情報が欲しいらしい。

「珍しく合理的ね。で、何が聞きたいの？」

「そうだなー。。。ん、じゃ霊夢の後ろのそいつは誰だ？」

「ああ、罪々のこと？そういうえば魔理沙は会うの初めてだったわね。えっとこの子は。。。」

言いかけ、唇を止める。

結論から言えば巫女服の裾を引っ張る罪々のせいなのだが、その顔

は明らかに嫌悪に満ちていた。こんな罪々を霊夢は見たことがなかった。言葉では何も語らない、だが、その瞳はまるで私のことを魔理沙に教えないで欲しいと訴えかけているようである。

「なんだぜ？ 私には心を読む程度の能力はないからちゃんとした言葉で頼むぜ」

言うべきか、言わぬべきか。それは罪々の表情を見れば一目瞭然である。

「私の友人よ。はい等価交換」

「お、おいおい。いくらなんでもそりゃないんじゃないか？ こんな不平等な取引、素人でも通用しないぜ」

「嘘は言っていないわよ。第一私が要求してる情報だつて大したものじゃないでしょうに」

「ボスがいないって情報だけでもありがたく思っただけ。それも含めた等価交換だと思えば安いものだろ？」

「あら、いつになく強気じゃない。・・・そもそもなんでそんなにこの子のこと知りたがるのよ、新聞屋の馬鹿天狗じゃあるまいし」

「あ、いや・・・なんなら他のことでもいいんだぜ？ 霊夢のスリーサイズとか」

「馬鹿言ってるんじゃないわよ。なんだか怪しいわねえ、何を裏でこそこそしてるのかしら」

おはらい棒を魔理沙の額に突き付ける。霊夢の典型的とも言える脅し方だけに効果は抜群だった。

「こそこそなんてしてないぜー？ だから夢想封印はやめよう

な、な？」

「そうね、今日は鬼神陰陽玉にしましょ」

陰陽玉の超接射で紙ヒコーキのように吹き飛ぶ魔理沙。城の外の結界に激突するとずるずる下へ落下していくのが見えた。あー痛そ。

「って、結局誰からの情報が聞き出してなかったわ・・・」

がつくり肩を落とす。が、物事は前向きに考えよう。これで邪魔者はいなくなった訳である、魔理沙の言っていることが正しいかどうかは関係なしに富亜から直接聞き出せば万事解決なのだ。

前向き霊夢は後ろを振り返らない。遙か地上へ落ちていった魔理沙に小さく合掌すると、霏々もそれを真似て合掌。幽霊がやるとなんともおかしいな光景だが多くの人に弔われてあいつも幸せでしょう。

「そんじゃいくわよ、霏々」

「はい、れつつごー！」

霊夢達に敗北して城をひたすら降りる紫と文の不釣り合いコンビ。
紫がだんまりを決め込むものだから文から話しかけるのも気まずく、
城の入口にでるまで一切会話がなかったのだが、

「ぜー!?!?」

謎の奇声と強烈な衝撃音に早速文が飛びついた。

「おお!?ここにきて私はまだ運に見放されていなかったようです
ね!空から降ってきた謎の物体、異変との関係やいかに!?!明日
の一面はこれで決まりです!」

獲物を貪るハイエナのような動きで落下物にぬるぬると近づいてい
く文。だが、その姿を確認した途端に快晴だった表情が一瞬でどん
よりと曇る。

150

「なーんだ、あなたでしたか魔理沙さん」

「いつつ・・・なんだとはなんだって新聞屋にスキマ妖怪じゃない
か。こりゃまた珍しい顔触れだな」

すっぽり雪に埋もれた体を起こして服にかかった雪をさっさと掃つ。
真っ白魔法使いが漸く元の白黒魔法使いに戻ったところで

「これから城の取材か?だったらやめといたほうがいいぜ。今霊夢
に見つかったら無差別に追い出されちまうからな」

「・・・」

押し黙る文を退けて口を閉ざしていた紫がついに言葉を持つ。

「私と文、あなたに霊夢、それに地底の主……。これだけの人がこの城に調査の目を向けたのは偶然だと思う?」

「あ?なんだ、さとりが紛れ込んでることは知ってるのか。姿が見えないってこつたーあいつはまだ霊夢に会ってなさそうだな」

「そんなことはどうでもいいの。私はあなたの見解が聞きたいのよ」
いつにない紫の気迫、それが魔理沙には焦っているようにも見えた。
茶化すのは得策ではない。

「……なるほどな。漸く視界を遮つてた靄が晴れてきたぜ」

「何か知ってるのね?」

「いや、大したことは知らない。ただこの城の主がどんな奴だが、小耳にはさんただけだぜ」

「それはビックスクープじゃないですか!どんな方ですか!??」

キラキラ眩しい瞳を向けてくる文は置いといて、紫はそれを真剣な眼差しで聞いている。不気味で鳥肌が立ちそうだ。

「それが全くの戦い音痴、弾幕戦なんて殆どやったことがないっていうんだから驚きだぜ。それでよくこんなでっかい城の主がとまるよな」

「……」

怪訝な面持ちの紫。どうやら、何か腑に落ちない部分がありそうである。

「つまりここにはボスなんて最初からいなかったんだってよ。まったく、とんだ昇り損落ち損だぜ」

「まっつて」

鋭利な一言。言葉だけで物体を切断出来そうな程に。

「おかしいわ。初めから何も無い城ならあなたはまだしも、霊夢やさとりがここに集まるはずがない」

「さりげに酷いこと言われたような……。でもまあ、そうなんだよ。だから私はこう考えたんだ」

冷たい風が一陣吹く。寒さが、風圧が、魔理沙の口を塞いだのもつかの間。

「この異変は、何か別の悪事をカモフラージュしてるんじゃないかってな」

・・・カモフラージュ。

一夜にして城が建つという誰もが振り向くこの異変に目をくぎづけにさせ、裏で異変の下準備をしている……。そつとなれば、さとの最後の言葉も説明がつく。

「・・・あなた、天才ね」

「お・・・おう、天才だぜ？」

柄でもないことを言うものだから帽子を掻く魔理沙は微妙に引き攣った笑顔を見せるが、紫はそんな姿に目もくれず続ける。

「となるとさとの目的は・・・ふふふ。あの子、見かけに寄らず賢いじゃないの」

「おいおいなんだぜ？せつかく教えてやったんだ、私にもなんか教えてくれよな。等価交換は情報戦の基本だぜ」

「あら、何を教えたところでこれはあなたに解決出来るような異変ではないわ。それに」

不気味な瞳が、ギラリと光る。

「世の中には知らない方がいいこともあるのよ」

雪は、未だに降り止む気配を見せない。

第十六話 異変の影（後書き）

いよいよ六面ボス登場も近くなってまいりました。五面ボス初登場からかなり引っ張っちゃいましたね・・・

第十七話 幸運の代価（前書き）

東方DS発売間近です。文ちゃんやったね！

第十七話 幸運の代価

魔理沙を強制退場させ依頼を完了した霊夢達は胸を張って階段を昇る。相変わらずの気温で時折吹く隙間風は身を刺すような冷たさだが、今の霊夢にはそれも些細なことであった。

幸運をあげる。

彼女、家神富亜は確かにそう言った。どこだかの詐欺兎に言われるのとは訳が違い、座敷わらしのその言葉にはそれ相応の重みがあった。・・・それ以上のことは勘と言わざるをえないが、異変のときの勘はよく当たるものである。根拠のない自信を胸にまた一階、また一階と昇り、そして。

「やっと着いたわー。本当ここは来訪者に優しくない設計ね」

「そうかなー？私は迷路みたいで楽しいと思うけどなー」

「あんたはお気楽でいいわね・・・」

談笑も程々に、霊夢はおはらい棒をずびしと突き出す。

「さあ、三度目の正直ってやつよ！とつとと幸運を寄越してボスに会わせなさい！」

畳張りの部屋、相も変わらず少女は冷え切った眼差しをむけていた。初対面の時には違和感を覚えたものの、今となっては慣れたものである。威圧的に攻めなければまた新たな依頼を出されかねない。

「・・・ありがとう」

短い言葉に慣れたとはいえ調子が狂うことに変わりはない。

「幸運、どうだった？」

富亜の口から紡がれたのはそんな意味不明の言葉だった。口数が少ないのはいいとしても出来れば要点くらいは押さえてもらいたいものである。

「・・・あんなねえ、もしかして私を騙そうとしてる？もしそうならただじゃおかないわよ？」

「・・・あなた、有益な情報を得たはず。違う？」

「有益な情報って・・・」

思い当たる節は一つしかなかった。しかしそれは・・・

「・・・確かに、あんな有益な情報が苦労も無しに聞き出せたのはラッキーだったわ。ただ、その情報がもし本当だというのなら・・・」

おもむろに懐に手を突っ込む霊夢。見ればキラリと輝きを放つ針が二、三本顔を覗かせている。こうなった霊夢はご存知の通り、誰にも止めることは出来ない。

「大丈夫」

そんな高圧的な態度にも関わらず富亜は風一つ吹かぬ湖面のような表情で言った。見かけによらず度胸がある、彼女の振る舞いに感心しつつも針を構え臨戦体勢をとる霊夢。返答によってはこの針は全

て富亜の額を貫くことになる。

「主にはちゃんと会えている」

「・・・なんですって？」

思わぬ言葉だった。それが本当だとしたら、私がこの城で出会った人物の中に主がいるということになる。魔理沙や紫達は違うとすると残るは目の前の富亜、そして・・・

「そこまでですよ、家神富亜」

霊夢にとって聞き覚えのある声。あまり思い出したくはない声に振り返るとそこには思った通りの、それでいて意外な顔があった。

「・・・あなた、地底の時の！」

「博麗の巫女、これ以上の城の搜索は無意味です。あなたには地上へ帰り、やるべきことがある」

「藪から棒に何よ。わざわざ地底からこんなところまではい上がって来て、また何か企んでるんじゃないんでしょうね」

古明地さととり、と言ったか。いつだかの怨霊異変で地底を訪れた時に出会った妖怪だが、あまり快い奴ではないことはよく覚えている。確か、相手の心が読む力を持っているだとか。

「霊夢ー、あの人も敵ー？」

無邪気に服を引っ張りながら霏々が聞いてくる。

「青火霏々・・・よもやあなたまで関わっているとは驚きですね。巫女に付き纏う理由はなんですか？普段は誰に対しても非協力的なあなたが、随分と積極的なようですが・・・」

疑問を投げかけたにも関わらず、さとの幽霊のような笑みはその答えを語るうとしてるように見える。やはり嫌な妖怪だ、霊夢はその不気味ともとれる笑みにすっかり怯えきってしまった霏々の前に仁王立ち、びっしりとおはらい棒を突き付けた。

「心が読めるのをいいことにそうやって人を動揺させようってのがあなたのやり口なんでしょうけど、そうはいかないわ。やっと全部うまくいきそうだったのに、邪魔しないでちょうだい！」

「目先の利益ばかりに取りつかれ善悪の判断すら見誤る。どんなに優れた勘を持っていても、それでは宝の持ち腐れですね」

「なんですって？もういつペン言ってみなさいよもういつペン。あなたのその胸の瞼、二度と開かないようにして・・・」

言い終わる直前だった。爆発のような轟音が霊夢の言葉を掻き消したかと思えば続けて凄まじい縦揺れが生じる。一瞬の出来事に思わず四つん這いになって身を屈める霊夢だが、揺れが収まる気配はない。

床に吸い付けられるような感覚。引力の強い星の上に立たされたらまさにこんな感じなのだろう、一度折り曲げた膝を元に戻すことから難しく、ひたすら揺れが収まるまで体勢を維持し続けた。

そして、いよいよ揺れが止む。漸く状況の確認が出来る顔と顔をあげた霊夢が驚愕するのに大した時間は要さなかった。

雪が吹き込み真つ白に覆われた壁が、部屋に配置された僅かな蝋燭の光を割増させやつと深夜の月明かり下程の視界を得ることができ

る。風は不思議とない。にも関わらず雪が吹き込んでくるのはこの住人が何か細工をしているのだろうか。どちらにしても、歓迎されるに適した部屋でないことは確かである。

何より問題なのは出口らしき場所が見当たらないことだった。地震で大分揺さぶられたせいもあるのか思考が全開ではないが、これではまるで私を閉じ込めているようではないか。

「まったく、なんなのよこの城は・・・」

「忠告したはずですよ、これ以上の城の探索は無意味だと。それを無視して話を拗らせるものだから、彼女の策略にまんまと掛かってしまった」

「ふん、同じ境遇のあなたに言われたくないわ。というか、心が読めるくせになに引つ掛かってんのよ」

辺りに富亜の姿はない。それどころかあれだけたべたと後を着いてきていた罪々の姿すら見当たらない。・・・ということは、やはり紫や魔理沙の言っていたことが正しかったというのか。しかし、なんだか胸中にもやががかかっているような感じがしてならない。全てが全て、紫達の言う通りに動いているとは思えない。

・・・裏で何かが、動いている？

「見えざるもの追うことなかれ」

透明感の強い、しかして音量のある声。

「漂うものに惑わされることなかれ」

唯一壁にぼつかりと空く大穴、足まで届こうかという艶やかな長髪は無風にも関わらず微かに揺れている。

「真に信ずるに足るものは己自身の内にあり。・・・それがわからぬようでは、余震のような小さな異変も解決に導くこと等出来ないわね」

少女だった。

霊夢より頭半個の長身から繰り出される弦の張り詰めた琴のような声に足を一步後ろへ引きずる。

並の妖怪ではない。彼女の放つ妖気は霊夢が今まで出会ってきた妖怪でもトップクラスの濃度、数々の戦いを重ねてきたにも関わらず思わず身震いしてしまう程だ。

「これはまた、厄介な相手が登場しましたね」

「あんだ、あいつのこと知ってるの？」

「・・・冬幻寺小雪。妖怪なら、彼女を知らないものままずっといませんよ」

妖怪事情なんて霊夢には知る由もないのだが、目の前の少女、小雪とやらが敵であり倒さねばならない相手だというのは直感でわかった。だが、喉につっかかる魚の骨のように、何かが霊夢の心に引っ掛かる。この感じ、あまり経験したことはないが確か前にも一度・

「古明地の当主・・・名をさとりと言いましたね。何でも心を読むことが出来るとか。あまり好ましい能力ではありませんね」

「それは結構なことです。あなたに好まれる程恐ろしいこともありません」

「ふふつ、正直なのはいいことね。・・・それで、わざわざ地底から人間を連れてこんなところに来てやってくるだなんて、余程のことだとお見受けいたしましたか・・・」

「・・・ふふふ、なるほどそういうことでしたか。なかなか合わなかったピースでしたが、漸く嵌めることができましたよ」

「ちよつと、二人で何訳の分からない話してるのよ。とにかく、その寒そうな妖怪を倒せば解決なのよね？」

富亜を前に取り出した針を再び構える。強大な敵、彼女を前にして霊夢は身震いすらした。それほど圧倒的な存在感を誇る小雪は余裕の笑みさえ浮かべて一歩足を出す。

「突然乗り込んできて荒っぽいこと。・・・ま、どうやらあなたは少し出来る人間ようですし、お望みとあらばこの極寒の城をあなたの墓場として差し上げるのも悪くはないけど」

ふわりと両腕を広げた途端、今まで全くといっていい程無風だった室内に突風と豪雪がなだれ込んできた。凄まじい轟音が耳をつんざき、強烈な寒波が露出した肌に悲鳴をあげさせる。

・・・この妖怪、ただ者ではない。

「結界を張って寒波を凌ぐのはよい策だったわ。それもこれほど強力なものをよくもまあ短期間で張れたものねえ。・・・だけど、私に結界解除が出来ないと思っていたのならそれは大きな誤算ね」

「うう、この城の妖怪は意味の分からないことばかりを・・・。人

間にも分かるよう話しなさいよね、こちとら生活がかかってんのよ！」

態度を露骨に荒立てる霊夢に対し、さとりは冷静だった。全ての住人の心理を読んできて漸く繋がった結論、それを手にしたさとりに何一つ焦る理由はなかったのだ。

「彼女は強大な相手です。私も力を貸しましょう、博麗の巫女」
「ふん、余計なお世話よ！誰があんたの力なんか・・・」

そこで言葉は切れる。

さとりの表情だった。普段他人の心を読みあさって余裕を見せている彼女が、小雪に凍らされてしまったかのような堅い表情をしていたのだ。視線を真つすぐ霊夢に向け、力を貸すと言うよりは協力をあおいでいるようにさえ見えた。後にも、恐らくこの先もずっと、彼女のこのような顔を見ることはないだろうと思える程に。

「・・・分かったわよ、ただし、邪魔したら容赦しないんだから」
「勿論、あくまでサポートに回らせてもらうだけですのご心配なく」

風が緩やかになる。同時、あれだけ凄まじかった轟音も殆ど止んでしまった。

「さて、最期の算段は済んだかしら？」
「余裕こいていられるのも今のうちよ」

どっと爆風のような風が雪と共に押し寄せた。それにも関わらず、霊夢も小雪も目を見開いたまま凜然と立ち尽くす。

「暖かな春の訪れの為に散りなさい、真冬の権化！」
「極寒の冬の中で眠れ、身の程知らずの巫女！」

雪は一向に止む気配を見せない。

第十七話 幸運の代価（後書き）

小雪さんのスペックは次回の後書きまでお待ちくださいませ・・・

第十八話 雪嵐（前書き）

なんだかんだいって超久々の更新になってしまいました・・・。

第十八話 雪嵐

守矢神社境内。

妖怪の山を越えたところにあるこの神社は人が訪れることは少なく、大雪も相まって閑散としている。が、ここの住人はそんなことはどうでもいらしく、神社の巫女である早苗はこたつに入り浸って出てこようとはしない。なんとというか、平和である。

「諏訪子様、こんな大雪の日に外にいたら風邪ひいちゃいますよー？」

境内で一人空を仰ぐのはこの神社の神様である諏訪子。降りしきる雪は容赦をする由もなく彼女を襲うが、しかし神社内に避難しようとはしない。見ている早苗の方が寒くなりそうな光景である。

「早苗の言う通りだね。ほら、餅焼いたから食べようさ」

もうひとりの神様である神奈子が持つてきた餅を我先にと口に運ぶは早苗。その食欲たるやとどまることを知らぬのだろうか、焼きたての餅を冷ましませず次から次へと消化する。どこかの掃除機並の吸引力である。

「はやふたべなひとなくなっはいまふよ、もぐもぐ」

「早苗は少し手を休めなさい」

ぺちりと手を叩かれて涙目の早苗。しかし手は止まらない。実に平和的な光景だ。

・・・が、そんな心温まる(?)光景を目の当たりにしてもなお、

諏訪子は空を仰ぎ、地蔵の如く動くことはない。

見兼ねた神奈子はやれやれと肩を竦めつつ境内に足をついた。身に染みる寒波こんな中に棒立ちだなんて、例え神様でも正直まともじゃない。

「妖気が気になるのかい？心配することはないさ、人間の里には優秀な人間が一杯いるんだからね。万が一何があってもそれを良く思わない妖怪やらなんやらが阻止する、私達の出る幕じゃないでしょうさ」

「違うよ、神奈子」

鋭い視線。普段愉快な彼女だけにこういう顔をされると神奈子も一瞬怯む。

「違うって・・・それじゃ一体全体なんだったってこんな場所で」

「あいつの仕業じゃないんだよ、これは」

「あいつっていうとこの妖気をびんびんに出してる張本人ってことかい。で、そいつはこれ一切関係ないと」

「一切・・・って訳じゃないだろうけどね。少なくとも核の部分ではないよ」

「ふうん。その自信はどこからくるんだい？」

「・・・神様の勘、かな」

一層雪が強まって、いよいよ屋内で餅を頬張っていた早苗が顔を出してきた。

「神奈子様ー、諏訪子様ー。あんまり外で話していると風邪引いちゃいますよーって、神様も風邪を引くのでしたっけ？」

「・・・ああ、そうだね。ほら諏訪子、せっかく焼いた餅が固くなってしまう」

「うん・・・」

言葉とは裏腹に遠く山の彼方を眺める諏訪子に呆れる神奈子。これはダメかと連れ戻すのを諦めたため息の一つでもついてみせると

「ちょっと出かけてくるから、留守は頼んだよ」

「出かけるって諏訪子ちよっと・・・って、行っちゃったよ」

吹雪に消える神様を前に、神奈子はつくため息も無くなってしまった。

雪天城周辺、雪原地帯。

城門を前に腕組みをして見上げるは白黒の少女が二人。空は相変わらずの荒れ模様だが、彼女達は構うことなくその場から離れようとはしない。

「で、お前の相方はどこへ綺麗さっぱり消えたんだ？せっかく私が特ダネ仕入れて来たってのにお礼もなしとは礼儀がなってないぜ」

「私知ってるはずないじゃないですか。・・・今回の件もてつきり彼女の仕業かと思っていたのですが、見ている限りだとどうやらアテが外れたようですねえ」

参った参ったとばかりに頭を掻く文。口調は全然参ってなさそうである。

「なんか余裕だな。もしかして別のアテでもあるのか？」

「ふふん、まあちょっと気になることがありますね。ぼちぼち一人取材にでもいこうかと思えます」

「おお、そいつはでかしたぞ。雪の中は危ないからな、私もきつちり同行してやるからありがたく思え、はっは」

と、文はびしりと手の平を魔理沙に向けてつきだしながら

「結構です。そういつて記事を横取りしようつたってそうはいかないですよ」

「ギク。そ、そんなことをなんで私がしなけりやならないんだ？私は新聞記者じゃないんだぜ？」

「そりゃまあそうですね・・・とにかくダメなものはダメです。他人と行動するところくなことが・・・」

「こんなところで何してるのかな、お二人さん」

思わぬ第三の声にはっとした二人が同時に視線を向けた先は城門前。いつの間に開門したのだろうか、今はゆっくりとその巨体を閉ざし、木材が衝突する音を辺り一帯に響かせる。が、彼女達が向ける視線はそれよりやや手前、二人の少女の姿だった。

一人は真っ白な布に包まれた色白の少女、もう一人は赤をベースとした古風な着物着こなす、こちらも前者に負けず劣らず色白である。

「何しようとしてるのか知らないけど、何かご用事？」

幼い、無邪気な声にも関わらず鳥肌を立てるのは文だった。自分でも恐ろしい程の寒気がし、体を震わせることである程度それを緩和する。

「もし、変な気を起こすなら、容赦しない」

「あらら・・・ふーちゃんを怒らせると大変だよお？降参して大人しく帰った方がいいんじゃないかな？」

「確か・・・霏々とか言いましたね。先ほどはお世話になりました」

「お？なんだお前、あいつと知り合いなのか？」

「ええまあちよっと。あつちの着物の子は知りませんけど」

吹雪が更に強まり、風と雪が痛いほど肌をたたき付ける。正直立っているだけでも辛い状況ではあったが、こんなことでほいほい引き返す文ではない。

「他人と行動するとなくなことがありませんけど・・・魔理沙さん、ここは提携を組んで共に目の前の障壁を突破しようではありませんか」

よしてきたとばかりに顔を綻ばせる魔理沙。嫌な予感はいつつも文が黙っていると

「いいだろう、だがその後の待遇も忘れずにな？」

「ぬう、この際仕方ないでしょう。あの娘に加えてもう一人も相手

するととなると流石に厳しいものがありますからね……」

「そういうことだお二人さん、遠慮はいらなからどっからでもかかってきやがれだぜ！」

魔理沙が指先を向けてびしっとポーズを決めると、霏々と名乗った少女は満面の笑みでそれに応える。

「えへへーそうこなくっちゃね！お姉さんとの決着もまだついてなかったし、いざ尋常に勝負せーい！」

朗らかな言葉をかけられるも、文は苦いものを噛まされたような顔で標的である無邪気な少女を見つめていた。文の実力は妖怪の中でもかなり上の方であるが、それを脅かすだけの力を霏々が持っていることは先刻の一戦で十分思い知らされた。

……だが、油断さえしなければそう劣りはしないこともまた知っていた。

「あの着物の妖怪は任せましたよ。私はあの幽霊と決着をつけなければならぬようなので」

「おう、任せとけ。すぱっと倒してばっちり援護してやるぜ」

対する魔理沙は余裕の表情。彼女の場合余裕がなくても余裕こくが、今日はまた一段と調子良さそうである。

「霏々、いける？」

「こつちはいつでも準備おーけー！ふーちゃんは無理しないんだよ？こつちが終わったらすぐ助けにいくからね？」

こく、と小さく頷く。どうやら向こうサイドもかなり余裕なご様子。

「そうやってナメてると、痛い目に遭いますよ?」

「お姉さんこそ、甘く見ると大怪我しちゃうかもしれないから気をつけてねー」

あれほどふぶいていた雪原に水を打ったような静寂が訪れた。嵐の前の静けさ、開戦を直前に二組の少女は思い思いの表情で相手の出方を伺いはじめる。

「ここ吹雪ヶ丘は私の箱庭、負ける気がしないよ!雪天城門番、青火罪々。いざ出陣!」

「・・・雪天城当主、家神富亜。出陣」

「!?!?」

「始まったようだね」

白と黒の空間、ぼんやりと視界の開けたその場所の残響が止むと恐ろしいほど無音の空間に早変わりする。談笑声や小鳥のさえずりはおろか風の音一つしない、真の無音。

それだけに少女が紡ぐ言葉の一つ一つに妙な重量感が感じられる。

「そうね」

光に嫌われた黒の空間。互いに表情を窺うこともできず、ただ短く呟いた。

「そろそろこっちに感づく奴もいるんじゃないかね？私みたいにさ」

「心配には及ばないわ、さっきよりも隠蔽結界の精度を上げてあるから。それよりあなたの方こそ大丈夫なんでしょうね？あの人間達、どうも勘が鋭いみたいだから警戒した方がいいとおもっただけど」

「それこそ無用な心配さね。いくら勘が強かったって今は城の方で手一杯、例え感づかれたところでこっちに手を回すのは無理な相談だ」

白の空間で少女はにやりと笑みをこぼす。無論相手方にその表情は見えないが声色からその光景は伝わったのだろう、喉を鳴らして少女は言う。

「ふふふ、順調そうね。こっちの準備も最終段階に取り掛かるところだけど何せ規模が規模、そうすぐには終わりそうもないわ。そっちはあとどれくらいかしら？」

「準備万端さ。今すぐにもいけるよ」

「流石、お仕事が早いのね。声一つで発動出来るように頼むわ」

少女の髪が揺れる。確かに、肌に風を感じた。白の空間の少女は気にも止めなかったのだが、黒の空間の少女はそうはいかなかった。

「風？・・・妙ね」

「風の何が妙だったんだ。今更臆病風にでも吹かれたかい？」

「まさか。・・・あなたも結界を破ってきたなら察しがつくはずよ。」

この隠蔽結界の中は外界と一切あらゆる面において干渉しない、温度差が生まれる程広大な作りではないし、ましてや風が吹くだなんてことは」

ふと、言葉が止んだ。

すると突如、白の空間の少女の元にもう一人少女が現れた。恐らくは黒の空間で話をしていた少女だろう。

「あいつ、やってくれるじゃないの」

「どうしたんだい藪から棒に。あいつって一体・・・」

「さっき外部から発見される心配はないって言ったけど」

空気が淀み、白と黒の境界が濁りはじめる。黒の空間が白の空間を取り込むようにして膨張し、

「・・・ただ一人、例外がいる」

そして、白の空間は黒へ変わった。

第十八話 雪嵐（後書き）

小雪さんが出番なかったなので詳細設定についてはまた次回。
念願の早苗さん登場！今後の活躍に期待してください！

第十九話 雪天城の乱 ～頂上決戦開幕～（前書き）

いよいよ雪天城での戦いが開始します。

第十九話 雪天城の乱 頂上決戦開幕

室内を吹き荒れる豪雪に思わず身を縮めて凍える霊夢とは対照的にさとりは堂々たる眼差しで小雪に視線を刺していた。人間の中でも最強クラスの霊夢と地霊殿を統べる大妖怪さとり。二人が手を組んでいるのだから少なくとも互角、もしくはそれ以上の戦いができるかもしれない。

そう思いたいのは山々だったのだが、対峙する敵の姿を見るとその自信も瞬く間に失われてしまう。それほど彼女の力が強大だということのをさとりはよく知っていたのだ。

互いに一步も動かず出方を見る。霊夢的にはさつさと先手を打って自分のペースに持って行きたいところだが、せっかく味方としてさとりがついているのだ。こちらから動くよりはまず様子を見た方が得策であろう。さとりもどうやら同じ考えのようで、霊夢が視線を投げるとかすかに笑みを返してくる。読心術もたまには役に立つようだ。

「恐れを成すか・・・若しくは策を練るか。ふふふ、前者であれば端から一戦交えよう等という気は起こさないわね。いいわ、その策に乗りましょう！」

風が強まるにつれてただでさえ激しかった雪が、更にたたき付けるように横殴りになる。

おかげで視界も限りなく0に近く、小雪の姿を確認することもままならない。この視界じゃ相手からもこちらの確認は困難であろうが、どちらにしても非常に危険な状態である。

「っつー、室内で遭難した気分ね。これじゃどこから攻撃してくる

やら・・・」

「回避は困難ですね。結界の準備を」

「ってうわっ！あんたいつからそんなところに」

懐で屈んで指示を飛ばすさとり思わず身を退ける霊夢だったが、すぐにその言葉を了解し、準備に入る。

「拡散結界！」

全方位に結界を展開した刹那、結界を維持する為に突き出した腕に鉛を落としたような鈍い衝撃が走る。内側からでは豪雪も相まって外部の状況を確認するのはかなり困難だったが、衝撃の伝達具合から大体どの方向から攻撃されているかは把握出来ていた。

「全方位攻撃なんて粹な攻撃してくれるじゃないの。いきなりこんな膨大な妖力を使っちゃって・・・」

「とはいえ、こちらもこれだけの攻撃を受け止めているのですから五分五分といったところでしょうね」

霊夢の張る結界の中で悠々と解析するさとりのことは・・・とりあえずまあおいといて。

不意に、腕にかかる重圧がなくなった。恐らく攻撃が止んだのだろう。しかし視界は相変わらずの状態で現状の確認は困難である。

厄介な相手だなあと頭を掻きつつ結界を解こうとする霊夢だが、さとりが裾を引つ張ってくるので慌てて取りやめる。

「な、何よ。あんたまで罪々みたいなことして・・・」

「どうやら、まだ結界は解かない方が得策のようですよ」

「・・・これ、維持するだけでも結構しんどいんですけど」

「氷漬けに比べれば遥かにマシでしょう？」

それを聞いて霊夢も流石に押し黙る。冗談みたいな言葉ではあったが相手はさとりさえ一目置くような妖怪だ、冗談じゃ済まないであろう。

大人しく結界を維持していると息をつく暇もなしに再び腕に負荷のしかかる。流石心を読む妖怪、次の攻撃は完全に予測済みというわけだ。・・・まあしかしそれを防いでいるのは霊夢なのだが。

「うぎぎ・・・これじゃキリがないわよ！さとり、あんた何とかしてあの小雪とかいう妖怪止められないの!？」

「そう慌てずに、もう少し堪えて下さいよ」

「うう、あんたは楽そうでいいわね・・・」

なんて会話をしていると、再び腕にかかっていた負荷が解ける。それと同時に、先ほどまで豪雪で全く先を見通せなかった室内の雪が嘘のように止んだのだ。正面には驚きとも笑みともとれる表情で立ち尽くす小雪の姿、そして全開にも関わらず雪も風も吹き込んでくる気配のない窓。

流石にこれなら安全か、霊夢は漸く結界を解く。

「結界で雪風を凌ぎますか、また同じ手でくるとは愚かですね。何度やっても無駄だということが・・・!」

窓際で立ち止まった小雪は突然硬直した。窓の外に何が見えるわけでもない。

「確かに同じ手ではありませんが、規模が小さいのでちょっと細工をさせていただきました。あなたのような大妖怪といえども、これの解除には数分はかかるでしょう。無論そんなことをしようものなら容赦なく攻撃させていただきますけどね」

そこまで言われて漸く霊夢も気づいた。なるほどさとりは今の今まで部屋全体に結界を張っていたのか。確かに視界さえ確保出来ればこちらにも勝機はある。となれば、もう容赦する必要はない。

「流石に、地底の一角を統べるだけのことはありますね。知略だけは賛美するに値しますが・・・一つ重要なことを見落としている」

外の暴風と豪雪は一向に止む気配を見せず、外壁を破壊せんとばかりの轟音が室内全体に響き渡る。

「あなた方は私の力を侮っている。条件が対等だとしても、こちらの有利は揺るぎません」

波動となって威圧が見えるようだった。寒さとは違う何かで体が震える。こちらはさとりを味方につけて数的有利だというのにこの余裕はなんだ。確かに妖力は並大抵のものではない、それくらいは霊夢にも分かる。だが、だとしたらこちらの實力だつて大体は想像がついているはずだ。にも関わらず、自分の方が有利と小雪は言うのか。自信過剰なだけならいいのだが、もしその自信が確固たるものだとしたら・・・。

「ふん、今に酷い目に遭うんだから」
「・・・」

さとのりの妙な沈黙が引つ掛かったが、その真意を問うことはしなかった。

雪天城からかなり離れた地にある、なんでもない森林地帯、日も殆ど射さぬというのに傘を携えて歩む紫。河の下流の地域とは違い、この付近の天候は概ね曇り空といったところか。

城での一連の騒動にはとんだ無駄な時間を使ってしまったが、後始末はあの天狗と魔法使いあたりが済ませてくれるだろう。まあ思わぬ形で有益な情報も手に入れることができたし、後は地霊殿の主の動向が気になると言えば気になるか……。

とにかく、計画の全貌は見えた。後はこのことを霊夢にそれとなく流せば、『妖怪としての私の役目』は終わり。妖怪退治は人間の仕事と相場は決まっているのだ。

「人の話を盗み聞きしてそのまま帰ろうっていうのは、感心できないね」

不意にした声。紫には聞き覚えがあるようで、小さな舌打ちをして立ち止まり、振り向いた。

「感心出来ないのはどちらかしらっどっつやら随分なことを計画して

いるようだけど?」

「知られてしまったからにはそう簡単に帰すわけにはいかないねえ、ふふふ」

「悪いけど今つき合っている暇は・・・」

言いかけ、言葉を止める。

迂闊だった。境界ですいつと城まで移動したいところだったが、周囲に張り巡らされている結界に気づいていなかったのだ。それもとびきり強力で、数分やそこらで展開できるようなものではない。予め、それもあり大規模な準備が必要な強度だ。そして更に引つかかることに、その結界の構成式が城の周囲に張られていたものとはほぼ同じなのだ。これほど大規模なもの、2度もそう短時間で易々と張れるものじゃない。

「・・・あなた、何者なの?」

不意にそんな言葉が出てくるほどだった。

「人に尋ねる時はまずは自分から名乗ったらどうだい?どうやらあなたもただ者つてわけじゃーなさそうだからね」

無駄話をしている時間はないのだが・・・紫は悩むも、小さなため息を一つついて、

「・・・私は八雲紫。別にどうということはないわ、ただの妖怪よ」
「八雲・・・!」

何やら名前を聞いて驚きの表情を見せているが、紫にその真意はわからない。確かに幻想郷では強力な妖怪の一人として名が通っているが、相手も相当な妖力を持っていることは近づかれた時点によく

わかった。そのせいで驚いているとは言い難い。

「なるほど、あんたがあいつの言ってた……こいつは念入りに境界構成しておいて正解だったね」

にやにやと笑いながら、相手方も自己紹介を始めた。

「私はしがない悪霊さ。ちょいと野暮用で最近はこちらに顔出してなかったがね。名前は……」

悪霊。そう聞いて一人だけ思い当たる人物がいた。以前霊夢から聞いた話だ。昔、霊夢と会うよりも前、博麗神社に住み着いていたという悪霊の存在を。確か、その名前は……。

「……魅魔。こつちの世界じゃ大分昔にお世話になったねえ」

「魅魔……そう、あなたが」

「おや、知ってるのかい？……ああ、そういえばあんた、霊夢と知り合いだったあね」

まずいことになった。いち早く真実を霊夢に伝えなければならぬというのとんだ妨害に遭ってしまったものである。周囲の境界を解除しようにもこの悪霊を目の前にして暢気にそんなことをやっている余裕はない。かといって悠長に相手をしては余計な時間を取られてしまう。それでは、間に合わない。

思わず表情を歪める紫。それを見てか否か魅魔は笑みを零す。

「というわけさ。まあここはまったりと話でもしながら手合わせ願おうかね」

どうする、多少のリスクには目をつむって結界解除を試みるか？いや、この強敵を前にそんな余裕はない。だとしたら全力を注いで一気にケリをつけるか？・・・それをするにも相手が悪い、か。どうにもならない、か。霊夢がこちらに気づいてくれればいいのだが、城の方でもかなり大規模な妨害を用意しているようだったし、このままでは・・・

「お困りかい、大妖怪さん」

第三者の声に二人とも思わず辺りを見回した。最終的にたどり着いた視線が指す方向にいたのは、

「貴方確か、守矢神社の・・・？」

洩矢諏訪子。確か、最近幻想郷にやってきた神様だ。もう一人の神奈子とかいう神様に霊夢が随分と手をやいていたのは記憶に新しいが、正直諏訪子のことは殆ど知らない。そんな彼女が何故ここに？偶然か、いやそれにしても出来すぎている。

「・・・結界が！？」

魅魔の言葉で紫も漸く気づいた。周囲に張り巡らされていた結界がいつの間にもやら綺麗さっぱり消え去っていたのである。

「あんだ、どういっつもりだい？」

魅魔が問うと諏訪子はその大きな帽子を整えながら答える。

「どうもごつも、あいつの気配がしたもんでね。どっちかというところあんたが敵に見えたから、取り合えず境界を解除させてもらったよ」
「・・・洩矢の神様だったわよね。恩に着るわ、この借りはそのうち必ず」

もう少し詳しく話を聞いて行きたい所ではあるが、今はそれどころではない。いち早く霊夢に伝えなければならぬことがある。

紫は瞬時に境界を開くとすぐさま内部へ退避、息つく暇もなく境界を閉じてしまった。

残されたのは諏訪子と魅魔の二人。魅魔は明らかに機嫌を損ねた様子である。

「・・・やってくれるじゃないか。どこの誰だか知らないけど、私達の邪魔をしようつてのかい？」

「貴方、『あいつ』の協力者つてところかな？ だったらあいつに伝えておいて欲しいことがあるんだけど」

柔らかい口調とは裏腹にその表情は相手を威嚇する猛獣のそれにしでは近かった。確か紫はこいつのことを神様とか言っていた。ということはやはり、それなりの実力者なのだろう。

「何かやる気なら、洩矢の土着神が黙ってない、ってね」

第十九話 雪天城の乱 ～頂上決戦開幕～（後書き）

六面道中 雪嵐

六面ボス 幻想越しの雪の果て ～ The Last Snow

冬幻寺 とうげんじ 小雪 こゆき

種族：雪女

二つ名：大雪に紛れる幻の姫君
能力：冬を操る程度の能力

スペルカード

冬舞「凍て蝶の復活」

冬奏「ウィンターヴォヤージュ」

冬害「瞬間凍上現象」

雪庄「クローズドスノー」

氷剣「氷河擦痕斬」

幻冬「豪雪の冬源郷」

設定資料まとめ2（前書き）

ある程度キャラが出揃ったのでまた誰得文章をどうぞ。

設定資料まとめ2

四面道中 吹雪ヶ丘 } The Blizzard Spot

四面ボス フローズンファントム

青火 あおび 霏々(ひひ)

種族：亡霊

二つ名：雪原に迷える亡霊

能力：恐怖に陥れる程度の能力

スペルカード

恐符「虚仮威し焰硝火」

恐符「突撃・幽霊列車」

恐怖「怪奇・ポルターガイスト現象」

「幻想郷七不思議」

・・・

比較のお気に入りキャラ。包帯のような布をぐるぐる巻いただけのとんでもない格好で霊夢につきまわります。現在は伏線を張っている段階なのでさほど目立った行動はしていませんが・・・？

あの文を圧倒する辺りから色々と察してくれればと思います。最近の四面ボスは強いですからね、彼女もそこそこ強くても問題ないでしょう。とは言え核となるキャラの影は既に見え隠れしています。性格は天真爛漫、明朗快活とそんな感じですよ。貴重なロリっ娘分です。現状ただ可愛ければいいキャラ。おいおい。

スペルについて

幼い設定はスペルにも現れていて、どれもそのまんなの意味です。焰硝火というのは芝居なんかで亡霊や化け物が出てくるときに使う炎のこと。

五面道中 風雲雪天城 〉 The Midwinter
C
a
s
t
l
e

五面ボス 童歌 〉 The Old Children's
S
o
n
g

家神 いえがみ 富亜 ふあ

種族：座敷童子

二つ名：幸福をもたらす童子
能力：家主に幸福を与える程度の能力

スペルカード

奪幸「薄幸の弾幕」

与幸「幸せを運ぶ青い鳥」

幸福「幸福の宿る矢」

「笑門来福」

・・・

貴重なロリっ娘分。貴重ってどういう意味だっけ。

罪々とは正反対の大人しいキャラ。動の罪々、静の富亜。それだけに謎の多いキャラですが、実は雪天城の真の主だったというオチ。何故霊夢に黙っていたかのかという疑問は後々解決されることでしょう。

服装は和服。十二単みたいな感じかな？細かいことは決めてないのですが、まあそんな感じですよ。

スペルカードについて

幸せをテーマにした弾幕ってなんじゃそりゃ。今作で一番手抜き感溢れるスペルネーミング。いいんです、戦闘は苦手な設定ですから・・・。笑門来福はみたまんま、笑う門には福来たるが元ネタ・・・。というかその日本語訳が笑門来福なので、寧ろそっちが元ネタ？

六面道中 雪嵐

六面ボス 幻想越しの雪の果て
The Last Snow

冬幻寺 とうげんじ 小雪 こゆき

種族：雪女

二つ名：大雪に紛れる幻の姫君
能力：冬を操る程度の能力

スペルカード

冬舞「凍て蝶の復活」

冬奏「ウィンターヴォヤージュ」

冬害「瞬間凍上現象」

雪圧「クローズドスノー」

氷剣「氷河擦痕斬」

幻冬「豪雪の冬源郷」

・
・
・
本作のラスボス。霊夢が怯むほどカリスマ溢れるお方。雰囲気は旧作キャラに近い感じかも。

うーん、正直まだ戦闘始めたばかりで裏設定とか暴露出来ないんですよねえ。もしかしてこの文章自体公開時期を見誤ったかも・・・。

スperlカードについて

凍て蝶は、殆ど動けないが冬まで生き延びた、もしくは凍って死んだ蝶のこと。このスperlの場合後者の意味ですな。

凍上は、地面の水分が凍って膨張し、一部地表が盛り上がること。氷河擦痕は、氷河が流れるときに岩などに刻んでいった直線的な擦り痕のこと。

冬源郷は言わずもがな、桃源郷のもじりです。

第二十話 雪天城の乱 へ 妖魔戦へ (前書き)

いよいよ20話目に突入。諏訪子がかっこかわいくて生きるのが辛くなってきました。

第二十話 雪天城の乱 く妖魔戦

雪天城城門前。

四名の妖怪、人間、亡霊が各々の表情を浮かべて吹雪に吹かれていた。視界は決して良好とは言えないがそれは相手も同じ。強いというならこの極寒の環境は城の住人の方が慣れているだろうか。

特に生身の人間である魔理沙にとってこの寒さは致命的ともいえるほどだ。彼女の性格上それを表に出して寒がるようなことはしないが、身体の震えは我慢しようとも自然と出てしまう。

「で、どうやら私の相手はお前みたいだな。まーこの私、霧雨魔理沙を相手にするんだったら覚悟した方がいいぜ？そんじょそこらの妖怪天狗よりは遥かに強いからな」

魔理沙は早速喧嘩腰で挑発するも、対峙する対戦相手、ふーちゃんこと家神富亜は冷めた目つきで右腕を空に掲げた。どうやら敵さんはこちらと対話するつもりはないらしい。魔理沙としては対話でペースを崩していききたいところだったが、彼女の性格を考えれば致し方ないといったところか。

「ふん、聞いてはいたがいけ好かない奴だぜ。なんならこっちから・・・」

「幸福、幸魂の宿る矢」

殆ど吹雪に掻き消されるような声だった。富亜の掲げた腕を白く、魔理沙の魔法のような強烈な光が宿った。それを直視することはとても叶わずに瞼を閉じる。・・・暫くして光が失せた時にはその手

に巨大な弓を携え、それを魔理沙に向けて構える富亜の姿があった。なるほど弓使いか。確かどっかにそんな奴がいたな。弓は魔力、妖力効率がトップクラスの遠距離武器な分、残弾数に限りがあるんだっけか。つまりはあれだ、無駄撃ちさせまくって弾が切れたところにマスターパークだ。見たところ動きも緩慢だし、意表をつけば回避されることもまずないだろう。

「おお、随分大層なもの持ってるな。だが、私のスピードについて来ることができるかな？」

「・・・」

挑発が効いたのか否か、富亜が弓矢を絞りはじめる。それと同時に魔理沙も箒を構え、回避の準備に取り掛かる。そして

「そうら来たぜ！逃げるが勝ちって・・・」

放った。それは魔理沙の予想通りのタイミングで、また予想通りの速度だ。

・・・ただ一つ、明らかに想定と掛け離れていたのが『弾数』だった。せいぜい1、2発、多くても片手で収まる程度しか撃っては来ないだろうと踏んでいただけに眼前に広がる無数の矢には驚愕せざるをえなかった。

30、40、いや、もっとある。しかも後方では富亜が第二波を放とうと再び弓を絞りはじめている。大人しい性格のくせして弾幕容赦ないじゃないか。まったく戦闘がからつきしだとか、師匠の情報もアテにならないぜ。

あれだけの矢を一斉掃射するってことは弓の弾数はほぼ無限なのか？だとしたらあれは少なからず妖力を浪費して放つ妖力弾ってこと

か。ならば、うまいことこの攻撃をいなして反攻に出れば有利はどちらにある。確かに弾数は多いが、今まで戦ってきた妖怪の中にこれを圧倒的に凌ぐ量で押し伏せようとしてきた奴は少ない。

「あらよつと、うおつとあぶねえ。へへ、これくらいじゃ準備運動にもならないぜ！」

なんて強がりを言ってみる。帽子や衣装をかすめてひやひやするよ
うな場面も多々あったが、辛うじて直撃は免れている、といった状
況だ。

第二波。第一と変わらぬ弾数、密度。速度自体は決して速いとは言
えず、矢を放つてすぐに次の矢を用意し始める。それは、こちらに
矢が到達するよりも前に行う動作だった。

確かに、正面に拡散する大量の矢や吹雪のせいで視界は良好とは言
えない。が、富亜が弓を絞り始める動作くらいなら容易に見える。
距離もそれほどないしな。

その時あいつは手元を見ている。自分で放った大量の弓に信頼をお
いているのか、それとも弓を扱うのには手元を見ながら準備する必
要があるのか、そんなのは知ったこっちゃない。だが、第一波後も
第二波後もまったく同じ動作で行っている。つまり、次もそ
れをやってくる可能性は限りなく高い。

第二波もぎりぎりのところで避けきり、同時に富亜が第三波を発射
予想通り、これなら勝負に出してみるのもいいかもしれない。

魔理沙が両腕を前に突き出し、魔力を腕に集中させる。富亜はやは
り、弓を絞るのに忙しいようでこちらの動向に気づいていない。

魔力がみなぎってくる。これを直撃させればどんな大妖怪だったた
だじゃすまない。当てれば即時、ゲームセット！

「・・・いくぜ！恋符、マスタースパーク！！」

前方に集中させた膨大な量の魔力は視界に映るもの全てを飲み込み、大地を穿つ轟音を上げて地に注がれた。無論、放たれた矢は魔理沙の元へは届かない。

魔力の放出をやめると本来の雪景色が戻ってくる。視界は相変わらず良い状態とは言えず、富亜の状況も視認出来ない。さどりのときのこともある、倒したと思ひ込むのは浅はかだろうから警戒は怠るべきではないな。いつでも迎撃出来るよう魔力を充填しつつ、接近を試みる。

「あ、う・・・」

「おろ？」

反撃の一つも想定してただけに、目の前で力無く倒れる富亜の姿には流石の魔理沙も素っ頓狂な声を上げてしまった。

「・・・話にはきいてたがー、なんというか、その、打たれ弱い奴だな」

「戦闘は、苦手・・・」

「そりゃー、見れば分かる。というか大丈夫か？」

手加減もせず思いつきりスパークった魔理沙が地味に後悔とも取れる発言をすると、富亜は微かに笑いながら

「・・・可笑しい人」

「あ？」

「自ら牙を剥いた敵に情けをかける、端から見れば可笑なこと」
「ふ、ふん。お前があまりに非力なのが悪い。こんなでつけー城の主だっつてんならもう少し強い奴が出てくると思うだろ、普通」
「でもあなた、私の実力を知っていたはず」

魔理沙は思わず眉を上げた。

「さあて、何のことだ？」
「・・・」

非力にも雪原に倒れた身体を弱々しくも起こし、富亜は魔理沙を見た。睨むような、また探るような、魔理沙からすればあまり気持ちのいい視線ではない。

「・・・まあいい、私はあいつの助太刀にでも行かせてもらうぜ。
これ以上お前と付き合う余裕はないからな」

言うが早いか魔理沙は箒にまたがり飛翔の準備を開始する。戦闘開始時こそすぐ隣で戦っていた文ともう一人の少女だが、今はどうやら場所を変えているらしい。何処へ向かったか検討はつかないが、まあ戦闘中ならばそう遠くへは行ってないはずだ。こちらは割と早く片付いたし、助力する時間は十分にある。

・・・そういえば文の相手のあの少女、確か城で霊夢に会った時一緒にいたやつだったよな。霊夢の友人、とか言ってたが、今は別行動なのか？つまり霊夢が私達を城から遠ざけるためにこいつらに命令を・・・？いやいや、そもそもこの城の主は富亜だ、その富亜が直々に出てくるってこつたあ私達を城から遠ざけたいってのはこいつらの本意だな。だとしたら霊夢は城で今何をしてるんだ？主のいない城内で何を・・・。

「って、うおお!？」

突如足首を掴まれ思わず声を上げる魔理沙。足元を見るとゾンビのように雪原を這いながら必死に両手で足首を捉えてくる富亜の姿があったのだから、更にぎょつとした表情で一本後ずさる。

「あの子のところ、いくんでしょう?」

「んあ、そうだぜ?こんなところで足止めくらってられるほど私達も暇じゃないからな」

とって飛び立とうとした魔理沙だが、更に強い力で足を引っ張ってくる富亜のせいで前方にすってーん。新雪にダイブインする。

「っつー。お前、一体どういつも・・・」

「・・・」

富亜が魔理沙に向けてくる視線は強烈なもので、彼女の实力を知っているとはいえ思わず立ちすくんでしまうほどだった。主としてのカリスマと呼ぶには程遠いものだったが、その瞳は悲しみとも取れる色で満ちている。

こんな表情をされる覚えはない魔理沙としてはどうという反応をすればさっぱり分からず固まっていると、富亜の方から口を開いた。

「罪々の元へは、いかせない」

今までから考えると想像もつかない程力強い声だった。そんなこと言われたところで厄介事は早く済ませてしまいたい、敗者の戯言に付き合う必要などさらさらないはずだ。・・・ないはずなのだが。

「何をそこまで熱くなるかねえ。私達が何をしようが私達の勝手だ
る？何も人のものを盗ろうとかしてるわけじゃあるまい」

まあ今のところは、だが。

「……」

一向に足を離してくれる気配はない。こいつは意地でも離す気なさ
そうだが、帽子をとって思いつきり頭を搔きむしった後、

「……仕方ねえなあ」

幻想郷、某所。

「神様ねえ。例えあいつに何を言ったところで、この計画を止める
つもりはないと思うけど」

深い森林の奥地で魅魔は、対面する諏訪子に呆れ半分の表情でそう
告げた。

「第一いくらあんたみたいな強力な神様といえど、あいつにやそう

簡単には勝てないだろうさ。やるだけ無駄だね」

「・・・分かっていても、止めなきゃならないことってのはあるもんなんだよ悪霊さん」

魅魔が小さな反応を見せた。

「あんた、あいつが何やるうとしてるのか知ってるのかい？」

「知ってるも知らぬも同じことさ。あいつが何かやらかそうとした時にまともなことをしたことがあったかい？」

「・・・ふふ、確かにそうだったあね。それを知るあんたは何か、あいつの古い友人か何かかね？」

諏訪子は鋭いながらも笑みを零し、答える。

「あいつに聞いてみるといいさ」

鬱蒼と茂る木々のせいで上空の様子は見づらいが、ただでさえ暗かった辺りが更に薄暗くなっていくのがわかる。どうやら一雨、いや、ここいらも本格的に雪が降り出す頃か。

空を見上げ、その大きな帽子を被り直した諏訪子はふと瞼を閉じる。

「・・・まああんたはあんたで精々頑張りな」

「！」

ひとひら、雪が大地に舞い降りた。

第二十話 雪天城の乱 く妖魔戦く (後書き)

なんか魔理沙が悪い人に見えますが多分仕様です。

第二十一話 雪天城の乱 〽退けぬ戦い〽 (前書き)

そつえばレティとかチルノとか登場してもよさそうなキャラです
よね。

第二十一話 雪天城の乱 へ退けぬ戦いへ

雪天城付近、上空。

城内でもそうであったように、ここでも妖怪と亡霊は犬と猿がいがみ合うように対峙していた。片や妖怪天狗の射命丸文は視界を独占する対戦相手、青火霏々をどういなしていかうか策を練る。

力で押し伏せようとしても彼女は奇怪な技で受け流してくるに違いない。それは先の戦闘で身を持って体感させられた。

幸いにも今は屋外、吹雪のせいで視界は最悪。速さで攪乱するのはかなり有効な手段なのだろうがそれは相手も同じ、この豪雪に身を隠して隙をついてくることなげ、相手にとってはお手の物と言ったところか。

「またお姉さんと戦うんだね……。今度は怪我しないように気をつけて戦ってよ?」

「その言葉、そのままそっくり返しますよ」

自らを畏怖する相手の感情が、相手に抱く自らの憎悪が彼女の力となり変換される。もしそれが本当だとするならば恐怖を抱くのは勿論のこと、彼女に憎悪を抱かせるのも厳禁ということ。ちまちまダメージを蓄積させていくのではないつまで経っても倒れてくれないだろう。となれば、気の毒ではあるが強烈な一撃で決着をつけるしかない、か。

「ねえ、お姉さん」

突然、声のトーンを落とす。

「あの人のことが心配で、ここに来たの?」

あの人？魔理沙、は流石にないとして、となると・・・

「霊夢さんのことですか？」

「・・・」

無言でコクと頷く。なんだかよく分からないけど、とりあえず話を合わせておいた方が情報は仕入れられるか？

「ええ、まー、そんなところですね。あの人ったらいつも一人で無鉄砲に行動してしまいますから、ははは」

「やっぱり、そうなんだ・・・」

どうしたんでしょうか、急にしおらしくなっていました。霊夢が今城内で何をしているのかは分かりませんが、霏々の様子を見ると・・・？

「彼女は無事なんでしょうか？」

「無事、かな。あの人が本気を出していなければ、だけど」

「あの人？」

「あっ・・・」

これは情報収集チャンス！どうやらまだこの異変には裏がありそうだ。

「まだこの城には強敵が残っているようですね。それと霊夢さんが今戦っていると・・・さしずめあなたたちは霊夢さんに助力しようとする者を阻止する役といったところですか」

返答はない。無言の肯定とみてまず間違いないだろう。・・・当初

の予定とは外れるが、そちらを取材に行った方が記事的にはおもしろい。そうだ。

「霊夢さんが心配なんですか？」

「え！？な、なんで、私は霊夢を助けに行こうとしてる人の邪魔をしてるんだから、心配だなんて・・・」

「はいはい、もうその声色でよくわかりましたよ。それならここは一つ見逃してくれませんかねえ、なんとか霊夢さんを助けてきてあげるから」

「・・・でも、そんなことしたら、ふーちゃんを裏切ることになって、それで、私」

「倒して追いついたってことにすればいいじゃないですか。もしくは倒されて突破された、とか。とにかく私に任せておけば霊夢さんは安全ですよ？」

困ったように首を捻る罪々。彼女にとって霊夢がどういう存在かはまだ分からないが、提示条件はかなりいいはず。魔理沙が担当しているふーちゃんとかいう妖怪との関係が少々気になるが、人ひとりの命に換えればどうってことはない。もっとも、霊夢が妖怪相手に命を落とすなんてことはまずないと思うが・・・。

「それが、必ずしも裏切りに繋がるとは限らないんじゃないですか？あなたたちが何を企んでいるのかは知り得ませんが、それで大事な人を失っては元も子もありませんよ」

否定も反論もなかった。手応えはこの上ない程つかめた。これなら、霊夢を助けに行くフリをして心置きなく取材ができそう。城に入ってから何かと運に恵まれていなかったけど、漸くツキが回ってきたようですね、ふふふ。

「ブン屋！助太刀にきたぜー！」

「ひゃい！？」

箒にまたがる白黒、その後ろにはなぜか着物姿の少女、霏々のいうふーちゃんが乗っていた。いやいや助太刀って、後ろの敵が見えてないんですかねあの人は。

「ふーちゃん！？どうしたのその傷！」

慌てて魔理沙が弁解を試みる。

「あ、えーつとだな、別に私が痛め付けてやったわけじゃないんだぜ？その、なんだ、ちよつとやり過ぎただけというか、な？」

「それ、フオローになってませんよ……」

あー、せっかく上手くいきそうだったのにとんだ邪魔が！助太刀っていうか、完全に敵サイドじゃないですか、全くもうあの魔法使いときたら……。

「霏々、その妖怪とは戦わなくてもいい」

「ふえ？」

お？

「私たちの負け。いくらあなたでも、この魔法使いとその妖怪の二人を相手するのは無理」

「・・・でも」

「気にしないでいい。それより、行くなら早く行った方がいい」
「!？」

吹雪が一層強さを増す空を見上げ、ふーちゃんと呼ばれる少女は物寂しそうな目を城の頂上へ向けた。

「間に合うといいけど」

意味深な発言。彼女は霊夢の実力を知らないのだろうか、それとも・・・いや、まさか。

まあどつちに転がっても私は取材して情報を得る、ただそれだけ。結果がどうこうものをいうわけでもない、新聞記者はあくまで外野ではないのだから。

「ごめんねふーちゃん、すぐに戻ってくるから。・・・いこう、天狗のお姉さん！」

「え？あ、あなたもいくんですか？」

「お姉さんひとりじゃ霊夢が心配だもん、私もいくよ！」

「ついでに私もいれば完璧だぜ。事情はよくわからないけどな、はっはっは」

「あー、頭が痛い・・・」

雪天城最上階。

床を覆う畳は既に氷漬けになり、また壁や天井も大部分が凍ってしまっている。もともとなにもない部屋だったが、分厚い氷で覆われることによつて更に物寂しさを感じてしまう。

だがそんなことは所詮些細な問題であつて、正面に立ち塞がる頭痛の種に比べればどうということはない。・・・まあつまり、それほどに彼女達、霊夢とさとりが戦っている大妖怪は例えようのない強大な相手だったのだ。

「で、どうしてくれるのよさとり。これじゃいつまで経ってもここから出られそうもないわよ?」

悪態をつく霊夢にあくまでさとりは冷静に対処する。

「ええ、そのようですね」

「のんきなこと言つてんじゃないわよ。こっちは寒くて、いつ凍え死ぬか分からないつてのに・・・」

「心配ありません」

・・・

これほど心を覗く能力が欲しいと思う相手は他にいないだろう、霊夢は密かに胸に抱きつつ口には出さず、今は共通の敵である少女をきつと睨んだ。

「まだやる気は十分・・・か。その気迫だけは認めざるをえないかもしれないけれど」

刹那、刃物のように先端の尖った氷の刃が霊夢の頬を掠めた。

「手をひくつもりはないわ。あなたたちはここで果てるか、私を倒すかの二択しかない。もっとも、後者は不可能に近いでしょうけど」
クスクスと不敵な笑みを浮かべて喉を鳴らす小雪。流石に頭にきたが、かといってやみくもに攻撃を仕掛けたところで無駄に霊力を消費する一方。さとりは何やら手があるようなことをほのめかしているが、正直アテにならないし・・・。

「もう、限界ですね」

ぽつりとさとりが呟いた。

「こちとらとつくに限界よ。それでも退けないんだからこうして戦ってんじゃないの」

「いきますよ」

その言葉とほぼ同時、霊夢の体が僅かだが宙に浮いた。

「え・・・」

小雪もそれに気づいたのか、霊夢に高速で接近しようとしたが、さとりが展開した結界によって弾かれてしまう。

一瞬、霊夢が強烈な光を放ったかと思うと、次の瞬間には綺麗さっぱり消えてしまっていた。残るは小雪の突撃の反動で俯せに倒れたさとりと、結界に弾かれ凍りついた壁にもたれ掛かる小雪の二人のみ。

この状況を快く思わないのは小雪の方だった。

「あなた、バカなの？」

「・・・」

「あの人間と協力して漸くそここの戦いができたというのに、自ら逃がしてしまう・・・。同じ手は二度と通用しませんよ？」

苛立ちか、焦りか、はたまた驚きか、今まで余裕を見せていた小雪からすれば想像もつかない表情。それを見てか、さとりは倒れた体をゆったりと起こしながら

「彼女には別にやらねばならないことがありますね。あなたの相手など、私一人で十分です」

「へえ、言ってくれるのね。人の力を借りねば何も出来ぬ地底の妖怪が」

「確かに、私は決して戦闘は得意ではありませんね」

転倒の衝撃でほつれてしまった服を直す。

確かに自ら言う通り、さとりは直接戦闘するのには向いていない。といってもそこらの人間や妖怪にそうは劣らぬ実力くらいなら持つてはいるが、小雪のような大妖怪を前にすればその実力差は歴然。小雪からしてみれば、さとりを相手にすることは赤子の手を捻るようなものなのだ。

「しかし」

だが、決定的にさとりが勝っている部分があるのもまた事実だった。いかなる状況においても冷静に判断し行動出来る洞察力、他人の攻撃をある程度真似て自分のものとする応用力。そして、それらを助長するだけでなく、敵の行動を先の先まで見通すことが出来る読心術こそが、幻想郷広しといえど唯一彼女にだけ許された特権なのだ。

「さとりの名にかけても、この場は譲るつもりはない！」

「・・・地底の主がそこまで言うなら仕方ない。本気できなさい、でないと思えぬわ」

部屋を守っていた結界が消え、瞬く間に室内は豪雪に飲み込まれた。

第二十一話 雪天城の乱 〱退けぬ戦い〱（後書き）

さとりってこんなキャラでしたっけ？・・・こんなキャラですよね
！

第二十二話 雪天城の乱 冬を統べる者 (前書き)

今日も霊城に風が吹く。

第二十二話 雪天城の乱 冬を統べる者

幻想郷、某所。

「……あら、帰ってたの」

真つ暗とは違つ、墨を零したように真つ黒い空間で影を纏う少女は
眩く。

「それで、外の状況はどうだったかしら？」

障害物のないこの場所は僅かな声でも遠くまで聞こえる。故に影を
纏う少女も音量を抑えて発言していた。

「……ちよつと魅魔、聞こえてないの？」

「ん、ああいや、聞いているよ。で、何の話だったかね？」

「聞いてないじゃないのよ、もう。何か問題でもあったの？」

「……洩矢の土着神つてのに知り合いがいるかい？」

なにやら作業をしていた影を纏う少女がそれを中断し、魅魔を凝視
した。

「その名、誰から聞いたの？」

「誰って本人さ。なんでも『洩矢の土着神が黙ってない』だそうだ。
やっぱり知り合いかい？」

「……」

影を纏う少女が見せる沈黙、それを自ら打ち破るまでは少々の時間を要してしまった。

「そう。まあ、そうよね。あの子が気づかないはずがなかったわ」

「随分と敵が多いようだねえ、それも軒並み強豪揃いときた」

「なあに？もしかして怖じけづいたの？」

「くくく、悪い冗談は止しな。八雲だろうとあの洩矢の土着神とやらだろうと、この私にやまだまだ及ばないさ。もしあんたが本気で邪魔者の駆除を望むんだつたら今すぐにも片付けるけど、どうするかい？」

「頼もしいけれど今はいいわ。下手に動いてこれ以上感づかれると後処理が面倒だし・・・この維持も結構大変なのよねえ」

そうかい、と肩をすくめて見せた魅魔。その様子を眺めていた影を纏う少女は、手の平を地面に向け臉を閉じる。奇妙な姿勢だが、魅魔がその意味を知るのはすぐ先の話だった。

真っ黒い空間が球体を回すように反転し、真っ白い空間へと早変わりしたのだ。

黒から白へ。明かりをつけたような情景の変化に思わず目を覆ってしまう。

「何度見ても慣れないねえ。私がここに来たときみたいに初めから二つに分けておけないのかい？」

「普段からあの状態の維持なんてやってられないわ。あの時はたまたま試験的に運用してたから分断していたけれど・・・」

「いや、いいさ。さしたる問題じゃあなかったよ。まあ私は言われたことを言われた通りにやるとしようかねえ」

「ふふふ、期待してるわよ？」

空にかかる七色の光に魅了され、つい手を止めて障子の外を見上げたくなるような、そんな光景。しかし彼女、古明地さとりにはそれすら許される余裕はない。

強敵、冬幻寺小雪。彼女の存在こそ知っていたものの、いざ一対一で戦いを挑まれてみると、噂をも軽く凌駕する実力を秘めていることは明確だった。凍りついた室内の冷気と水分を一点に集め、刃物より鋭い氷の刃を生み出す。それだけならその辺の妖怪にも出来そうなことだが、その完成度に違いがある。

極限まで鋭利に形作られた刃は投擲する際無駄な空気抵抗を受けない。無論それは弾速の上昇にも繋がるし、それ以上に摩擦を受けないという利点がある。通常、氷弾は着弾するまでに摩擦の熱で僅かながらも溶け、先端が丸みを帯びているのだが、彼女の氷弾は違う。最低限度の摩擦に抑えることで熱を纏うことなく飛来してくるそれらは、銀の刃と全く差がないのだ。

違う点といえばただ一つ。銀の刃は有限、氷の刃は無限ということだ！

「いくらあなたが他人の弾幕を真似ることが出来るとしても、この技術までは真似ることは出来ないでしょう?」

さとりが試すまでもない。氷の力は彼女の専売特許であり、例え撃

ち合ったところで力負けするのがオチだ。

「想起」

ならば、正攻法で攻めるまでだ。

「火焰後背」

さとりを取り囲むように現れた炎は渦を巻きながらその範囲を拡大する。どんなに鋭い刃だって届かなければ意味がない、氷には炎と昔から決まっているのだ。

「あの娘以外、炎の使い手は根絶やしにしたと思ったのだけれど・
・その炎はまた別の者のようね。それもあの娘にもひけをとらぬ鮮やかな色」

弱点であるはずの炎を目の当たりにして、花火観賞でもしてるような感想を述べた小雪。さとり自身も致命打になるとは思っていなかったが、この反応には流石に半歩後ずさる。
しかし、退路はない。退くにも退けない。ならばやるしかない。炎を出来る限り前方に集め、止められることのないよう火力を更に高める。
相手に動きはない。止めるという思考はあるようだが、漠然としていてどう止めてくるか分からない。氷の壁か、はたまた結界か・
・なんにせよ、構築されるまえに撃ち抜く必要がある。

非力な細い腕に力を込め、炎の塊を放った。

凄まじい反動でさとの体は宙に浮き、背後の壁に激突して止まる。

打ち出した炎はというが無事に着弾したようで、鉄柱のような火柱をあげて暫くその付近を焼き尽くしていた。

「無理は、するものではないですね・・・」

肩を押さえつつ苦い顔で患部を注視する。発射の衝撃に加え思いつきりの打撲、しばらく動かさない方が良さそうだ。

「見事なものね」

長髪を手櫛で撫でつつ、身なりを整えるその姿は見紛うはずもない。

「借り物とはいえ十分な威力、精度、そして私の對抗策を考慮した側面からの攻撃。どれをとっても文句の付け所がない」

「これは、完全に想定以上の結界ですね。私に打つ手はない、と」「意気込んでた割に諦めが早いよね。もう少し頑張ってもらわないと・・・」

「霊夢ー！」

突如障子を突き破って現れた筈にまたがった魔理沙が叫んだ。突拍子のない声にさととり、小雪が声のした方に目を向けると

「さあさあ！スクープを頂戴させていただきますよ！」

「うわ、お部屋がすごいことになっちゃって・・・霊夢は無事!?」
賑やかなことに後方から次々と人がなだれ込んできた。いつからこ
こは祭り会場になったのだろうか・・・そんな錯覚さえ覚える程で
ある。

「ちょっと、なんなのよ。今いいところなんだから・・・って、富
巫」

「巫女は？」

すたと畳に足をつけた富巫は、普段と変わらぬ単調な声でそう訊い
た。

「それならその妖怪の方が詳しいと思うわよ」

と小雪が一瞥した先には壁にもたれ掛かるさとり姿だった。外傷
は見受けられないものの、その体勢と表情が疲弊度合いをまざまざ
と表している。

「うおっ？さとりじゃないか。どうしたんだそんなところでまっ
り」と

「・・・あなた、まだこの城にいたのですか」

「いんや、たつた今外から入ってきたんだぜ？一応霊夢救済の目的
で来てやったんだがー何でお前がいるんだぜ？」

「そうでしたか。ところで、魔理沙さんは彼女からどこまで聞いて
いるのですか？」

それまで饒舌だった魔理沙が蛇に睨まれたように凍りつく。本人は
無意識なのだろうか、ごまかす仕草一つ見せず

「相変わらず嫌みな奴だぜ。心を読めばいいだろう」

さとりはくすりと喉を鳴らしながらも、苦痛の表情で幹部を更に強く押さえた。

「・・・状況が見えないわね、富亜。私たちは今取り込み中なのよ、話なら後にして」

「もう足止めはお終い。そもそもあなたにお願いしたのは巫女の足止めだったはず」

「う、確かにそうだけれど・・・」

無言の圧力というものは怖いもので、特に富亜のように無表情で見つめられるといくら強大な力をもった者でも畏縮してしまふ。反論はないようだ、ふうとため息にも似た吐息を吐き出すと今度はさとりを睨みつける。

「それで、その妖怪さん。霊夢はどこへ？」

「・・・私は外へ送り出しただけです。今彼女がどこにいるかは、彼女自身に聞いてみないことには分かりませんね」

「霊夢は、無事なの？」

富亜の側で縮こまりながら控えめな発言をする罪々。それに対しさとり。

「ええ、怪我一つ負ってはいないでしょうね。もつとも、その後彼女がどこへ行ったかによつては話も変わってきますが」

「あ、よかった・・・」

「・・・」

戦闘モードから完全に和やかな雰囲気になりつつある中、一人ひたすら何かを考え込む文。

せつかくの取材材料が一つ消えてしまったことは非常に残念だが、まだ一つあちらが残っている。こっちの方はもう終結気味気味だし、また誰かについてこられる前にここを後にしようか。

「・・・富亜と言いましたか、雪天城の主。おかげで助かりました」
「礼なら不要。手荒な真似をしたこちらの責任」

「なかなか話の分かる方ですね。それだけに、彼女に助力していることは非常が悔やまれる」

「・・・」
「あなたは彼女が何をしようとしているのか知っているはず。如何なる理由があれば、加担することは許されない」

微かに、富亜の表情が揺らいだ。

「黙っているつもりですか。・・・あまりこの幻想郷を見くびらない方がいい。あなたどころか、あなたの周りの者にまで災厄が降り懸かることとなる」

「・・・」

すっかり黙りこくる富亜を見てすかさず霏々が割り込んだ。

「ふーちゃんが何をしたっていうの！ふーちゃんに助けってもらって勝手なことばかり・・・」

噛み付かれるような言葉を受けるが、怯む様子一つ見せないさとり。再び何かを口にしようとした霏々よりも先にさとり。

「それもそうですね。これはどうも失礼致しました」

深々と頭を下げ一礼するさと。思わぬ態度に逆に引き下がってしまふ罪々を富亜が一瞥し、いつも澄まし顔に戻る。

「ですが覚えておいていただきたい。あなたが真に守るべきものは他にあるということを」

「感性は千差万別。あなたと私ではその価値に大きな差異が生まれる」

「・・・ではまた、いずれ」

最後にそう呟くと、さとりは静かに襖の奥へと消えて行った。その姿を追うものは、誰ひとりとしていない。

「気に食わない妖怪ね。富亜、ここで仕留めちゃってもよかったんじゃない？」

「彼女は心が読める。行動させておいた方がいい」

「ふうん・・・まあいいわ」

小雪が言うと、彼女の周囲を囲むように雪風が渦を巻きはじめる。雪を纏った竜巻といったところか。

「また何かあったら呼びなさい。力を貸すわ」

一瞬強烈に風が吹き荒れ、しかしてすぐに止む。視界を遮っていた雪が晴れると、すでにそこには小雪の姿はなくなっていた。

ただ虚空を見つめている富亜、彼女の側できよきよる辺りを見回す罪々。そんな状況で一人おいてけぼりを食らっていた魔理沙が漸く口を開く。

「よし、私はブン屋の取材を手伝ってや」

ふと後ろを見ると、きれいさっぱり誰もいなくなっていた。

「・・・ああそうかい。なら私は私なりに動いてやるぜ」

障子を突き破って空へ駆け出した魔理沙は、霏々が目で追う間もなく雲の彼方へと消えてしまった。

「ふーちゃん・・・」

「・・・」

取り残された二人は暫く、その場を動くことはなかった。

第二十二話 雪天城の乱 冬を統べる者 (後書き)

まさかの雪天城の乱終結。予定外ですが流れ自体はうまいこともつていけたんでよしとします・・・。

第二十三話 もう一つの異変（前書き）

物語もいよいよ佳境に突入した・・・はず。

第二十三話 もう一つの異変

「うわっ、霊夢さん！？どこから入ってきたんですか！」

目を開けると、口に手をあててあらまあと叫びをあげそうな表情の巫女がこたつでぬくっていた。

「ん・・・あら、早苗？あんたこんなところで何やってんのよ」

「それはこっちの台詞です。ここは守矢神社ですよ？」

「へ？」

即刻こたつへダイブした後ぐるりと首を一周。視界には暖炉、襖、障子、鳥居・・・確かに早苗の言う通りここが守矢神社なのは間違いないさそうだ。

うん、なんだけどさ。

「って、なんで私があんたの家にいるのよ！さっきまで城にいたつてのに・・・」

「はい？お城・・・ですか？」

そうだ、確かにさっきまで訳の分からない寒い城の頂上に閉じ込められていたはずだ。あの化け物みたいな強さの妖怪・・・小雪とかいったかな？あいつを懲らしめようとしてる最中、突然視界が真っ白になって・・・。

・・・あの陰湿妖怪が、ナメた真似してくれるじゃないの。一人であいつに勝てるわけないつてのに、本当に、馬鹿なんだから。

「戻るわ」

「はあ」

「はあ、あなたは気楽そうでいいわねえ。巫女なら異変の一つでも解決してみたらどう？」

「いえいえ、霊夢さんのお仕事取っちゃうのはなんだか悪い気がしますから」

名残惜しいがこたつから足を抜き、立ち上がる。障子を開けるとちらほら雪が降っていたが、城周辺ほどではない。

・・・とはいえ、恐らく城の外周には結界が張ってあるだろうし、再び1階から昇るのは流石に時間がかかりすぎる。はて、どうしたものか。

「待ちな」

立ち去ろうとする霊夢を止める声。守矢神社の神、八坂神奈子が縁側に凜然と立ち尽くしていた。

「城というと、もしかして雪天城のことかい？」

雪天城。確かあの城、そんな名前がついていた気がしなくもない。

ここからは城の姿は確認出来ないはずだが・・・この神はまーた何かやらかそうとしてるんじゃないかなろうか。

隠しもせず疑いの眼差しを向ける霊夢を見てか見ないでか、神奈子は諭すような口調で話しはじめた。

「私も詳しくは知らないんだけどさ。諏訪子のやつが妙に張り切ってたてねえ、この妖気と何か関係があるんじゃないかと思うんだけど」
「・・・妖気」

瞼を閉じる。

今日は色々あって疲労の蓄積した身体も、心も、絵の具が滲むようにじんわりと安らぎを得る。

そうすると、今までに感じなかったことが体内に流れ込んでくる。葉々の擦れる音、雪が放つ氷の匂い、城を囲っていると思われる境界の波動、そして。

・・・妖気。

小雪と思われるものが真っ先に鼻をつくように、次に城の主のもの、最後にうつすらと、得たいの知れない者の妖気が2つ。

恐らく妖気の漏洩をコントロールしているのだろう、非常に強力なものにも関わらず、精神を研ぎ澄ましてみないと分からないほどのものだった。

片方は、かつて感じたことのないような、邪念に満ちた妖気。感じることが出来るのは僅かな部分だが、それだけでも身震いを起こすようなものだった。

そしてもう一方だが、こちらも近年感じたこともない程のもの。だがこちらに関しては、どこかで似たような妖気を感じたことがあったような気がするのだが、密度が非常に薄いせいでよく思い出せない。

「どうだい？あんななら誰のもんか分かるかと思ったんだけどね」

「ううん、片方は多分会ったことないわね。こんなおぞましい妖気近づきたくもないけど」

「へえ、てーこった、もう片方は会ったことあるのかい」

「確証は持てないけど確か、いつだか感じたことがあったような・・・
なかったような」

と曖昧な反応を見せると、神奈子はうーんうーんと唸り始める。

「ん・・・よしわかった。どっちの方角から妖気が流れてきているかはわかるね？」

「ええ、そりやまあ大体は」

「そいじゃ話は早い。早苗を貸すから、とつとと解決してきてくれないかね？」

「ええ、そりや勿論・・・つて、え？早苗？」

「わあ！久々の妖怪退治ですね？大丈夫です霊夢さん、ズバツとサポートしてバシツと解決してやりますよ！」

「はあ、あんたも誰かさんと同じこと言うのね。・・・あいつよりは信頼出来るか」

「？」

「あーあーこつちの話よ。そうね、人手が多い方が私の負担も減るものね。でも手柄は全部いただくのでそのつもりで」

「あーんずるいですよお。つてあら？もう行くんですか？ちよつと待って下さいよー」

守矢神社周辺にも、吹雪がやってきた。

妖気が漂ってくるのは小雪や富亜のものとは、つまり城とは真逆方向。多少歩いたが、まだその発生源にたどり着く気配はなく、ただでさえ城を昇った後だというのにこの猛吹雪の道は流石に堪える。

「息つこうと足を止めると

「霊夢さん何やってるんですかー？こんなところでゆっくりしてたら誰かに異変解決されちゃいますよ？」

・・・多分それはないと思うが、何より早苗に急かされるのは癪なので仕方なく重い足を進める。

にしても、どこまでいっても雪を被った森森森。妖気を辿っているのだから間違いなく正解の道を進んでると思いたいが、こうも同じ景色が続くと本当に合ってるか不安にもなる。

「しっかし何も無いところねえ。こんな奥地まで来たことなかったけど、こりゃ来なくて正解だったわ」

「そうですか？私は好きですよこういうところ。晴れていたらごろーっとお昼寝出来そうですし」

「はあ、ホントあんたみたいのが黒幕だったらどんなに楽なことか・・・それはそれで大変か」

と、ただでさえ強かった雪が更に強く、雪崩のように襲い掛かってくる。

これは尋常じゃない。だがこの感じ、つい最近も体感したような・・・。

「・・・」

雪の中にうつすらと、衣装が白くて殆ど分からないが、ところどころ露出している肌のおかげで辛うじてそれが人型だと分かる。

それはゆらゆらと、やじろべえのように「ちらに近づいてくる。

「罪々？」

「霊夢・・・無事だったんだね？」

「そりゃまあ、おかげさまでね。あんたにはまんまとやられたわよ」

「あ、う、その・・・」

「あれは・・・悪い妖怪さんですか？」

「ええそうよ、だからちゃっちゃとやっちゃいなさい。あんたも少しは身体を動かしておいた方がいいわよ」

「妖怪退治ですね！ふふふ、久々に燃えてきましたよ！」

お被い棒を念入りに磨いて鼻を鳴らす早苗。ある意味霊夢に似て好戦的である。

「あ、その、霊夢・・・」

「てりゃー！！」

お被い棒片手にあらぬ突っ込んだ早苗。幸い雪がクッションになったようで、そのままずっぽり雪に埋まる。やる気があるのかないのか、首を捻らざるをえない。

しばらくすると身をふるりと震わせて、早苗は自力で雪から脱出。心底嬉しそうな顔で

「やりました！極悪幽霊さんを成仏させましたよ！」

季節は真冬だが頭だけは春のようだ。

「幻影を見せられてるだけよ。本体はそっちに・・・って、あれ？」

そう言っつて霊夢が首を向けた方向にはただ木々が連なっているだけ

で人っ子一人いなかった。

「なんですかー、そっちにだって誰もいないじゃないですかー」

「う、煩いわね。おかしいなあ、さっきまでそこにいたんだけど・
・逃げちゃったみたいね」

「ふふん、私の溢れ出るカリスマ性に恐れを成したということですね！見ましたか私の実力！」

「ええ見えたわよ、あんたが雪に突っ込んでる最中、下はめくれ放題だったからね」

「！！！！？」

カリスマ（笑）がなにか喚きながら突進してくるのは軽くスルーとして。

罪々は結局何をしにきたのだろうか。あの子なら襲ってくるはずればもっとうまくやるだろうし、そもそも敵意はなかったようにも感じた。

そういえばなんか名前を呼ばれてたような……？もしかして富亜あたりから伝言でもあったのか？だとするとまずいことをしたかもしれない。

いや、敵から伝言とかまず信用ならないか。特にあいつの場合は、ね。

「そもそもそういうのは気づいてもそっとしておいてくれるのが優しさでしてね……ちよつと霊夢さん！聞いてますか！？」

「あーはいはい先に進むわよー」

「聞いてなーい！！！」

はあ、この先すっごく不安。

城上部での戦いも終わり、漸く一息つきながら小路を歩くさとりを、耳障りな鈍い音とともに出迎えたのは

「あら、随分とおつかれのようねえ。そんな身体で戦うなんて、寿命縮むわよ？」

「おやまあ八雲さん。そちらでも一悶着あつたみたいですね」

ふうと一つ小さくため息をついた後、さとりの眼光が急に鋭い刃のように変わった。

「いいお知らせと悪いお知らせがあります。どちらから披露しましょうか？」

「・・・それは勿論、私は朗報から聞きたいわ」

「城の厄介事が片付きました。霊夢さんも無事、脱出に成功しましたよ」

想定はしていたのだろう、紫はさして驚く様子も見せず、傘に積もった雪を払いながら続きを聞く。

「で、もう一方は？」

一瞬、さとりが無言になる。

「小雪が現れました」

僅かに眉をつりあげる紫だが、しかし取り乱して焦ることはなかった。

「ふうん、確かにそれじゃ、あなたには荷が重かったでしょうね。それで現状は？」

「彼女は裏で何が起きているのか把握していないようでした。なので今後の展開次第ですが、こちら側につく可能性も無きにもあらず、といったところです」

しかし、とさとりは続ける。

「城の主とかなり親密な関係のようで、彼女を裏切るようなことはまずないと言えるでしょう」

「つまり、主の方をこちらに引き込めればいいのね？」

「結論からいうとそうなります。ですが、彼女がこちら側に引き込むというのはかなり厳しいでしょうね」

「・・・あの子ね」

こく、と小さく頷くさとり。今まで平静を装っていた紫も、若干苦い顔で傘を閉じた。

「確かに、厳しいわね。閻魔に話だけでもしてみようかしら」

「あなたの助言を聞き入れるはずありませんよ。無論、私のもものも

ですが」

「・・・そうそう、あいつ、厄介な奴と手を組んだみたいだけど、そいつはどう処理しようかしら？」

「厄介な・・・いいえ八雲さん、彼女はあなたが思うほど厄介な奴ではないかもしれません」

「へえ、というと？」

「直接対面した訳ではありませんが、気になる事を仕出かしてしましてね。こちらの動向次第では・・・もっと突っ込んで言えば、あゝ人間の行動によっては、敵にも味方にもなり得るでしょう」

「人間・・・霊夢のこと？」

「いえ、それよりもっと彼女と密接な関係を持つ人間がいるのではないですか」

「・・・！」

表情をすぐさま扇で隠し、そのまま考え込むように足の裏で数度地べたを叩く。

会話がなく、強風と雪のたたき付ける音のみが耳元で交差する。互いに良案は出まいかと考察しているのだろうか、しかしなかなか言葉は出てこなかった。

数分過ぎ、幾分か風が穏やかになりはじめた頃、

「この非常事態に躊躇う道理はないわね。素直に言うこと聞いてくれるか・・・あなたはどのなの？」

「私も八雲さんと似たようなものですよ。城の中で色々ありましてね、特に今は友好的に対話というのは絶望的でしょう」

「分かったわ。その件は私がなんとかする。あなたは霊夢達を」

会話を断ち切るように、再び暴風が吹き荒れた。

第二十三話 もう一つの異変（後書き）

れいさなは扱いやすい！しかも可愛い！
比べてさとゆかの胡散臭さといったらおっとこんな時間に誰か

第二十四話 霧雨魔理沙、推して参る（前書き）

魔理沙回。なんだかんだ不遇な扱いを受けていたがついに光が？

第二十四話 霧雨魔理沙、推して参る

「こんちくしょう、皆してさんざんっばら私をのけ者にしやがって・・・」

悪天候の中、一人愚痴をこぼしながら空をゆくのは白黒魔法使い魔理沙。新聞屋の天狗と協力するはずが、気づいたらいなくなっていた為にかなり不機嫌である。

「ふん、まあいいさ。こうなったら何としても師匠を探し出して、問い詰めてからさっさと異変解決してやるぜ」

紅魔館上空。城からはかなり掛け離れた土地まで飛んできたようだが、漸く高度を落としつつ着地を試みる。

「って、ぬおわ!?!」

降り積もる雪に足を取られ華麗なるダイブ。本日二度目の白魔理沙となる。

「ぶるるる。全く今日は厄日だな・・・」

ふと頭を上げると、雪を蓄えた紅魔館の姿。紅い館が真っ白になっている貴重な光景だが、魔理沙にとってそんなことはどうでもいいことだった。

「しっかしまあ、城が直接異変に関係ないなんざ、なーんで師匠が知ってたんかなあ。あの富亜って奴のことにも妙に詳しくかつたし・・・」

遡ること数時間前、ちょうど魔理沙が城の攻略に取り掛かろうとしていたことである。

「よっしゃー異変解決だぜ柵ぼただぜ！一気に最上階まで昇ってお宝ゲットだぜ！」

何者かにこじ開けられた結界を見て意気揚々と城に乗り込もうとする魔理沙。その凶々しさたるや、神社や紅魔館に土足で踏み込む彼女にとっては最早トレードマークと言えるかもしれない。入られる側としては迷惑も甚だしいが。

とはいえその行動力が、かつて少なからず異変解決に貢献したのも確かではある。

「おおっ？久々に会ったと思えば立派に異変解決してるじゃないかい、我が一番弟子よ」

不意に聞き覚えのある声が城の内部から聞こえてくる。魔理沙にとってそれは懐かしいようで、また親しみのあるものでもあった。

三日月の戟を携えて、珍しく地に足をつけてかっかつかと笑うその姿を見て、思わずにやけてしまうほどだった。

「魅魔様！暫く顔見せてくれないからてっきりくたばったかと思っ
てたぜ！」

「アンタより先にくたばったりはしないさ。それと魅魔様じゃなく
て師匠と呼びなとあれほどいったんだけどねえ」

「おう、すっかり忘れてたぜ。忘れるくらい顔見せてくれないんだ
もんなあ。どこで何やってたんだ？」

「まあ、ちよいとね」

歯切れの悪い返答だったが、魔理沙は気にも止めることはなかった。

「そついや師匠はなんでここにいるんだ？もしかして私と同じ、お
宝巡りか？」

「ああそうだった。アンタに助言しにきたんだった」

「助言？」

さも不思議そうに首を傾げる魔理沙に、魅魔はバツの悪そうな顔で
頭を掻きつつ、

「いやあね、これから異変解決だーってところでなんなんだけどさ、
どうやらこの城、異変とは関係ないらしいんだよ」

「・・・んあ？関係ないって、この城が一晩で建ったこと自体が異
変なんじゃないのか？」

「あー、そうっっちゃそうなんだけどねえ、なんというべきか」

更なる歯切れの悪さに、流石に魔理沙も何か問おうと口を開きかけ
るが、それよりも先に魅魔。

「とにかく、ここはのぼるだけ無駄だってこつたあね。いくら上へ
いったところで、大して力のない座敷童しかいないよ・・・確か、

「富亜とかいったかね」

「富亜？聞いたことないな。つーか座敷童って幻想郷にいたんだな・・・」

何故そんなことを知っているのだろうか、そんな疑問を持たなかったといえば嘘になるが、それを口に出すことはなかった。きっと何か、言えない理由でもあるんだろう。

魔理沙は疑うことはせず、静かに頷いてみせた。彼女は誰よりも魅魔を信頼しているのだ。

「うーん、でも登るのはやめないぜ？霊夢の奴がもう既に上へ行っちゃまったみたいだし、気になるっちゃ気になるからな」

「そいつは構わないさ。別にのぼるのを止めに来た訳じゃあない。たださつき言ったことは覚えておいて損はないからね」

「おう！助かるぜ魅魔様！」

「だから師匠と呼びなと何度・・・」

ぶつぶつ言いつつも、

「変わらないねえアンタは・・・」

その表情はどこか、憂いを帯びているようにも見えた。

「ちょっと、人の家の庭で何してるの？」

服に纏わり付いた雪を振り払っていると、不意に後ろから声がした。魔理沙にとっては聞き慣れた、控えめな声である。

「おおうパチュリー。珍しいな、こんな雪の日に外に出てるなんて」「ちょっと気になることがあって。あなたこそ何か用？」

「いや、ちょっと異変解決の途中休憩だぜ。ここまでの吹雪じゃ長時間飛んでるのも辛くてな」

「・・・入りなさい」

パチュリーに導かれるままにやってきたのは紅魔館でも指折りの規模を誇る巨大施設、図書館。これだけの量の本をパチュリーとその使い魔二人だけで管理していると聞けば誰もが驚くであろう。利用者が殆どいないので、実はそこまで難しいことではないらしいのだが。

「お前から招き入れるなんて珍しいこともあったもんだ。雪でも降

るんじゃないか？」

そんな問い掛けは軽く無視され、

「異変解決、とか言ったわね」

パチュリーは早速本題に入る。

「んあ？なんだ、もしかしてパチュリーもなんか気づいてたのか？」

「・・・先刻、紫があなたを探しにここを訪ねてきたわ」

ここまでお気楽状態だった魔理沙の目つきが変わる。紫といえば城にも現れていた。魔理沙の見解を聞くだけ聞いて、後はこれ以上首を突っ込むなと釘を刺していった。

その紫が、今更何の用だというのか。冷やかしだとしてもわざわざ探すことはないだろうし、いよいよ一人じゃ手がつけられないような状況になったってことだろうか？

なんにせよ、助ける道理はない。一度戦力外通告を出したんだ。そんな相手に付き合っつてやれるほど、魔理沙は人がよくない。

「そうか」

一度短く言葉を切った。

「他には何か聞いてないか？あるいは伝言とか残していかなかったか？」

「伝言はなかったけど、一つ気になる事を言っただわね。確か・・・」

思い出すそぶりを見せる。覚えてないってことはそこまで気になっ

てないのかもしれない。

「……悪霊がどうのこうの、とか」

「それ、本当か!？」

突如机に乗り出して聞いてくる魔理沙にパチュリー思わず椅子を後ろに傾けて倒れそうになったが、寸でのところで止めて返答する。

「ほ、本当よ。でもそれがどうしたっていつの?」

「……いや、すまない。いいことを聞かせてもらったぜ、サンキユーなパチュリー。そうとなれば早速行ってみないと!」

「ちよつと、まだ本題に入って」

「そんじゃな!恩に着るぜ!」

と言い残すとさっさと箒にまたがり、颯爽と図書館の窓を突き破って吹雪の中に消えていった。

「……どう転ぶかしら、ねえ、八雲紫」

「あらあなた、いつから感づいてたの?」

「最初からよ。あなた程の妖気に気づかないのは魔理沙くらいなものだわ」

「うふふ、それもそうね」

今までただの本棚だった場所がブラックホールに吸い込まれるかのように消えてゆく。その姿が完全に確認できなくなっただと思えば、

そこに立つのはお馴染みの大妖怪、八雲紫。

「盗み聞きというのはあまりいい趣味ではないわね。しかも普段の魔理沙と同じ不法侵入」

「入館許可をいただこうと思ったたら門番がいなかったのよ」

「あいつクビね」

「にしてもやっぱりあの子、魅魔から何か話を聞いてるわね。あの驚きようつたらもう、隠す気でよかつたわ」

「あなたがいるとは夢にも思わなかつたのでしょね」

「あーそうそう。入館ついでに一つお聞きしたいんですけど」

明らかに怪しげな笑みで聞いてくる。めちやくちゃ答えたくなくかつたが、悔しいことに逆らつたところでとても敵う相手ではない。

「魔理沙とはどういうカンケイ？」

「・・・」

「とゆーのは冗談でえ」

今すぐにでも殴り倒してやりたい。魔法書の角とかで。

「あなた、確か炎の魔法も得意だつたわよね？」

「・・・一応出来はないわね」

「それじゃその、詠唱用の魔法書とかあつたらちよーっただけ貸してくれないかしら？」

「ご立派な妖怪様の割には魔理沙みたいなこと言つたのね。そんなもの持つて行つたところで、魔法の心得もないド素人には使いこなせないわ」

「心得がなければ、ね。ふふふ」

もう何を考えてるかはどうでもよくなってきた。とりあえず早いところ魔法書渡して帰ってもらわないと、ストレスと気持ち悪さが溜まって喘息を起こしそうである。

しぶしぶ本棚を漁り、そうして発見した古汚い本を一冊、紫に手渡す。

「随分汚い本ねー・・・いやんカビ臭いっ」

「いらぬなら返して」

「あーんうそうそ、後で必ず誰かが返しにくるから、心配しないでちょうだいね。それじゃ、この辺でお暇」

等と言うと境界にすっぽり体を埋め、ばいばいと手を振るとあつという間に消えてしまった。なんというか、本当に面倒臭い妖怪である。

「・・・はあ、また窓の修理ね」

破られた窓から吹き込んでくる雪風に直撃しながらパチュリーは一人物寂しそうに呟いた。

第二十四話 霧雨魔理沙、推して参る（後書き）

霧雨先生の次回作にご期待下さい！

第二十五話 神と崇められた妖怪（前書き）

魔理沙さんのお話はまだまだ続きます。

第二十五話 神と崇められた妖怪

紅魔館の図書館を全力で後にした魔理沙は、そのまま吹雪の中を箒にまたがり翔けてゆく。その機動は定規で引かれた線のように真っすぐでブレない。

「おーおー、言われてみれば魅魔様の妖気がしっかり漂ってるぜ。こんなにピンピンに出すなんて霊夢に初めて会った時以来だが・・・」

その時は人類の征服だなんて大それたことを暇つぶしで考えていたらしいが、それは過去の話。最近は弟子の魔理沙にすらまるつきり姿を見せず、どこかで優雅な隠居生活でも送ってるのだからとてつきり思っていた魔理沙だが、この時期に顔を出すのは些か不可解ではあった。

もし、万が一にも城の異変がカモフラージュだったとして、何か大規模な異変を魅魔様が企んでいるとしたならば、私はどうすればいいのだろうか。いつも通り異変解決の為、師匠である魅魔様を退治するべきなのか？それとも、師匠から受けた恩を返すべく、魅魔様に加担して霊夢達に立ち向かうべきなのか？

そんな疑問が魔理沙の頭を締め付け続けるが、しかし箒の先が向く方向に迷いはなかった。考えるよりまず行動。自分が何をするかなど着くまでに、最悪着いてから決めればいいのである。

・・・しかし、半分は既に彼女の中で結論が出ていた。

「すげえ！かつこいい！今のはなんなんですか！？」

煌めく光と熱の光線が横切り、赤髪の少女は目をきらきら輝かせてはしゃいでいた。

「光の魔法さ。強大な光と熱を放つ魔法は力の象徴、アンタみたいな人間の子供でもこいつを見せつけてやれば並の妖怪じゃ尻尾巻いて逃げるだろうね」

「これ、私にも撃てるかな・・・」

「ああ撃てるとも。魔理沙は努力家だ、全く素質のなかったアンタが、たった一ヶ月で空も飛んでみせたんだ。こいつだっていつかは習得出来るさ」

「全く素質が・・・やっぱ私ってばダメな魔法使いなのかなあ」

「そりゃー、素質だけ見たら普通の人間以下だな、はーっはっは！」

「うー、そんなにはつきり言わなくても・・・魅魔様のほかあ！」

どこにあるとも分からぬ魔界の片隅で、魔理沙と呼ばれた小さな少

女は漆黒の衣装に身を包んだ悪霊を『魅魔様』と呼んだ。

魔界は本来、自立も出来ていないような子供が足を踏み入れるような場所ではない。数えるには多過ぎる程の妖怪、魔物といった、魑魅魍魎の類が常時徘徊しているのはもちろんのこと、人間には厳しい障気が蔓延しているのだ。よほどのことがない限り人間が訪れることはない。

だが、この障気には恩恵もある。普段ならまともに扱えないような高度な魔法でも、この障気の中では比較的容易に詠唱することが出来るのだ。

よって人間でも、魔法使いを志す者達にとってはよい修行場として昔から利用されることもある。

とはいえ、妖怪等に襲われて命を落とす者も少なくはない。そんな厳しい場所だからこそ、ここで修行した人間は強力な魔法使いに育つのだという。

ただ、魔理沙の場合は少々状況が違っていた。

「今日の晩飯は魔界スープだよ。魔理沙は大盛りがいいんだっかね？」

「う・・・トカゲのスープはもう懲り懲りだぜ。今日も自分でキノコのスープ用意しといたから遠慮しときます！」

「キノコねえ。私から言わせてみればそっちの方が食べたもんじゃない気がするが・・・人間は分からないねえ」

どこにあるともしれぬ魅魔の屋敷の大部屋で、2つの大きな皿に盛られたスープはどちらも不気味な色をして、とても食欲の湧く料理ではない。・・・だが魔界ではこれが普通らしく、味は意外と美味しかったので魔理沙も似たようなスープを研究しては、毎日自分で作っている。

というか、自分で作らないと魅魔の作ったトカゲなり蜘蛛なりの料

理を食べるハメになるのが嫌だからだつたりするのだが。

「それにしても今日見せてくれた魔法は凄かったなあ。名前とかついてたりするんですか？」

「あーん、オリジナルの魔法だから、特に名前とかはついてないねえ。魅魔スパークとか？」

「それじゃー私が習得した時見栄えが・・・その時は魔理沙スパークに改名すればいいのか！」

「いや、冗談のつもりだつたんだけどねえ・・・そうだ！アンタがあ魔法習得したら自分で名前を決めればいいさ。どうせ私はもう少し小回りの効く魔法しか使わないからね」

「それって、私に魔法くれるってこと!？」

「ああそうとも。まあ膨大な魔力を要する魔法だ、習得するには時間がかかるだろうけどねえ」

「・・・い」

年齢相応の、無邪気な笑顔を見せつつ

「いやっほーう!!そういうことなら早く、夜の修行へ行きましょうぜ魅魔様！」

「まだ飯も食べ終わってないってのに焦ることはないさね。腹が減っては修行は出来ぬ」

「だつたら食いながらだぜ！」

「あ、いや、その発想はなかったあよ。ちよちよいと！一人で行ったら妖怪に食われてしま・・・まったく仕方のない娘だねえ」

「おや、久しい顔だね」

空飛ぶ白黒の存在に向けてこっちこっちと言わんばかりに手を振って来る者が見えた。

「なんだいつれない顔して。そりゃーこの吹雪じゃ参っちゃうのもわかるけどさー」

「おう、誰かと思えば神様だっけ？それとも仏様？」

「神様だよ。洩矢の諏訪子！名前くらい覚えていてほしかったなあ、魔法使いの霧雨魔理沙さん」

目玉の二つついた奇妙な帽子が飛ばされないよう片手で押さえつつ、もう片方の腕で鉄の輪っかを回しながら近づいて来る。

「おいおいそんな物騒なもので私をどうする気だ？」

「あー、違うの違うの。これは飛行用の鉄輪でね、決して君を襲おうなんて思っていないから安心してよね」

鉄輪で飛ぶ神様。何とも奇妙である。

「どこかの悪霊といい八雲の大妖怪といい、今日は色んな奴が暗躍してるねえ。こいつは私もうかうかしてられないや」

「・・・悪霊だって？」

らを個々に統治していた神様がいるんだよ。統一される前の世界の形態を形作っていたと言っても過言じゃない神様がね」

諏訪子の表情が若干険しくなったようにも見える。

「神様といつてもそいつは元は妖怪だったんだ。ただ恐ろしいまでの妖力を持っていたその妖怪は人々から畏れられ、次第に崇められるようになり、いつしか神様と呼ばれるようになったのさ。私も当時は小国の崇り神として少しは有名だったから、そいつのことはよく知ってるんだけどね」

「神奈子に続いてお前の自慢話でも始める気じゃなかるうな？」

「えへ、ばれたかー」

「えへ、じゃないだろ」

ボケたり真面目になったり、魔理沙としてはやりづらいことこの上ない相手だったが、何か知っているような口ぶりである。聞いておいて損はない。

「で、その妖怪は当然後から入ってきた大和の神々を快く思わないでしょ？だから二つの勢力は、数多の土地を全て焼き払う程激しい争いを起こしたのさ。なかなかいい戦いをしたみたいんだけど、神奈子達の神力には流石に敵わなかったみたいでね、結局そのまま敗走して、つい最近まで消息を絶ってたんだ」

「つい最近まで？つーことは、今はどこにいるか分かってるってことか？」

「どこにいるかー、までは分からないんだけど、君も感じないかなこの妖気」

他人の妖気など、今まで気にもかけていなかったためはっとさせられた。それと同時にすぐ、帽子に手を当てて俯き気味になる。

幕に注いでいた魔力も最小限に抑え、耳や心を澄ませます。

「・・・」

魅魔の妖気と全く同じ方向からもう一つ、感じたことのない妖気をはっきりと捉えた。

「今まで足どりも掴めなかったのに突然この幻想郷に現れた、しかも昔争いを繰り返した神奈子や私がこっちに来てすぐにね。これが偶然だと思うかい？」

確かに、出来すぎた話ではある。強大な妖怪ほどプライドも高い。敗北したままその妖怪の気が済むとは、とても思えない。

「でもよ、それならもっと早く、外の世界で復讐なりすればよかったじゃないか。なんで今更になってここでやるうとするんだ？」

「理由は2つ。まず当時の神奈子達はとてつもない信仰を得ていたから、例え再戦したところで勝ち目がないのは分かっていたんだろうね。比べて今の時代なら、外の人間は神様ではなく科学を信仰するようになった。神奈子達の神力も衰えていると踏んだんじゃないかな？」

「つつても、今は山の妖怪達から結構信仰集めてるんじゃないかな？」

「当時の信仰に比べればたかが知れてるよ。それともう一つ、外の世界は再び小国に分けるには広すぎるってのがあるね、単純だけど。敗走して少なからず力を失ったその妖怪じゃ再びそれを成し遂げるのは厳しかったんだと思うよ。その点この幻想郷なら大して広くもないし、統治するにはうつつけの場所だと思わない？」

雪天城は異変を隠す為のカモフラージュ、本当の異変は別にあるのではないか。以前魔理沙はそう推測し、紫にも伝えた。もしその隠された異変が諏訪子の言う、幻想郷の統治だったとしたら？城で散々時間を潰した霊夢達はまんまとその妖怪に騙されていたのだとしたら？そして、このことにまだ誰も気づいていないとしたら？

「・・・でも、そんなことを何でわざわざ私に話すんだ？」

ある意味一番の疑問だったことを率直にぶつけてみたところ、諏訪子は思い出したように手の平を拳で打った。

「・・・悪霊、確か魅魔とか言ってたっけかな？あいつと君は一体どういう関係？」

「！」

雪混じりの風が、その声を掻き消した。

第二十五話 神と崇められた妖怪（後書き）

結果的に結構重要な回になったような気がしなくもありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6885i/>

東方雪天城 ~ The Curious Castle Of Snowscape.

2010年10月14日07時08分発行